

役儀出精の
年寄魚屋喜
兵衛外壹名
に銀を賜ふ

其方共義、兼る役義出情のせり、町内入用等雜費無之様、心ヲ用ひ相減、公支出入等も可及筋
を、不事立様掛ヶ合遣シ、爲致下濟、諸吏取締方行届趣相聞間譽置、爲褒美銀壹枚ツ、差遣ス、
彌此上相勵メ、

魚屋 喜兵衛
堂嶋新地中貳丁目兼帶年寄
同 中三丁目

河内屋 彦兵衛

南谷町中嶋屋德兵衛借屋

松本屋利助女房

貞婦のぶに
錢を賜ふ

其方義、利助方嫁付後、同人義濕病差發、起臥自由も難相成ニ付、他家へ賃仕吏等ニ被雇參
居てり、介抱万端不任心底として、仕來り職稼相止、生魚買調、近邊辻合れり毎夜深更まで致
燒賣、晝夜相稼罷在なると云、女も手業にて涉り鋪儲も無之、困窮彌増、難澁中永々藥用介
抱懇ニ爲行届ひニ付あを、追々利助義快方ニ向うなると云、何分長病後ニ義ニ付、未タ一分
稼も難出來ニ付、大切ニ取扱、其方諸吏引請心配いふ、渡世取續、專貞節を竭ス段、寄特
由相聞ひニ付譽置、爲褒美鳥目三貫文取らせ遣ス、

十人兩替屋

天王寺屋五兵衛 平野屋仁兵衛 鴻池屋庄十良 炭屋彦五郎

錢相場引立
に盡力せる
天王寺屋五
兵衛外十二
名に銀を賜
ふ

其方共義、米價高直上、錢相場致下落ニ付あり、其日過り者共取續方差支趣相聞ひニ付、
右相場引立方ニ義ニ付テ諭し趣意厚相弁、銘々損益ニ不抱、錢高買入、并外兩替屋共へも守談、
錢相場引立方掛引ニ義、專ラ骨折り段、寄特ニ義ニ付一同譽置、銀壹枚ツ、差遣ス、

兩替屋之内

高麗橋三丁目	三井元之助	今橋貳丁目	鴻池屋德兵衛	南濱町	灰屋平右衛門	七郎右衛門町壹丁目	天王寺屋彌七
玉水町	加嶋屋安兵衛	今橋貳丁目	鴻池屋伊助	尼崎壹丁目	竹川彦太郎	同所貳丁目	米屋伊太良
瓦町貳丁目	米屋分兵衛	淡路町壹丁目	米屋常七	瓦町貳丁目	米屋太兵衛	淡路町貳丁目	米屋儀兵衛
京橋四丁目	米屋三十良	近江町	米屋喜代松	尼崎町壹丁目	加嶋屋作二良	安土町壹丁目	安土町壹丁目
尼崎町壹丁目	鴻池屋重二郎	安土町貳丁目	錢屋清右(左)衛門	塩町三丁目	小橋屋彦九郎	安土町五丁目	安土町五丁目
北堀江四丁目	加賀屋林兵衛	立寄堀四丁目	近江屋權兵衛	備後町四丁目	錢屋佐一良	南久寶寺町三丁目	南久寶寺町三丁目
瓦町貳丁目	川崎屋三右衛門	高麗橋壹丁目	嶋田八郎右衛門	今橋貳丁目	平野屋孫兵衛	石灰町	錢屋佐兵衛
農人橋貳丁目	山本屋伊右衛門	上八町	越後屋善五(大)郎	安堂寺町貳丁目	丹波屋忠兵衛	長町七丁目	山家屋勘兵衛
南堀江四丁目	播磨屋忠兵衛	日本橋貳丁目	天満屋德兵衛	南本町貳丁目	紀伊國屋正三郎	大豆葉町	境屋治郎兵衛

御觸及口達 嘉永四辛亥年

同町 山本屋金兵衛 同町 和泉屋次郎兵衛 同町 繪具屋惣兵衛 京町堀壹丁目 炭屋大治良
 龜山町 越後(佐渡)屋又兵衛 同町 大和屋重兵衛 同町 小西屋八兵衛 中津町 和泉屋喜兵衛
 同町 荊屋清兵衛 同町 和泉屋善兵衛 同町 帶屋伊兵衛 本町三丁目 和泉屋宗兵衛
 同町 柏屋平兵衛 同町 扇屋又兵衛 同町 糸屋太兵衛代判 同町 大庭屋平兵衛
 同町 布屋甚助 同町 菱屋藤兵衛 南本町三丁目 加納屋彌右衛門 同町 市物屋安兵衛
 本町貳丁目 金原屋源兵衛 同町 布屋新太(三)郎 同町 小山屋新兵衛 同町 布屋治助
 同町 袴屋定助 同町 布屋善助代判 同町 大菱屋平二郎代判 同町 小澤屋新六代判 同町 治兵衛
 同町 河内屋藤兵衛代判 同町 利屋才助 同町 錢屋小兵衛 同町 大和屋作兵衛
 同町 和泉屋又市 同町 大和屋文助 同町 布屋長二郎代判 同町 郎 同町 山城屋佐兵衛
 同町 布屋作兵衛 同町 嶋中屋勝之助 同町 鎊屋利兵衛 同町 山城屋庄兵衛
 中津町 松屋儀右衛門 龜山町 池田屋佐一郎

錢相場引立に盡力せるに盡力せる加島屋久右衛門外七名に銀を賜ひ其名餘八十二を賞す

其方共義、米價高直上、錢相場下落致スニ付あり、其日過シ者共取續方差支ル趣相聞ルニ付、右相場引立方ニ義、十人兩替屋共(中)論、又觸達ニ趣等厚相弁、銘損益不抱、錢高買入、相場引立方ニ義専心掛ハ段、(奇)特ニ義ニ付、久右衛門作兵衛ハ譽置銀壹枚ツ、久左衛門善五郎宗十郎市之助次郎吉金兵衛ハ譽置銀五兩ツ、差遣ス、外八拾人(貳段)ハ譽置ニ見ト、(御觸書承知印形帳)

○南組惣年寄の副書
 日付は四月晦日なり
 關五八四 五月二日 去戌五月九日、淺草元鳥越町治郎右衛門店兵藏妻みよを致殺害逃去ハ、

日雇吉藏人相書ニ事
 關五八五 五月三日 美濃路稻葉宿困窮ニ付、人馬賃錢割増ニ事六〇八一を見よ、
 關三三三 五月十八日 市中立廻ハ無宿并非人共ニ内、病氣又ハ老幼シ者、或可及飢渴者共

去戌年ニ儀、異作ニ國ニ多、一般ニ米價高直ニ相成、諸人致難儀ハ趣ニ付あり、最寄國ニ等ハ無宿并野非人共追々當表ニ集來、土着同躰ニシモノ一同多人數相集、右ニ内ニ如何ニ後其日を送兼ハ躰ニシモノ不少様子相聞、不便ニ至コル、其上右躰シ者立別、所々町家門ト先等ニイ、食物杯乞ハ内ニ、出來心ニシ目間見合、盜相勤ハ仕義ニモ移易、然而已なら店セ商ハ等ニ摩(邪魔)ニ相成、町家あひても可致迷惑義ニハ上ハ、旁此節市中立廻ハ無宿并非人共ニ内、病氣又ハ老幼ニシモノ、或可及飢渴ニモ躰シ者杯、組ニシモノ廻リ先ニ見掛次第、高原溜ハ差遣、當分同所ニ差置、食物其外ニ義ハ、溜預シ者同様取斗遣ハ條、其段心得ニシ決テ聞置ハ事一ニ見ヨ、(御觸書承知印形帳)

○南組惣年寄の副書日付
 五月十八日未中刻なり、
 關五八六 同
 關三三九 六月朔日 地車大鼓・絲リシモノ等ニ飾又ハ藝者ニ衣裝、自今木綿晒を可相用、右届御觸及口達 嘉永四辛亥年 一九五五

近國の無宿并非人大阪に集る
 無宿并非人を高原溜へ收容す

出上及見分事、并地車行逢節、曳違と唱、事六ヶ敷ヤ掛間敷事八に同じ、

補達 七五 同日 諸國貳百石以上廻船、石數船主船頭と名并江戸廻大坂廻と譯書付、

惣會所へ可ヤ出事三に同じ、

選三五 同日 知恩院宮金銀貸付所事、

江戸堀壺丁目
播磨屋勇治郎借屋
富屋益之助方ニ旅宿

知恩院宮家士 佐々木衛士

知恩院宮金
銀貸付所

知恩院宮貸附金銀と儀、右旅宿と取扱事二二二

亥五月 承知判形日付は六月朔日なり、

(御觸書承知印形帳)

選三六 同日 堂嶋新地中三丁目萬屋喜兵衛支配借屋讚岐屋正吉外十八名、盜賊差押又

と孝心を竭ひ付、夫と御褒美被下事、

堂嶋新地中三丁目 炭屋茂右衛門支配借屋 福井町 和泉屋茂兵衛同家伴 七 同町 右茂兵衛借屋 大和屋甚太良

萬屋喜兵衛支配借屋夜番人 倉橋屋喜兵衛 同町多田屋新右衛門所持 七

讚岐屋正吉 大川町淡路屋作藏支配借屋 神酒丸沖船頭加子 三 代 松

道頓堀長吏下 難波屋定治郎方同家兄 八 右衛門

其方共儀、盜賊を差押、夫と所とを共ヤ合、召連訴出ル段、兼る觸渡と趣相守、寄特と義ニ

付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ひ、

盜賊を逮捕
せる讚岐屋
正吉外六名
に錢を賜ふ

五月六日

盜賊を逮捕
せる定治郎
外七名に錢
を賜ふ

○前文
に同じ、

五月十三日

長堀茂左衛門町泉屋八郎兵衛同家伴 同借屋 明石屋九八同家伴 七 大豆葉町具足屋林左衛門 借屋具足屋七左衛門下人 八
支配借屋京屋徳兵衛同家伴 和泉屋源造 播磨屋久兵衛借屋 同町 鍵屋忠兵衛代判宗七借屋
北濱貳丁目播磨屋武兵衛下人 河内屋平兵衛借屋 津國屋儀兵衛 綿屋庄兵衛
支配借屋高田屋善兵衛下人 塩飽屋藤兵衛

御池通四丁目
播磨屋喜兵衛借屋

淡路屋彌一良伴

伊三郎

右伊三郎義、兼る兩親と意不背相仕居内、兩親共病氣と取合ひ付、藥用介抱爲行届ひ得共、
母みねの養生不叶相果ひ後、老年と父彌一良を別る太切(大)とせり、厚孝心ヲ竭、其上身分慎方
も宜、職業ニ精ヲ出、年來と借財をも爲相濟、同人を爲致安心(奇)の段、寄特ニ付譽置、鳥目三
貫文差遣ひ、

北勘四郎町
池田屋四郎兵衛借屋

淡路屋徳兵衛伴

吉之助

右吉之助儀、兼る兩親と意不背、母雪病氣と節も、藥用介抱爲行届、同人病死(奇)ひ後、

御觸及口達 嘉永四年 亥年

一九五七

孝子吉之助
に錢を賜ふ

孝子伊三郎
に錢を賜ふ

父徳兵衛義常、病身の上、働先にて怪我を蒙り、片輪同然に相成、家業も難出來を、貧窮の中、猶太切、食物万杳都る不自由無之様誠實に取斗、夜分町内夜番にも被相雇、晝夜出精相稼、身分慎方も宜、孝心ヲ竭ゆ段、若年を以ての別心妙寄特に付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

新靱町

角屋藤七支配借屋

播磨屋治助

右治助義、兼る兩親に意不背相仕居ゆ内、父由兵衛義、拾五年以前中風と病症にて、身軀不自由相成ゆを、母もと俱太切に介抱爲行届、非常節病人を乗連退ゆ品をも、兼る用意ゆを置ゆ程よ心を盡罷在、其上年比相成、得共、父母に意に不叶ゆゆの不宜ゆ迎、未無妻にて身分を慎、家業に精を出し、長病に父に孝養を竭ゆ段、寄特に義に付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

孝子播磨屋治助に錢を賜ふ

生玉寺町

菩提寺下人

庄

助

其方義、主人用向付申請、使に参り、途中盜賊躰に者兩人其方へ取掛り、着用衣類剝取掛ルに付、可捕押と揉合居ゆ内、壹人を逃去、殘壹人を於場所ニ捕押、早速召連其段可訴出處、主用差急に付、右にものを隣町垣外番へ引渡、其筋に差出貫後、主用相片付、右次第訴出段、兼

盜賊を逮捕せる下人庄助に錢を賜ふ

あ觸渡に趣相守、寄特に義に付、爲褒美鳥目貳貫文差遣ひ、

亥五月

(同上)

題三九 同日 米價高直に付、極難澁人共へ、西下宿請所近邊に於て粥差遣ひ事、

覺

川崎圍籾の拂下

白米の廉賣

近年米價高直に相成、身薄にもの共別難儀いよ趣に付、市中米融通のため、川崎御藏御圍籾に内、多分に依數堂嶋濱方へ致御拂、他所へ不積送、町に搗米屋共相廻、成丈下直爲賣渡、様中渡、且別段に米買入、白米に仕立、搗米屋共小賣直段の半減余も引下ケ、先達以來難澁人共直安に賣出爲遣、其外米直段引下ケ方等に付あり、品に世話致ゆに付、夫是に追々相場下落に方相成、得共、いよ平準に場合の無之、其上長に米高直にあり、實に給續方と手段盡果、難澁差迫ゆ躰に者不少趣も相聞、不便に至に付、猶又白米買入、東西下宿共、内、當分西御役所附にもの共ゆ付、粥に爲焚ゆ上、日、人數四五百人程、積を以、明後三日朝六ツ時五ツ時迄に内、西下宿請所近邊に於て、町に難澁人共爲差遣ひ間、一統難有存、三郷町中へ相通、右人數差出方等に義、町に者へも示、不致混雜様可取斗事、

亥六月

右に趣爲心得御達有之の間、各可被相心得、且末に於町に實に取續かざる者可有之間、篤と相調被ゆ出、ゆ、追々日取及差圖、前以郷に惣會所なる人數に應、其町に向、札爲相渡、間、不及沙汰内に罷出中間敷ゆ、右極に難澁にあり請出ゆ者と人數、尤十五才以上に分相認、年寄

御觸及口達 嘉永四辛亥年

一九五九

施粥を受くるは極貧者に限る

貧民に粥を施す

印形こゝ可被差出ひ、右に趣無混雜様相心得取斗可有之事〇圖二三〇一及圖七七八を見よ

亥六月朔日

(同上)

圖五八七 六月八日 柴田日向守殿老衰に上病氣に付、願に通御役御免に事、

柴田日向守老衰其上病氣に付、願に通御役被爲御免ひ、此旨三郷町中可觸知との也〇圖五七四五を見よ

亥六月八日

(同上)

圖三九六 六月廿九日 釜屋町大坂屋又兵衛下人重吉外十四名、盜賊差押ひに付、夫に御褒

美被下ひ事、

- 釜屋町 大坂屋又兵衛下人 重吉 同 池田屋久兵衛 助
- 南久寶寺町壹丁目河内屋安兵衛支配借屋備中屋平八伴 同 橋屋藤兵衛支配借屋 助
- 南堀江貳丁目 同 同町藤屋山三良代判 助
- 大和屋六右衛門借屋 同 同町垣外番道頓堀長吏下 若キの良助弟子 助
- 森屋治 同 同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子 助
- 同町垣外番葛田長吏下 若キの善治郎弟子 兵衛 播磨屋伊兵衛 助
- 天満伊勢町 灘波屋清兵衛支配クイヤ 同町垣外番天満長吏下 若キの嘉七弟子 助
- 吉 同 柏原町 大和屋支藏借屋 伊豫屋彌兵衛 助
- 同 同 池田屋久兵衛 助
- 同 同 同町垣外番天王寺長吏下 若キの彌七弟子 助
- 同 同 幸町壹丁目名田屋木知兵衛 支配借屋灘屋清八下人 吉

其方共義、盜賊を差押、夫に所をのち合、召連訴出ひ段、兼あ觸渡に趣相守、寄特に義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

六月 〇南組惣年寄の副書 日付は廿九日なり

(同上)

圖五八八 七月朔日 川路左衛門尉殿大坂町奉行被仰付ひ事、

町奉行川路 聖談

川路左衛門尉殿 〇聖 大坂町奉行被仰付ひ、此旨三郷町中可觸知者也〇圖五九三〇を見よ

亥七月朔日

加賀

(同上)

圖三九九 同日 七夕短冊竹精靈祭に品々、川に捨間敷ひ、尤右品々を 公儀御入用にて船を出し、取捨せし事〇圖二八六に同じ

圖五八九 七月六日 是迄三郷并攝河在に入交に仲間組合罷在、奉行所一手に取締相立來

ひ口々、都前々に姿に再興付ひ事、

去ル寅年中株札并問屋組合等停止、是迄納來に冥加金銀不及上納旨等義、從江戸表御下知ヲ以相觸置ひ處、其已來商法取締相崩、諸品下直にも不相成、却あ不融通に趣相聞ひに付、此度諸問屋組合共、都前々に通再興中渡ひ、左に逆彌以冥加金銀上納に義、不被及御沙汰の問、諸品價引下ケ方に義厚心掛、實直に渡世相營ひ様、大坂諸商人諸職人共へ中渡〇圖二二八〇を見よひ、就あに在に義も、是迄町在入交に仲間組合罷在、奉行所一手に取締相立來ひ口々等、都前々に姿に再興付ひ間、一統其旨を存、諸物價引下ケに御趣意致貫通ひ様、精に取斗可中、委細に義、大坂元仲間組合にの共等々爲中通の問、是又可存ひ、

右に通攝河兩國村に相觸ひ條、此旨可存ひ、

右に趣三郷町中可觸知者也〇圖五八九〇を見よ

亥七月 〇町中家持の承知判 形日付は六日なり

在府

左衛門

加賀

(御觸書承知印形帳)

攝河在々に於ける仲間組合の再興

無宿非人を
高原溜に收
容す
貧民に粥を
施す
市民の義捐

貧民二萬二
百四十七軒
に軒別錢三
百文を頒つ

表を目差、追々多人數集來、右の内如何にも不便と躰をの不少、町家おゐても、右躰をの門先等こい、食物杯乞ひ内こ、風を出來心こゑ、目間見合、盗心掛ひ分も有之、無左ひ共店セ商ひ等と邪摩(魔)相成、可致迷惑義にて、取締も抱(拘)ひこ付、右無宿野非人共ひ内、病氣又と老幼ともの、或可及飢餓躰と者の高原溜に爲差遣、食物其外世話致遣シ、且町と宿持難澁人共ひ、西御役所附公吏人下宿共へ焚出付、日々人數五百人程ツ、粥爲差遣、其外米直段引下ケ方等こ付あも、品と手を盡、世話致遣シ次第等、御用掛町人始外町人共ひ内及承、難有存ひ由こゑ、夫と身元こ應米金錢等差出、右御救筋こ差加ひ義、寄特(寄)と志願を以出ひこ付聞届、此節迄と御救御入用こ、右米金錢差加へ遣、殘多分有之ひ、然ル處米直段と義、追と引下ケひ方々の乍や、いまと平準と場合この無之ひこ付、右御救と儀、今一際時合立直ひ迄、先是迄と通取斗遣ひ、就あを平日と違、盆前と義も有之ひこ付、町人共も差出ひ御救筋差加殘金錢こ、御役所銀取足、兼あ取調置ひ町と難澁人、貳万貳百四拾七軒と者共へ、軒別こ鳥目三百文ツ、當節救錢差遣ひ間、一統難有存、右と者共へ嚴重こ配當致し可遣事(同二九三及二九七を見よ)、
下ケ紙にて

差出ひ米・金・銀・錢・薪・塩等と員數名前を、追々相達可事、

○御觸帳に、年寄の副書
日付を七月十一日とす、

圖五九一 ○圖六
に同じ、

圖三〇三 七月廿二日 相圖こ紛敷花火を拵、市中川内等こゑ揚ひ儀致間敷事、

(同上)

狼烟類似の
花火を禁ず

口達

御城近所の不及や、諸役所辺其外人家程近キ場所等にて、大造と花火を揚ひ義致間敷と勿論、都あ花火こ亘寄、相圖揚火等こ紛敷火業致ひ者及見聞ひ、所と者無遠慮早速可訴出旨等と義、先年と追と相觸置(圖二一七)ひ趣も有之こ付あ、此節大川筋難波橋寄寄川中こゑ、其筋渡世と者商ひひ花火の、相圖こ紛敷義も無之、殊と例年仕來ひ趣この上ひ、子細無之ひ得共、諸家藏屋敷詰等と内この、相圖こ紛敷大造と花火ヲ拵、市中川端等へ持出、揚ひ向も有之哉こ粗相聞ひ、前段觸渡と趣意も差障ひこ付、向後狼こ揚火等致ひ義可爲無用旨、諸藏屋敷詰と面とに申渡ひ間、町とこおゐても其段相心得、兼あ觸渡と通無違失可相守ひ、
右と通三郷町中端と迄不洩様可申通(圖二七二)六を見よ、

亥七月 ○町中家持の承知判
形日付は廿二日なり、

圖三〇三 七月晦日 富嶋町貳丁目上荷船乗佐助外十七名、難船助遣又と盜賊差押ひこ付、
夫と御褒美被下ひ事、

富嶋貳丁目

上荷舟乗

佐

助

難船を救助
せる佐助外
九名に錢を
賜ふ

此者并外九人、先月二日安治川口おゐて、備前國赤崎村大黒丸廻船壹艘、強風こゑ淺瀬へ被吹付、難儀およぶ節、早速右船へ漕付、情と相働、危難を助ケ遣ひ段、兼あ(申渡)難船助ケ方と

御觸及口達 嘉永四辛亥年

義、厚相心得の故に義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ひ、猶此上無油斷心掛、様可致ひ、右に通ず渡り條、所し者共可令承知ひ、

七月二日

立賣堀中丁 七郎右衛門町貳丁目 七郎 兵衛 清 助
 榎皮屋清兵衛下人 炭屋吉兵衛 作 兵衛 同
 玉造稻荷新町 長堀茂左衛門町夜番人 同町同所設樂八三郎御代官所
 河内屋幸助同居悴 和泉屋八三郎支配ウーヤ 同町同所郡西高津村
 京屋徳兵衛同居悴 明石屋九八同居悴 奥野屋岩治郎同居弟

盜賊を逮捕せる下人定七外七名に錢を賜ふ

其方共義、盜賊を差押、夫し所し者合、召連訴出の段、兼あ觸渡し趣相守、寄特に儀に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

○南組惣年寄の副書 日付は七月晦日なり、

(同上)

補觸

一六 七月 中山道蕨宿外十ヶ宿、人馬賃錢割増し事 ○圖五七〇八及圖一九三三、

觸五九三

八月四日 戸田山城守殿卒去に付、鳴物停止し事 ○圖三六八五に同じ、

觸五九三

○圖七 同日、

觸三〇四

八月十六日 馬附荷物し事、并馬士共不法に儀致間敷事 ○圖一九〇二に同じ、但し、「寛政

觸三〇五

九月四日 白米小賣直段に儀、米相場に應し正路に賣方可致し事、

口達

口達

白米小賣直段は堂嶋米相場に準據す可し

此節堂嶋米相場追に際立下落致シ得共、町に搗米屋共し内より元附に割合を立、小賣直段不引下族も不少趣相聞ひ、元來搗米屋白米小賣直段に義を、米相場高下を隨ひ賣出可や答にて、既米相場相進の時を、元附に不拘、速に直上ケルをせしなあら、右躰下落し時節に差向、容易に不致直下段、不埒に仕方な付、早に相改、小賣直段高直にて、身薄し者共別あ致難義候次第を顧、銘に一分に利欲を離し、年來右商賣向ヲ以、身命を保ひ冥加に程をも弁、搗米屋共精に差働、相互に勵合、成丈ケ下直に賣出可や、夫し所し者共も能に心ヲ付可致世話ひ、自然此上にも不正路に取斗致しひをの相聞ひ、無用捨召捕、嚴重可及沙汰の間、其期に至後悔致間敷ひ、

右に趣三郷町中搗米屋共等々に不洩様可や通事 ○圖二二八七及

(同上)

○本令端書に、九月四日御觸とあり、

觸三〇六

九月十日 北久太郎町五丁目繪屋彌七儀、御城内繪方定御用達相勤し事、

北久太郎町五丁目

繪屋彌七

右彌七義、御城内(繪方)定御用達相勤しに付、御用し節を、同人名前ヲ以役差致し、ひ、無滞可罷出、尤賃銀に義を、御定直段に掛り物引、渡方可致の間、三郷繪師職しをのに、寄可や聞置し事、

○南組惣年寄の副書 日付は九月十日なり、

(同上)

御觸及口達 嘉永四辛亥年

一九六七

城内繪方御用達繪屋彌七

参考 二四

十月十四日 米價高直ニ付、種々御救爲成下、必至ニ困窮を相凌ハ段、市中一

統々御禮々上ハ事、并西御奉行様御永勤被爲有ハ様出願ハ事、

先月十四日三郷火消年番町年寄西御番所様に、左ニ通御禮書付差上ハ、

乍恐以書附御禮奉々上ハ、

市民上書し
て町奉行所
の貧民賑恤
を謝す

一 去秋以來米價高直ニ付、身薄々者共困窮差迫、難澁可致々、種々御救關二二九七・二三〇一・被成
關七七八等を見よ下、猶又當夏以來、極難澁々もの共へ御慈悲爲御救數十日御粥被爲下置、誠以必至ニ危難を相
凌ハ段、全御仁惠ニ御慈悲難有奉存ハ、猶其上米直段存々外下落ニ相成、當時一統安穩ニ時節
ニ差向ハ儀、格別ニ御仁情故々儀々、市中一統御厚恩ニ程御禮無々量、冥加至極重疊難有仕合
奉存ハ、乍恐此段私共三郷町中爲惣代々、右御禮奉々上ハ、以上、

三郷火消年番町

年

寄連印

御

右同日猶又左ニ通、書付差上ハ、

乍憚口上

西町奉行本
多安英の永
勤を出願す

一 西御奉行様御儀、去戌年々當表御在勤被爲在ハ所、米直段高直ニ時節ニある、市中一統身薄々者
共別及難澁ハ所、格別ニ御仁惠を以、種々御救被爲成下、米直段等も下落ニ相成、當時安穩
ニ相凌ハ段、誠以實太々御慈悲難有可奉存ハ、何卒恐多御儀ニ御座ハ得共、永々御在勤被爲成

下ハ儀、此上ニ御慈悲難有仕合ニ奉存ハ旨奉願上度段、町人共一統々上ハニ付、奉恐入ハ得
共、私共爲惣代々奉願上ハニ付、何卒各々様々宜被仰上被下ハ儀、難有可奉存ハ、以上、

亥十月

北組郷中惣代
南組郷中惣代
天満郷中惣代

町々年 寄連印

惣御年寄中

當月朔日三郷火消年番町々年寄東御番所様に被爲召出、於御前左ニ通り被仰渡ハ、

三郷町々丁人共惣代

船越町年寄

長濱屋平兵衛

外貳拾人

町奉行永勤
の願書を却
下す

其方共儀、本多加賀守當表永勤ニ儀相願ハ旨、惣年寄共迄差出ハ願書々外ニ、々立ハ趣意々無
之ハ哉、丁人共一統願立ハ趣、神妙ニ至々得共、願々よ侍々永勤被仰付筋者無之ハニ付、願
書差返ハ、尤右々趣御城代ハ相達ハ上々渡ハ間、此旨可令承知ハ、

右々通御承知々上、早々御順達留々御戻ハ可被下ハ、以上、

年番

瓦町壹町目印

(御觸帳)

圖三〇七 九月晦日 生駒町中村屋甚藏外五名、盜賊差押ひこ付、并六軒屋濱上荷船乘善次郎外六名、難船助遣ひこ付、夫々御褒美被下ひ事、

生駒町

中村屋甚藏

盜賊を逮捕せる中村屋甚藏に錢を賜ふ

其方共、先達を日向有之、他行致ス途中、無宿田川の富吉外貳人に出會、其方着用衣類剝とらまひ砌、可捕押立向ひ、所々疵受ルなき共、精力を掛、右々者共、内壹人を於其場所捕押、引連可訴出所所、捕方役人廻り合ひこ付、右々趣立、捕押ひとの相渡ス段、健氣至、兼あ觸渡趣相守、寄特義こ付、爲褒美鳥目拾貫文差遣ス、

九月二日

西高津新地八丁目

同所六丁目泉屋梅太郎
代判喜兵衛方に同家

池田屋藤助

同町

吉田屋茂七

長堀清兵衛町

難波屋藤吉

同町垣外番天王寺長吏下
若キ弟の元七弟子

治兵衛

其方共儀、盜賊を差押、夫々所々者共合、召連訴出ル段、兼あ觸渡趣相守、寄特義こ付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

九月

六軒屋濱上荷船乘善次郎

善次郎

元庄三郎

源

七喜三郎

伊

助

難船を救助せる善次郎外六名に錢を賜ふ

丑之

松虎吉

右々者共義、當月十二日於安治川口、廻船貳艘強風ニめ淺瀬に乗揚、及難儀節、邊ニ居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助ケル段、寄特義こ付譽置、爲手當善次良外五人に鳥目壹貫文ツ、虎吉へ同五百文差遣ひ、

○南組惣年寄の副書
日付は九月晦日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖三五五 十月五日 大坂三郷并攝河在々質屋古銅古道具屋古手屋儀、仲間再興付ひ事、并大坂三郷下尿儀も、先前通、攝河兩國に内三百十四ヶ村并加入村へ

引請付ひ事、

大坂三郷并攝河兵庫西宮、其外攝河兩國在々質屋并古銅古道具屋古手屋、右三商賣人共取締り、た宛、此度先前通壹商限、町在一手ニ組合再興付ひ成就あり、去ル寅年觸渡七を見よ、趣々自然弃捐相成、夫々渡世筋義の、文化以前に定法ニ復、諸品融通合等厚心掛、(銘々)實直ニ渡世相營、聊不取締り義無之様可致ひ六〇一を見よ、

但、三商年寄名目興廢義と、猶取調り上追可中渡ひ、夫迄處、先惣年寄ニ掛付、取締爲差心得の間、其旨も可存ひ、

一大坂三郷下尿儀、先前攝河兩國に内、三百拾四ヶ村并加入村に引請、高割箇所割等ヲ以、取附來ひに付あり、仲間組合の姿ニ相當ひに付、去ル寅年株札并問屋仲間組合等停止節、右村々ニ限引請り義差止、町在相對次第取遣可致旨中渡三を見よ、以以來、村々者々内にて一己

御觸及口達 嘉永四辛亥年

一九七一

右三商年寄の設廢如何は追て沙汰す可し

大坂三郷并攝河在々の質屋古銅古道具屋古手屋仲間を再興す

攝河三百拾
四ヶ村并加
入村々の下
屎請負を再
興す

利欲に耽り、銘々作用相當に見積り不均、下屎取附箇所多引請、身薄に百姓共は高直に賣肥手致し、或代銀取遣ヲ以、箇所賣買致し風義に相成り付、町家に手筋ヲ求、追々直増を以、箇所糶取の族不少、正路に百姓共の、年來作用手當に肥手ニ相離、難義の甚し、町家と者も右ニ乘、彌増下屎糶賣致し仕義ニ至、止ル處肥手直段は差響の事と由相聞ひ、然ル處此度諸間屋組合とも再興ヲ渡り上の、右ニ准、下屎と義も、先前に通攝河兩國の内、三百拾四ヶ村并加入村に引請に積り付の間、其旨可存ひ、尤右下屎と義、商物にも無之上り、兼定直段の外、猥ニ直増致し咎無之而已ならん、肥手高直とあり、田畑養ひ方不行届、諸作出來劣、自然万價ニ拘り筋に付、町在り者共其義を厚相弁、猶取締方と義の、天保九戌年中町在り合、奉行所へ差出有之規定書に通無違失相守、双方共不正路に取斗無之様可致し、○圖五六二九及圖二八一六を見よ、右に趣三郷町中可觸知をの地、

亥十月五日

左衛門

加賀

(同上)

参考 二五 十月十五日 米賣買方窮届ニ無之様可相心得旨被仰渡、御請證文之事、
被仰渡御請證文之事

近來打續米價高直と上、去戌年と義異作と國と多、土地有米及減少の二付あり、彌増直段も引上りに付、米賣買方掛引、他處と義諸國稻作一作而已にあり、去年來に入合も行届不道理にの間、時節前後を弁、多分と米高買注文引請の義を勘弁可致事にあり共、最早是迄通と差略に

米賣買の融
通を計る可
し

を不及、賣買方格別窮届に無之様、融通合專一に可相心得、向後右に事寄、不正路に取斗致間敷旨、米仲買共一統へ可申通、○圖二〇九及
付は十月十五日なり、

(米商舊記)

参考 二六 同日 帳合米賣買の濱法を取亂し、正米掛繫の意味取失ひ様成儀致間敷旨被

仰渡、御請證文之事、

被仰渡御請證文之事

堂嶋帳合米と義を、正米掛繫融通第一の品に付、前々右相庭妨致、者を、吟味上夫と御仕置申付に付あり、猶又取締方と義も度と申渡有之處、近來米仲買共と内に、正帳對用掛繫の意味取失ひ、別物と様に未熟と心得違ひ、不作法と仕方多、甚敷に至りあり、兼定と限市に差向、又と平常にも同志と米仲買共申合、内と仲買共を手先に遣、濱法取亂し、其次第により去くと唱、最前立廻り無頼物を語り、押る市場へ爲立交、可立相庭を差出、様仕成、混雜爲致、然而已あらば、時合をも不顧、正米買置、其外米代銀取渡、義に付あり、等閑と取斗致し事と由、止る處近來と姿にあり、帳合米と正米掛繫にも不相成、却る右と爲に正米直段に障り、義、無之共難申哉に付、年行司共始重立の米仲買を、品と申諭ひへ共不相用、不行儀及増長に付、諸國客先と氣請にも拘り、自ら市場と衰微を招、様仕成、族不少哉に相聞、以て外と事に付、元來堂嶋米市場と義を、諸國米直段と基本にあり、其上米穀を以仕出の品を勿論、諸品とも米直段を元として、賣出の道理にあり、右米相庭と模様を寄り、万價に拘り

しくた

帳合米の本
意を失す

堂嶋米相場
の影響

かに付、享保年中格別御世話○株札を下付せることをいふなも有之、天明度にも米賣買方儀に付、米仲買共へ別段被仰諭○圖三四七、趣も有之、夫是厚相弁、已來銘一己と利欲に耽り儀無之様、急度相慎、米仲買共相互に心を付取締、享保度已來規定を堅相守、實直に渡世相營、諸向に氣請宜、市場繁昌爲致、義を專一に心掛、正米帳合米とも平準に相庭相立、正路に賣買致、様精申合、掛引可致、若又此上にも右申渡を不相用、不直に取斗致、者有之に於て、無用捨召捕、嚴重可申付、間、其節後悔致間敷旨、米仲買共一統へ能可申通、○圖二一〇及付は十月十五日なり

○米方年行司の副書日

(同上)

掛米を一時
に買入る可
からず

圖五九五 十月廿四日 酒造屋共掛米一時に不買立、入用度毎夫程ツ、買入の様可致事、市在酒造と義、兼る觸渡置の次第嚴重に相守、隱造過造の勿論、都る不取締に取斗致間敷の、中迄も無之事の、然ル處酒造屋共義、配米と外掛米を唱、酒造取掛仕込仕廻迄の内、追々右配米に差加ひ米分をも、此節一時に買立、手當致置の族も有之、寂寄米直段に拘ひ義も有之哉に相聞の條、當年に義の去戌年に模様を違、諸國稻作豐熟に趣に得共、一作而已にあり、去年來に入合も不行届道理に聞、時節前後を顧、右掛米に分一時に不買立、先練入用度毎、夫程宛買入、何きにも米直段不障様、厚致勘弁可令掛引の、自然此後右中渡相背、不直に取斗致のの相聞のこゝろにて、急度可申付の、右に趣三郷町中可觸知の也○圖五六八三及五九三五を見よ

亥十月廿四日

左衛門

加賀

(御觸書承知印形帳)

圖五九六

十月廿七日 古金銀引替所の儀、猶又來子十月迄、是迄に通被差置の事○圖五八六九を見よ

圖三〇八

十月廿八日 山本町夜番人天王寺屋與吉外壹名、盜賊差押の二付、并安治川南三丁目上荷船乘市三郎外九名、難船助遣の二付、夫に御褒美被下の事、

山本町夜番人

竹屋嘉介代判吉右衛門借屋

天王寺屋与吉

同町夜番人

同借屋

廣嶋屋宗八

其方共義、盜賊を差押、所の者や合、夫に召連訴出の段、兼る觸渡に趣相守、寄特に義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣の、

十月廿六日

安治川南三丁目
上荷船乘

市三良安兵衛

衛彌兵衛

同北三丁目

德兵衛

伊

同南四丁目

八傳兵衛

衛

九兵衛

同北三丁目

宇治良

目印山に罷在

助米

藏

御觸及口達 嘉永四辛亥年

一九七五

盜賊を逮捕
せる天王寺
屋與吉外壹
名に錢を賜
ふ

難船を救助
せる市三郎
外九名に錢
を賜ふ

右と當月四日於安治川口、讚芻津の村浦織藏所持の廻船一艘、強風に難^(船)舟可及處、辺に居合、助ケ遣、ニ付、爲手當鳥目五百文ツ、被下^(船)事、

○南組惣年寄の副書日
付は十月廿八日なり、

觸五六七

觸五六八

(御觸書承知印形帳)

穢多の横暴

穢多共取締事、

右體の者あ
らば告訴す
可し

穢多共取締方と義、兼あ^(柄)渡置^(五)〇^(三)一^(一)の趣も有之處、近來風俗惡敷、履物類賣買并損直等ニ
亵奇、町家^(柄)の者に難題ヲ懸ケ、其品柄不相當と代錢繰り取、又と猥ニ大道を場取致シ、職道
具杯取散シ、往來に妨致シ、其外煮賣屋小酒屋等に立入致飲食、見咎^(柄)得^(柄)事、事六ヶ敷^(柄)掛^(柄)
へ共、町家^(柄)の者と外聞を厭、用捨致し置^(柄)ニ乘^(柄)シ、次第ニ及増長、甚敷ニ至^(柄)あ^(柄)事、町家飼犬
飼猫打殺盜取、或盜賊惡黨者^(柄)の宿^(柄)の勿論、盜物賣捌^(柄)の世話をも引受、品^(柄)と法外^(柄)及所業^(柄)ニ付、
追^(柄)と召捕、夫^(柄)と御仕置^(柄)付^(柄)得^(柄)共、兎角風俗不相直由粗相聞^(柄)ニ付、右^(柄)跡^(柄)の者召捕手當等嚴敷
中付、穢多村年寄共へも、猶又格別取締方^(柄)ヲ渡^(柄)ニ付^(柄)あ^(柄)事、町^(柄)と^(柄)あ^(柄)るても其旨を存、以來穢
多共身分をも不憚、法外^(柄)及所業^(柄)の、聊無用捨留置、早^(柄)と月番^(柄)に奉行所^(柄)に可訴出、
右^(柄)と通三郷町中端^(柄)迄も不洩様可^(柄)通事、

○町中家持の承知列形
日付は十一月三日なり、

觸三三〇

十一月廿七日

青蓮院宮貸付銀支配人并貸付所代り事、

(御觸書承知印形帳)

青蓮院宮役人

- 渡邊 河内介
- 林 甲斐介
- 小西 左内
- 小西 傳右衛門

青蓮院宮貸
付銀支配人
及貸付所の
變更

右と新戒町泉屋源兵衛方ニ止宿、同人方ニあ^(柄)青蓮院宮貸付銀取斗^(柄)の段、斷出^(柄)ニ付聞届^(柄)の條
序^(柄)に節三郷町中^(柄)に可相通^(柄)の、尤是迄右宮用所攝芻東成郡天王寺村馬場先町無量壽庵^(役)に相詰^(柄)の改
人足立志津摩義^(柄)の、永^(柄)と暇被差出、用所^(柄)にあ^(柄)貸付銀取扱方^(柄)と義相止^(柄)の事^(柄)〇^(一)七〇^(一)一^(一)及^(一)
〔^(御觸書)亥十二月廿七日〕 (同上)

觸三三一 同日、南傳法濱上荷船乘孫三郎外十七名、難船助遣^(柄)ニ付、夫^(柄)と御褒美被下^(柄)の
事、

- 南傳法濱
上荷船乘
孫 三郎
- 目印山^(柄)に罷在^(柄)の
岩 右 衛門

難船人命を
救助せる孫
三郎外十七
名に錢を賜
ふ

其方共外拾六人義、當月十九日安治川口^(柄)あ^(柄)る、廻船高浪打込乘沈、難義^(柄)あ^(柄)よ^(柄)ひ^(柄)の節、早速右
船^(柄)に漕付、銘格別相働、海中^(柄)に沈居^(柄)の者共を引揚、厚介抱致シ、人命を助ケ遣^(柄)ス段、兼あ^(柄)中渡
の難船助ケ方^(柄)と趣、厚相心得^(柄)の故^(柄)と儀^(柄)ニ付譽置、爲手當孫三郎外九人^(柄)に鳥目壹^(柄)〇^(一)五百文ツ、
岩右衛門外七人^(柄)に壹^(柄)〇^(一)五百文ツ、差遣^(柄)の、猶此上無油斷心掛^(柄)の様可致^(柄)の、

御觸及口達 嘉永四辛亥年

右に通ず渡り條、所々者共承知可致ひ、

○御觸書承知印形帳には、其郷惣年寄の副書日付を十一月廿八日とし、御觸帳には、廿七日とす

觸五六

十一月晦日

當月廿二日、從水戸中納言殿線姫君様へ、御結納被差上り事○體裁體を三四五八

觸五九

○及五九四六を見よ、
○觸九及、
一〇に同じ、

觸三三

十二月十六日

門松注連繩等を忍こころつゝ取、或の押あ貫掛ひ儀仕間敷事○題一

に同じ

補達 六七

同日、ろくと穴打道中双六辻寶引と類禁可事○觸三〇

觸五九〇一

十二月廿二日

川筋掟と事○觸一

觸五九〇三

十二月廿六日

當九月十二日夜、信州高井郡坂田村百姓孝太夫女房そめ同娘てる

觸三三三

同日

南堀江貳丁目夜番人坂屋與三七外貳名、盜賊差押又の孝心を竭ひに付、

觸三三三

同日

南堀江貳丁目夜番人坂屋與三七外貳名、盜賊差押又の孝心を竭ひに付、

觸三三三

同日

南堀江貳丁目夜番人坂屋與三七外貳名、盜賊差押又の孝心を竭ひに付、

此事、

南堀江貳丁目夜番人

同町藤屋由三良代判

佐兵衛借屋

坂屋与三七

同町垣外番

道頓堀長吏下

若キ之の五郎助弟子

長 四 郎

盜賊を逮捕
せむ坂屋與
三七外壹名
に錢を賜ふ

孝子川村屋
龜吉に錢を
賜ふ

其方共儀、盜とんせりひをのと同類ニ相見へひをのを合差押、訴出ひ段、兼あ觸渡と趣相守、
寄特と義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ひ、
十二月二日

釘屋町

才賀屋榮助支配借屋

川村屋龜吉

右龜吉儀、父得兵衛と炭商ひんせり、夜を町内番人ニ被雇罷在ひ處、幼年と砌方古釘を延ひ
職業を覺、得兵衛家事賄方と手助けひんせり、拾壹ヶ年已前之を病氣ニ取合ひ節、乍幼年厚
致介抱ひ得共、養生不叶致病死、得兵衛義後妻を喜貫請、弟兩人妹壹人致養生、去戌年得兵衛
儀病氣ニ取合ひ節、繼母とをす中合、實意ニ藥用致介抱、養生不叶終ニ病死ひんせり後も、死
跡懇ニ相營、繼母を太切にひんせり、弟妹を憐、家内睦間敷相暮、行狀相慎、若年この孝心寄特
ニ付譽置、鳥目五貫文差遣、年若し儀彌此上行狀相慎、渡世出情可致ひ、

安治川南貳丁目
上荷舟乘
利右衛門 市兵衛 清治郎 源三郎 長三七

御觸及口達 嘉永四辛亥年

難船を救助
せる利右衛
門外九名に
錢を賜ふ

其方共儀、當月七日於安治川口、土佐國野根村大黒屋吉助舟五百石積空船、壹番水尾木辺迄罷下之處、俄ニ西北風強高波相成、南瀉淺瀬に被吹寄、及難義の節、相詰罷在、早速右舟に漕付、精々相働、危難を助ケ遣の段、兼あす渡の難舟助ケ方と義、厚相心得の故に儀に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣の、猶此上無油斷心掛の様可致の、

安治川南四丁目
上荷舟乘

傳 三 郎 安 治 郎 仁 三 郎 彌 兵 衛 傳 七
与 三 郎 長 兵 衛 安 右 衛 門 吉 三 郎 清 治 郎

難船を救助
せる傳三郎
外九名に錢
を賜ふ

其方共儀、當月十六日於安治川口、防刃玖珂郡柳井定治郎舟、柳川米七百五拾石積罷在、壹番水尾木辺迄罷越、俄ニ西北風強高波相成、南瀉淺瀬に被吹寄、及難義の節、相詰罷在、早速右舟に漕付、精々相働、危難を助ケ遣の段、兼あす渡の難舟助ケ方と義、厚相心得の故に義(二付)譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣の、猶此上無油斷心掛の様可致、

亥十二月廿三日

○前令と共に、町中家持の
承知判形日付は廿六日なり、

(御觸書承知印形帳)

十二月廿九日 市中取締宜、火事沙汰も無之、一段と事この、猶此上無油斷世話

行届の様可致事○題二二五一同じ、但し、「冬向火事沙汰少并盜賊
取締方も相付」とあるを、「火事沙汰も無之」に改む

嘉永五壬子年

陽五九〇三 正月二日 徳川右衛門督殿御事、被任中納言、田安中納言殿と被稱の事 五〇六に同

陽五九〇四 正月三日 久世大和守殿御事、御本丸勤被仰付、内藤紀伊守殿御事、連判に御列

被仰付、右大將様へ被爲附、脇坂淡路守宅 殿所司代被仰付の事 同、尙陽五七八五、
五八六二・五九八三・六一
二五・及六一八八を見よ、

陽五九〇五 正月十一日 手嶋流心學道話の儀、隨分ひろまりの様、町内か世話可致の事

陽五九〇六 正月十一日 問屋組合再興相成の分の、素人直賣買不相成、前々通其筋問屋へ

陽五九〇七 正月廿一日 問屋組合再興相成の分の、素人直賣買不相成、前々通其筋問屋へ

相拂可の事、
去ル丑年問屋組合仲間等停止の節、菱垣廻船に積來の諸品の勿論、都あ何國か出の何品こあも、
素人直賣買勝手次第たるへ旨觸置の處、今般問屋調の上再興相成の分の、都あ素人直賣買不
相成の問、如前と可相心得の、

問屋再興の
分は素人直
賣買を禁ず

一諸家國産の類、其外江戸表に相廻の品とも、問屋に不限、銘々出入の者やも等引受、賣捌の義

も勝手次第の旨觸置の處、是亦調の上、問屋組合再興相成の分を、前々通其筋問屋に相拂可
中の、

右と通町中不洩様可被相觸の、

御觸及口達 嘉永五壬子年

諸家國産類
も亦其筋問
屋に賣却す
可し

亥十二月

右に通江戸表におゐて町奉行に被仰渡り段、被仰下り條、一統承知仕、尤大坂表に義も、今般調の上、問屋組合等再興相成り分り、都お同様相心得可なり、右に趣三郷町中可觸知の地○圖五四五八・五八八一及圖三三五六を見よ、

子正月〔廿一日〕

左衛門

圖三五

正月廿七日 瓦町壹丁目備前屋五郎兵衛借屋河内屋幾助外七名、盜賊差押に付、夫と御褒美被下り事、

加賀

瓦町壹丁目 淡路町壹丁目垣外番高田長 相生西町夜番人 同町垣外番天王寺長吏下
備前屋五郎兵衛借屋 吏下若キの善兵衛弟子 菱屋藤兵衛借屋 若キの元七弟子
河内屋幾助 源 美濃屋彌三良 六 兵衛

盜賊を逮捕せる河内屋幾助外三名に錢を賜ふ

其方共義、盜賊を差押、夫と所いもの中合、召連訴出り段、兼お觸渡り趣相守、寄特に義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、

正月十九日

安土町壹丁目 同町垣外番高田長吏下 上魚屋町夜番人 南濃人町壹丁目夜番人
和泉屋重七支配借屋 若キの源助弟子 伊丹屋万兵衛支配借屋 磯屋徳兵衛支配借屋
和泉屋清兵衛 市 兵衛 河内屋久兵衛 平野屋藤助

盜賊を逮捕せる和泉屋清兵衛外三名に錢を賜ふ

○前文 正月廿七日 日光道中徳次郎宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七七一七及、

圖五九〇八

正月 日光道中徳次郎宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七七一七及、

圖五九〇九

同月 中山道今須宿外五ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七二三及

圖五九一〇

同月 東海道關宿奥州道中氏家宿外四ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七二二及六

圖五九一一

○例圖三 二月廿二日 追手外番場明地へ松木植付被仰付り事、

圖五九一二

補遺 七九 二月廿二日 追手外番場明地へ松木植付被仰付り事、

覺

來ル辰年朝鮮人來聘に節、當地於御城御行札に積被仰出り、右に付追手外番場明地見切りた処、松木植付被仰付、此節爲取掛り、此段爲心得申置り、

○幕令に、通達年番善左衛門町の通達日付を二月廿二日とす、

圖三三六

二月晦日 新淡路町河内屋甚兵衛支配借屋大坂屋宗兵衛、孝心奇特成者に付、御褒美被下り事、

褒美被下り事、

新淡路町

河内屋甚兵衛支配借屋

大坂屋宗兵衛

右宗兵衛義、常々兩親に意ヲ不背、誠實に仕向、父善兵衛存命中、聊宛菓物に類買調、一分に辻賣商ひのせり、家事賄に差加、父に手助けいせり罷在り内、母ふさ義七ヶ年以前病氣に取合、善兵衛俱に介抱に居り折節、同人も四ヶ年以前中風の症差發不相勝、兩親共起臥自

御觸及口達 嘉永五壬子年

孝子大坂屋宗兵衛に錢を賜ふ

追手外番場明地に松樹を植付く

由不相成、必至難澁之處、一藥用介抱等爲行届、其透問(大)の兩親日用給物等調、隣家(大)のの留主中世話頼置、出商(大)ひも精ヲ入相稼、兩親を太切ニ相養ひひ得共、善兵衛義終ニ養生不叶、去亥正月病死(大)後、佛事等懇ニ相營、其上母ふさ義追々病氣差重(大)を、不相替藥用介抱爲行届、尤同人義氣力慥(大)ニある食事等相好(大)の方ニ付あせ、程能相勤、兩便ニ穢物杯も其度毎ニ叮嚀ニ取片付、前同様商(大)ひニ罷出(大)節(大)の、留主中心付等(大)と義、隣家(大)の者に頼置(大)付、病人見苦敷(大)のあり、近寄吳(大)ひものも有之間敷(大)と心を配、衣類洗濯(大)にも自身(大)の多し、履服(大)ありらも度々着替(大)させ、程を見合、湯沐等爲致(大)も人手を不頼取斗遣、其身(大)の諸事相慎相稼(大)の付、父善兵衛存生中(大)の三拾ヶ年余、書面(大)に借屋住居致(大)し得共、家賃銀爲滞(大)の義も無之、右躰長病(大)の老母を大切ニ看病萬端爲行届、孝心(大)ヲ竭段(大)、寄特(大)と義ニ付譽置、鳥目五貫文差遣、年若(大)と義彌此上行狀相慎、渡世出世可致、

子二月○南組惣年寄の副書日付は晦日なり

(御觸書承知印形帳)

閏二月八日 五ヶ所朱座仲間再興被(大)付(大)の事、

朱并墨共、朱座(大)の外、江戸京大坂奈良堺の仲買(大)のの付、掛札爲致、朱座并右仲買共(大)勝手次第買請(大)の様、寛政辰年相觸(大)の處、右仲買(大)の者差止(大)の間、以來座方(大)直ニ買受(大)の様可致、尤朱と朱座包(大)の儘、正路(大)に直段(大)ヲ以小賣致(大)の義不苦旨等、卯年相觸置(大)一(大)を見よ、(大)の處、此度右五ヶ所仲買(大)の者、先前(大)に通(大)付(大)の間、都(大)る寛政度相觸(大)の通可相心得(大)、若此上出所紛敷品、内(大)致賣買(大)の段於相聞と、吟味(大)に上急度各可(大)付(大)、

朱及朱墨仲買の再興

右(大)趣御料私領寺社領共、在町(大)に不洩様可被相觸(大)の、

子二月

右(大)通從江戸被仰下(大)の條、此旨三郷町中可觸知(大)の也、

子閏二月○町中家持の承知判形日付は八日なり

左衛門 加賀 (同上)

閏二月十日 火除(大)の事、

一當月十三日、御銘(大)の御宅(大)が北(大)のあゝ井戸水、朝辰の刻清さ(大)は(大)に汲入置、同申(大)に刻家根南ノ方々打(大)之(大)ため、戌亥の方(大)にて打(大)ま(大)ふ(大)ぞし、
右(大)通御成被遊(大)の、當年中火難相(大)のがれ、様承り(大)の付、此段御披露奉(大)上(大)、當日前書(大)に通無御失念可被遊(大)、以上、

閏二月十日

右(大)通及承り(大)の由(大)こゝ、町内(大)を書付を以(大)來り(大)の付、此處(大)に寫置(大)の事、

子閏二月十日

(御觸帳)

閏三月七日 火(大)元入念可(大)ず、并火付(大)の者見掛次第可訴出(大)事、

口達

火(大)元(大)の儀(大)に付(大)あり毎(大)々(大)中渡、觸書をも差出置(大)の付、於町(大)に無油斷心(大)ヲ付(大)の義(大)ニ可有(大)之(大)の得共、至當春折(大)及出火、火廣相成(大)のも有之、致難儀(大)の者共不少趣(大)ニ相聞(大)の條、向後共別(大)の火(大)に

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九八五

火災除の呪

春來出火多し

放火の者あらば届出づ可し

元入念可やと勿論、假令明借屋納屋等不致住居所こあも、盜賊惡黨との共所爲こ寄、出火こ相成ひも有之、右等こ者を精と遂穿鑿、追と召捕可被處嚴科義こ可有之ひ得共、於町こも一町限り、年寄町人共ヤ合、夜中繁と相廻り、明屋等ひ別み心附可やひ、尤火ヲ付ひ躰こ者見掛ひひ、早速捕押訴出ひひ、急度御褒美可爲取義こひ間、此段能と相弁、借屋末と迄彌嚴重可や合ひ、

右と通三郷町と末と迄不洩様可や聞ひ事

子三月○次の令と共に、町中家持の承知判形日付は七日なり、

圖三二八

同日 道空町平野屋宗兵衛借屋平野屋巳之助代判平五郎同居母つる、孝心奇特成者こ付、御褒美被下ひ事、

道空町平野屋宗兵衛借屋

平野屋巳之助代判平五郎同居母

孝女つるに錢を賜ふ

右と者義、元南竹屋町平野屋由兵衛娘こあ、幼少こ砌、父由兵衛相果ひ後、母ひ諸共他家に同家、亦とむつ外方に再縁ひせし節、連子こて付添參、右方こあも望ひ義後夫と死別こ相成、猶亦他家こ同居致ひ内、右巳之助を此との養子こ貰請、當時こ借屋借請、家宅を構ひ得共、巳之助と未幼少こ付、實家こ致養育、代判人平五郎他町住居こ付、家内ひひひと貳人相慕罷在、元來此者義幼少こ砌より、万事母と意を不背、誠實こ仕向、成長と隨ひ、布織或洗濯物木綿絞

等と手職ひせし、少と宛と賃錢貰請、母を養居ひ内、同人義四ヶ年以來、兩度も大病こ取合、起臥自由不相成ひを、與度と藥用介抱等爲行届、快氣ひせしひ得共、生得病身こあ其後も引籠勝こ付るを、同様藥用介抱等こ力を竭、其透間こ手職こ精ヲ入相稼、素と女手業と義こ付、廉立ひ儲錢も無之、貧窮こ相暮ひ得共、其中か母相好ひ品を買調、程能相勸、其上年比こも相成居ひ義こ付、聳養子相勸ひとの有之ひ得共、母に隨順ひせし、同人存意こ協ひ聳養子無之ひ迎及斷、其身の髪と飭身形も不差構、質素こ致、近隣懇意こ者等か誘引請ひあも、物見遊參も勿論他出不致、諸支慎、家賃銀滞ひ義も無之、右躰病身と母を大切こ看病万端爲行届、孝心を竭ひ段、寄特こ付譽置、鳥目五貫文爲差遣ひ、年若と義彌此上行狀相慎、渡世可致出情ひ、

(同上)

圖五三三 三月十四日 諸寺院と住持所化僧、破戒無慙と所業無之様、檀家講中と者か精と

心付可や事、

○前文圖五六、右と通去已年中觸渡置ひ處、程立忘脚と輩も有之哉、近比又と所化僧と類ひ不及や、一寺住僧と内こも、遊所等と相越及遊興、亦ひ洗濯女按腹療治杯号シ、婦女子を寺院に呼入ひ而已ならず、數日寺内こ留置及女犯、其外情弱と振舞も有之哉と粗相聞、以と外と更こ付、早と行狀相改、銘と身分を慎、學徳ヲ相磨、寺務專一こ可心懸ひ、猶役寺觸頭も厚教戒ひ多し、格別取締、戒律堅固こ爲相守、旧弊相去ひ様可取斗ひ勿論、法類組合等こあも相互こ心付、如法質朴と僧法研究ひ様可致ひ、役寺觸頭等遠國、亦と同國こあも場所相隔ひ分の、檀家講中

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九八七

僧侶の不如法

不如法の僧侶あらば役寺觸頭又は檀頭請中より戒告す可し

者共中合、住持所化等及不身持ひ歟、亦い婦人狽狽ニ寺内ニ留置ひ義杯無之様、是亦精々心付、一統兼る觸渡し趣無違失相守可申ひ、此上ニも等閑ニ相心得、不如法ニ取沙汰相聞於(於相聞カ)、聊無用捨令吟味、役寺觸頭も可爲越度ひ條、其期ニ至後悔致間敷ひ、右ニ趣三郷丁中可觸知との也、

子三月 ○御觸帳に、年寄の副書日付を十四日とす、

左衛門

加賀

(同上)

題三三九

三月十八日、安治川北三丁目上荷船乗卯吉外十三名、難船助遣ひニ付、并木挽町

南ニ丁夜番人和泉屋平助外六名、盜賊又ハ怪敷者差押ひニ付、夫々御褒美被下

事、

安治川北三丁目上荷船乗

卯

吉市次郎

嘉兵衛

市兵衛

新右衛門

同町

徳右衛門

正三郎

卯之助

正兵衛

藤三郎

上荷船乗

平兵衛

岩右衛門

宗兵衛

安次郎

自印山ニ罷在

右ニ者共儀、當月三日安治川口ニおゐり、兵庫津渡海舟壹艘、強風ニお淺瀬に被吹付、及難儀

ひ節、銘々右舟に漕付、精々相働、危難を助ケ遣ひ段、兼る中渡難船助ケ方ニ義、厚相心得

故ニ義付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ひ、

閏二月廿九日

難船を救助せる卯吉外十三名に錢を賜ふ

舉動不審なる者ニ逮捕せる和泉屋平助外壹名に錢を賜ふ

舉動不審なる者ニ逮捕せる山本屋吉兵衛外二名に錢を賜ふ

盜賊を逮捕せる下人彌助外壹名に錢を賜ふ

金銀貸借訴訟に伴へる諸弊

其方共義、丁内見廻り、節、怪敷相見へ無宿せよを差押、所ニ者中合、召連訴出ひ段、兼る觸渡し趣相守、寄特ニ義ニ付、鳥目貳貫文ツ、差遣ひ、
木挽町南丁夜番人 和泉屋平助 同所瀧川町 播磨屋重兵衛借屋 右天神筋町外番天満長吏下 若キ者八郎兵衛弟子

其方共義、彌助吉兵衛方へ脇差帶シ盜ニ入ひ者を打倒、差押ひ得共、手ニ餘ひ様子ニ付聲掛ケ、卯之助も加勢ニ上、不取逃ひ様致手當、所者中合、召連訴出ひ段、兼る觸渡し趣相守、寄特ニ義ニ付、爲褒美彌助を鳥目貳貫文、卯之助を同壹文差遣ひ、
西横堀新築地名田屋嘉兵衛 支配借屋伊丹屋吉兵衛下人

出入に節紛敷代人介添等差出中間敷事、
三月十九日 金銀貸付に節、證文印形等精々入念相改、都正路ニ致取計、并右

右に通六年以前未年觸渡置一を見よ、ひ處、近比亦ニ心得方等閑ニ相成、兎角不束ニ及公事合ひ者不少ひ、元來金銀貸附に節、借請人共ニ印形入念爲引合ひ上、證文可取置筈ニ處、無其義、
御觸及口達 嘉永五壬子年 一九八九

證文の印形を檢せず
大盡金の貸付

金銀貸借を預證文の書式と爲す

證書類の讓與
代人訴訟

口入取次人等へ改方任置、取引の覺り、追お濟方相滯及出訴、双方對決の期に臨み、印形相違の趣申立、糺相成の類問と有之、こまらに貸主共別お不念に取斗を發シの義に有之の處、却お最初印形不分明の義乍弁、證文取置、甚敷に至りぬ、大盡金に唱、身元宜敷者抔放逸にて、歩合に不抱、猥に金銀借入の附ケ込、高歩に貸附の而已ならず、口入料世話料等名目ヲ以、右借入高の内多分引落シ、品と貪利奸計をよひ、夫是に義後日に相顯の時、外聞を厭、是悲共親類所役人等を取賤、不立様相濟シ可やを見込、取斗の族も有之哉に粗相聞、亦の普通に貸金銀證文あり、相手と者共先訴有之節、後訴に方引上ケ可相成と、奉行所取斗を差量、米穀并品物等預りの姿に仕成書付取之、内實の金銀貸出、右を借受の者も、眼前繰合相成の義を勝手存、事實相違に書付へ調印致シ、當用相弁の義打忘、是亦追お及出訴、對決の節故障に返答申立、或は金銀貸附諸品賣掛代滯有之の者共は、一應に沙汰も不致して、證文帳面類余人に讓渡并讓受、如何に及公事合の口と有之、殊に播磨の者共は多分病氣に由申立、代人訴訟而已致しぬ、右に者義奉行所を輕に敷心得、猶亦紛敷代人取扱、不束に出入におよひ仕義に至りぬ、本人を勿論所に者共迄も、重に不埒に亘りぬ、右跡に及所業の者共、先達を以來追お吟味の上、嚴重御仕置申付の義に有之、條、一統其旨を存、兼お觸渡に趣熟慮致、無違失相守、向後金銀貸出の節、證文印形等精に入念相改、都お不路に致取斗、紛敷代人介添等決お差出申問敷の、夫と所役人共も無益に出入不及様、厚心懸取扱可やの、自然此後も如何に筋於有之の、無用捨吟味の上、當人と不及や、所役人迄も急度可や付の間、其段も相心得、

不埒に取斗無之様可致ぬ、

右に通三郷町中可觸知をの地、

子三月 ○町中家持の承知判、
形口付は十九日なり、

左衛門
加賀

(同上)

補遺 七九〇 三月 來辰年朝鮮人來聘に付あり、郷中入用銀多分相掛り可やの間、前以達置

の事、

覺

一來辰年朝鮮人來聘に付あり、郷中入用銀多分相掛り可申の間、前以達置の様被仰渡に付、此段御通達可や、御承知置可被成、以上〇〇を見よ、

子三月

(御觸帳)

三三〇 四月朔日 妙法院宮御貸付金支配人増員并右貸付所の事、

妙法院宮御家頼

青木 内記
増人 横山 伊織

貸付旅宿 大津屋保兵衛

妙法院宮貸付金支配人の増員

貸付所

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九九一

○次の二令と共に、町中家持の承知判形日付は、四月朔日なり、尙醫二二八六及二三八七を見よ、

(御觸書承知印形帳)

圖五九五 同日 大坂三郷小便儀、攝河兩國之内、貳百三拾三ヶ村并加入村へ引請儀、復古付事、

大坂三郷町、小便儀、先前、攝河兩國之内、貳百三拾三ヶ村并加入村に引請、取附來に付あり、仲間組合の姿に相當り付、去寅年株札并問屋仲間組合等停止節、右村に限り引請ひ義の勿論、世話人或融通人杯を唱、小便賣買に携ひ義も差止、町在相對次第可致取遣段中渡○圖五五〇以来、双方自儘に取斗及増長、止ル處在、肥手不融通相成由相聞ひ、然ル處此度諸問屋組合共再興中渡の義に准り、町と小便儀、攝河兩國之内、貳百三拾三ヶ村并加入村に引請ひ義、都が先前に通復古付の間、一統其旨可存ひ、尤小便儀も、下尿同様商物に無之、其上在、肥手不融通あり、田畑養ひ方不行届、諸作出來劣、自然万價に抱ひ筋に付、町在に者共其義を厚相弁、不正路に取斗無之様嚴重可中合ひ、

但、小便世話人并融通人を唱ひ者に儀、中買を譯も違、畢竟村に弁理に中合ヲ以、取扱有之趣にて、表立ひ名目にも無之上り、右に廉興(廢)儀不及沙汰、此後村に中合次第可致ひ、右に趣三郷町中可觸知をの地○圖五二二を見よ、

子三月

左衛門

加賀

(同上)

圖三三二 同日 百姓町人賣荷と分、武家或の宮門跡堂上方荷物と躰に仕成り、又右向

攝河貳百三拾三ヶ村并加入村々の小便請負再興

世話人融通人の設廢は引請村々の勝手次第たる可し

賣荷を武家方荷物に混じて發送するを禁ず

口達

家來に由り成り、致旅行、其外賣荷を飛脚荷へ交ひ儀致間敷事、賣荷を武家或宮門跡堂上方等荷物と躰に仕成、又百姓町人(姓)に身分あり、右に向に家來杯を中成、旅行致シ、其外賣荷を飛脚荷へまゝへ類有之趣相聞、不届に事に付、右躰に取斗致間敷旨等と義、十六ヶ年以前酉年從江戸表御觸○圖五二四有之の處、近年相弛、當表町人賣荷を飛脚宿に者ぞ中合、武家方荷物へまゝへ、江戸其外に差下シの類、間々有之哉に相聞、以て外に賣此の條、以來右躰に取斗決り致間敷ひ、自然此後も賣荷を武家方飛脚荷にまゝへ類の勿論、其余と義共都が前段御觸と趣、不相用者有之様子相聞ひ、早速召捕嚴重可中合の間、一統其旨可存ひ、

子三月

(同上)

圖五九一六 四月八日 中山道千曲川川越賃錢割増事○圖五七三を見よ、

圖三三三 四月九日 本多加賀守殿參府事、

本多加賀守事被爲召、四五日に支度に參府事、

四月九日

(御觸帳)

圖五九一七 ○圖四に同じ、

圖三三三 四月晦日 安治川南四丁目上荷船乘八右衛門外十二名、難船助遣に付、并梶木

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九九三

町吉田屋庄七支配借屋播磨屋熊太郎代判清右衛門下人庄七外男女四名、忠勤又の
孝心奇特成者ニ付、夫と御褒美被下事、

安治川南四丁目
上荷舟乗

八右衛門

難船を救助
せる八右衛
門に錢を賜
ふ

右に者義、先月廿九日於安治川口、藝州三月郡橋村渡海舟政平船、強風なる淺瀬に被吹寄、損
所出来、水入相成及難義の節、迎ニ居合、早速右船に漕付、危難ヲ助ケ遣段、寄特ニ義ニ付譽
置、爲手當鳥目五百文遣い、

同所
上荷舟乗

淺右衛門 吉兵衛 作三郎 安右衛門 儀三郎

清治郎 嘉兵衛 庄三郎 卯兵衛 留藏

難船を救助
せる淺右衛
門外九名に
錢を賜ふ

右に者義、三月十六日於右同所、紀伊塩津浦源兵衛船、俄に強風なる淺瀬に被吹付、及難儀の
節、相詰罷在、早速右船に漕付、精々相働、危難ヲ助ケ遣い段、兼あや渡難船助ケ方ニ義、厚
相心得の故、義ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣い、猶此上無油斷相心掛の様可致い、

安治川六軒屋濱
上荷舟乗

太助

難船を救助
せる太助外

右にの義、當月五日於安治川口、兵庫津に荷物積送り橋通壹丁目佐賀屋卯兵衛外壹人、乘

壹名に錢を
賜ふ

組罷歸りの折節、高波打込船返りゆに付、右太助庄治良良に居合、早速漕付相働、危難ヲ助ケ
遣ス段、寄特ニ義ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣い、

梶木町吉田屋庄七支配借屋

播磨屋熊太郎
代判清右衛門下人

庄七

忠僕庄七に
錢を賜ふ

右庄七義、廿貳ヶ年已前熊太郎父幸兵衛時代、奉公ニ有付實躰ニ相勤の罷在內、拾六ヶ年已前
主人幸兵衛致病死、其節熊太郎貳才ニ付、家業万端難取續、同人母うた親里に家内同家ニ罷在
ゆゑ、渡世向涉々敷無之ニ付、後家うた俱々致心配、代判清右衛門相談ニ上、拾四ヶ年已前
當丁内丸道屋三郎兵衛支配借屋に別宅ニ上、家事の代判清右衛門致世話、渡世向掛引等此者引
受、彌出情相働罷在、諸事直實に取斗ニ付、うも清右衛門相談ニ上、九ヶ年已前當時に通致變
宅、同様此者万端引請、家業誠實ニ相働、年比にも相成ゆに付、往々爲別家料半季毎ニ給銀等
貫請ひ得共、自用ニ不遣捨、度毎ニ外方へ相預ケ、亦と親元へ差遣い、熊太良義の生得病身を
のニ付、後家うた俱々心配養育ゆゑ、追々成人ニ付、亡主幸兵衛已前相勤の主家へ奉公ニ差
遣シゆ後も、彌此をの渡世向相働ニ付、得意先等亡主幸兵衛存生中方を相増、日々早朝を得意
相廻り、夕方罷歸り、夜分の自儘ニ他出不致、五節句神夏迎平常に着用ニ相廻り、遊藝見物
等ニ不罷越、後家うた意ニ不背、睦敷相仕、諸事相慎、主家身上向立直シ度一途ニ心掛、熊
太郎ヲ致太切ゆ段、寄特ニ付譽置、鳥目五貫文差遣い、

御觸及口達 嘉永五壬子年

安堂寺町五丁目

河内屋利兵衛支配借屋
中屋文右衛門伴

孝子千之助
に錢を賜ふ

右千之助義、父文右衛門の藤細工職渡世罷在の處、母せん拾壹ヶ年已前致病死、父文右衛門拾ヶ年已前方眼病相煩、職業難相成、無據按摩仕覺、渡世罷在、九ヶ年已前十月、妹むら致病死、父文右衛門愁傷、余不相勝の處、此者氣實躰成とのこあ、父ヲ致太切、万事意ニ不背、日々未明方食物致煮焚相与に、父文右衛門夜分草臥の節を、手足撫さとりぬる、太切ニ取扱、同人義も按摩渡世出情相稼ひ得共、何分病身こあ不抄取、日用凌兼、困窮彌増の義を、此者幼年こひ得共致心配、兼あ見覺の藤細工職致出情のこ付、父こ手助ケ相成、文右衛門相悅罷在、同人同年十二月頃方、追々眼病及全快こ付るを、按摩渡世相止、手馴ひ已前藤細工職ぬるこ得共、一旦必至困窮こ迫、家賃等も爲滞の處、此者十五六才頃方壹人前こ仕事ぬる、五六ヶ年已前方親子致出情、相應こ取續出來、安堵こ相暮、諸懸合を勿論、家賃銀も滞無之、此者平生身分相慎、五節句其外休日こあも相稼、物見遊參こも不罷越、出情ぬる、孝心寄特こ付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

玉造平野口町
辰巳屋伊兵衛別家手代

右伊兵衛支配借屋

辰巳屋利助
子四拾三助

辰巳屋利助
の忠勤を賞
し錢を賜ふ

右利助、幼年こ砌、主家先代伊兵衛方へ奉公こ有付の節、實躰相勤ひこ付、同人時代別家爲致貫ひ得共、仕分銀等不貫請、其後主家へ致通勤居、内、同人伴藤三良義、拾四ヶ年已前方濕病相煩、身躰自由難成こ付、背こ負入湯、其外叮嚀こ介抱爲行届ひこ付、追々及快復、且右伊兵衛差圖ヲ以、七ヶ年已前和嘉高市村古川坊條村新三良妹ぬる女房こ呼迎、右ぬる義も日々主家に罷越、臺所賄方取縮罷在、然ル處右伊兵衛義、六ヶ年已前病氣取合の節、藥用介抱爲行届ひへ共、終々養生不叶相果ひこ付、右藤太良儀伊兵衛を改名致相續、同人病身者こ付、亡主伊兵衛心勞罷在の義を相察、不相變情勤ぬる、店方引受、身分相慎、二代引續三拾年余も主家太切こ心掛ケ、段、寄特こ付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

農人橋貳丁目
錢屋清兵衛支配借屋

木屋虎之助代判佐兵衛下女

子三拾六才

忠婢なかに
錢を賜ふ

右の義、河嘉吉田村百姓又治良娘こあ、主人虎之助父空兵衛を中者、濃嘉出生こあ、先年虎之助母ぬるに聲養子罷越、養母とミと家内三人相暮、他丁こあ木綿商ひ致渡世の内、拾壹ヶ年以前寅年六月虎之助出生後、同九月ぬる相果、其節ななか乳母奉公こ罷越、虎之助ヲ養育致し罷在、七ヶ年已前虎之助五才こ相成の節、父空兵衛義、國元實家及斷絶、期こ至、無據相對し上、養母とミを離縁請、名前退、虎之助ヲ殘し置、實家に引取の跡、同人名前こ相成、代判人その他所住居こあ、虎之助方無商賣こ相成、取續方こ抱ひこ付、あのも一旦暇請の筈こ中談

ひ得共、幼少、虎之助ヲ老年に祖母すみ致養育、家名取續ひ義無心元、すみ義も心便無之ゆ、
種に致心配ひ次第氣と毒と存、且虎之助義、右躰出生無間も母さんと死別相成、おのこ養育請
ひ義に付、別お同人ヲ相慕ひ愛情難忘、何分主人に爲筋を存、給料の不貫請、俱稼に相働、
虎之助を養育致し積中談、とを爲致安心、暇ヲ貫ひ義に相止、其已來幼年に虎之助并老年
にとみと三人相暮ひに付あき、同人中合、縫仕事を外に請ひ、又おの仕覺と木綿を織糸績
いふ、日用取賄、去、戌九月書面と借屋へ引越來、不相替績と出情致し、其透間こそ他見
を不厭、雜菓子類ヲ背負賣歩行、無給こそ晝夜出情相働、虎之助とみを大切に相養ひ、日用小
遣等差支の節、却お所持と衣類等迄差出、家事取賄、其身の諸事相慎、行状も宜、右躰誠實
に幼主ヲ守立、老年にとを相育、出情相稼の段、心妙寄特と由相聞ひに付譽置、鳥目拾貫文
差遣ひ、

北谷町松屋元藏支配借屋
坂本屋藤吉養娘

孝女ちうに
錢を賜ふ

右ちう義、農人橋壹丁目大和屋清兵衛實子にて、六才に節書面藤吉方へ養女に相成、成長に隨
ひ、琴三味線爲習貫、藤吉の髮結働、同人女房みのり人形下地張ひ義を手職にひひ罷在ひ處、
藤吉義拾七ヶ年以前お病身に相成、渡世難出來難溢ひせしに付、ちう義養母との俱に致心配、
習覺ひ琴三味線等、指南相始、弟子先お聊に謝禮貫請、日用相賄居ひ内、四ヶ年以前酉四月、

本多安英轉
任

隣家か出火に類焼に逢、家財不殘焼失ひふ、極難溢に落入、所と知ル邊に方厄介に相成、
同六月漸書面と借屋借受致住居ひ得共、母みのりの義も近來多病にあり、別お取續方に抱に付、ちう
義懇意に者相頼、其手筋ヲ近在迄にも琴三味線と指南に罷出、其日ヲ送居の折節、去、戌年五
月以來、藤吉中風と症にあり不相勝、起居自由不相叶而已ならは、食物と色と相好、又と夜中
あき氣隨と義と中聞ひ義も有之ひ得共、聊意に不背、相好の品買調、或弟子先お貫受の品持
歸相与に、兩便と世話迄も心こ叶ひ様誠實と取斗、介抱爲行届、其上母みのりも去亥七月比お病
氣差重ひ得共、藥用不致ひと、全藥料と失費ヲ存量の儀と心配ひふし、兼お右等と手當ひふ
置ひ趣に成相勸、醫師掛爲致藥用、殊藤吉右躰病症に付、穢物出來ひを手早に取片付、日
出情相働、夜分の及深更に迄も縫仕事致し、兩親を相養ひ、或知音に者聲養子相勸ひ得共、父
に介抱不行届の様相成ひあき、不宜に逆程能や斷、勿論物見遊參等に罷越ひ義も無之、万事相
慎、右躰病氣と養父母を大切に致ひ段、寄特と由相聞ひ付譽置、鳥目五貫文差遣ひ事、
○南組惣年寄の副書
日付は四月晦日なり、
(御觸書承知印形帳)

圖五二八 五月六日 本多加賀守殿御勘定奉行被仰付ひ事、

本多加賀守御勘定奉行被仰付ひ、此旨三郷町中可觸知との也。○圖五八六

子五月〔六日〕

左衛門

(同上)

圖五二九 同日 日光道中房川渡船役困窮に付、渡船賃錢割増し事。○圖五七三七及
六二二〇を見よ、

圖三三四 同日 南渡邊町小橋屋善兵衛支配借屋古田屋文吉同家ちか外壹名、孝心又と忠

御觸及口達 嘉永五壬子年

一九九九

勤奇特成者ニ付、夫々御褒美被下事、

南渡邊町
小橋屋善兵衛支配ウーヤ
古田屋文吉同家

孝女ちかに
錢を賜ふ

右ちか義、亡父武助を素々右渡邊町家持丁人ニあり、同人并母妙照前名かた兄豊吉諸共相暮、藥種渡世罷在ひ處、五拾壹ヶ年已前父武助致病死、其後母妙照後夫貫請ひ處、不身持ニ付致離縁、兄豊吉武助を改名ひせし、相續罷在ひ處、妙照義多病ニあり、右武助并此者も、其比年若故、商賣向耽々出來兼ひニ付、追々身上向不如意相成、家屋敷賣拂、書面小橋屋善兵衛借屋借受、細々致商賣居ひ内、武助義女房貫受、悴文吉出生ひ多し、妙照義貳拾一ヶ年程以前病氣差重、家事賄々世話も出來兼、追々致老衰ひニ付、武助悴文吉名前にて、右借宅と裏借屋、當時通隱居所ニ借受、此者付添介抱罷在ひ處、武助義勝手ニ付、拾ヶ年已前權右衛門町泉屋源兵衛借屋へ致變宅、仕來渡世致ひニ付あり、同人商賣向手足兼ひニ付、悴文吉義も其比手旁引越、右隱居所と此者壹人妙照付添、藥用介抱致し、右透間ニ織縫賃仕事等出精相稼、妙照相望ひ食物と勿論、諸事入用等相賄、同人義四ヶ年已前足なへ相成、身體自由難出來ひニ付、猶更傍を不離、兩便致世話、且入湯相望ひ節、湯屋へ連行ひあり多人數入込ニあり、自然怪我等有之ひあり如何ニ付、近隣懇意ニ者に湯焚ひ節相頼、脊負連行、入湯爲致、殊ニ若年比も縁付と義ヲ來ひ得共、只母病氣を厭、其儀相斷、懇ニ介抱行届、勿論母妙照長病氣ニ付、物

入等も相嵩ひ故、無油斷出精相稼、尤書面ニ年比相成ひ得共、以前身分相慎、龜服を着、物見遊參等ニ不罷越、孝養を専ニ心掛ひ段、女ニ身分ニありと別寄特ニ由相聞ひニ付譽置、烏目七貫文差遣ひ、

車町
嶋屋利藏代判庄兵衛家守

大和屋伊兵衛

大和屋伊兵衛
の忠勤を
賞し錢を賜ふ

右伊兵衛義、生國伊勢名張本町徳田屋甚七悴ニあり、幼名徳松と云ひ節、四拾貳ヶ年以前、當表唐物町四丁目八幡屋忠兵衛下人善七義と同國ニ者ニ付、同人手續ヲ以、順慶町五丁目檜波屋市兵衛方へ奉公ニ有付、實跡ニ相勤ひニ付、拾九ヶ年已前此者伊兵衛と改名、主人市兵衛借屋に致別宅、商賣向仕分等別段不請、諸道具少々并ニ得意先貫受罷在ひ處、前書市兵衛義、貳拾ヶ年已前病氣ニ付、種々藥用介抱爲致ひ得共、養生不叶相果ひニ付、市兵衛悴伊三良儀、市兵衛と致改名相續ひ處、不如意相成ひニ付あり、市兵衛母老々伊三良娘等難澁ニ成行、此者致心配、爲賄料節季毎ニ銀五百目ツ、差送り居ひ得共、市兵衛義身上不如意ニあり、家屋敷の質取主淡路町壹丁目米屋常七方へ流込、猶亦同人方へ身躰限り等相渡、家内不殘生玉社地河内屋利助方へ引取、市兵衛同所にて生花致指南相暮罷在ひ得共、難取續、追々此者方へ無心中越、是迄凡金五拾兩余も相贈ひ上、母并小兒共難立行、退轉可及義を相歎、志々安んじた処、前書伊三良名前ヲ以、順慶町五丁目炭屋治良兵衛貸屋借請、志々下女差添別宅、此者致入

魂の長堀心齋町袴屋政七相頼代判爲致、節季毎に金四兩ツ、當時に至迄差送、此者義拾ヶ年已前書面と丁内に致變宅、主家大切のい多し、前書伊三良のい多義の此者方へ引取致世話、追々成人相成、商賣向爲仕覺罷在の内に、いま義拾六才相成に付、去、戌年此者手元にて相應に荷物等取捨、本町三丁目山城屋佐兵衛方へ爲嫁付、伊三郎の今以此者方にて守立罷在、其上志少う意に不背、珍敷品等有之節の相送、諸支心ヲ用ひ、主家年回等の此者方にて相營、行狀相慎、衣服を着、物見遊參等も罷越、大切の心掛ケル段、寄特に付譽置、鳥目拾貫文差遣、

子三月 ○前の二令と共に、町中家持の承知判形日付は五月六日なり、

(御觸書承知印形帳)

觸五三〇

五月九日 青物市場問屋組合再興中渡の上の、素人共諸青物類直賣買致間敷事、

天満青物市場へ在方々差出の諸青物類、素人直賣買不相成義と處、去、寅年間屋仲買組合停止被仰渡の後、商法相乱、品々差支の筋も有之のに付、去、亥年右問屋仲買組合再興被仰出、諸商賣共都る如前、品何品に不寄、其筋問屋に可相拂段も中渡の義に有之の處、右中絶中の流弊に泥、又と不心得のものを有之哉、市中船宿亦も商人共致直買、八百屋小店等に直賣の多し、或在、出口に商人共出迎、途中あわく買取、門先演先等、この賣捌のものを有之、市中間屋仲買共商賣と差支に相成、難義の旨願出の、右青物市場と義、今般問屋組合再興中渡の上の、外々この右跡と義致間敷事この間、以來市場に可差出諸青物類直賣買致間敷の、自然紛敷仕方有之のい、吟味の上急度可及沙汰の條、心得違無之様可致の、右、趣三郷町中不洩様可觸知者也(觸五〇二七及、六二二二を見よ、)

天満青物市場問屋仲買の再興
青物類の素人直賣買を禁ず

子五月 ○町中家持の承知判形日付は九日なり、

左衛門

(同上)

觸三三五

五月十七日 質素儉約の儀に付、去、寅年以來觸書と趣不弛様、堅可相守の事、

口達觸

(一脱)

一世上一統花美の風儀成行のに付、質素儉約の儀に付、十貳ヶ年以前丑年七月、其後流弊の筋風儀に抱の廉と取締の義、追々相觸のに付、御取締御改革の御趣意、永く貫通可致の勿論、と處、去、亥年諸問屋仲間組合再興被仰出のに付あり、最前右問屋仲間組合停止被仰出のとき、御取締御改革と同時に付、心得方致混雜、御取締の筋も無何と弛の哉にも相聞、以、外と更この、御取締御改革の義の、享保寛政の度被仰出の次第に基、猶世上風儀に抱の義等相改めた免、追々相觸の義の、問屋仲間(組合等)再興の筋を、一様と更この無之の條、篤と致弁別、去、寅年已來追々、觸書と趣不弛様、銘々堅可相守、自然以後違失の族於有之の、急度可令沙汰の、右、趣三郷町と末と迄不洩様可令聞更(觸二一五、六を見よ、)

子五月 ○町中家持の承知判形日付は十七日なり、

(同上)

觸五三二

五月十九日 石谷因幡守殿大坂町奉行被仰付の事、

石谷因幡守 ○穆義、今十九日大坂町奉行被仰付の段、土屋采女守殿被中渡の、此旨三郷町中可觸知者也(御觸帳に下札あり、觸四五二六の下、札と大差なし、觸六〇一二を見よ、)

子五月十九日

左衛門

(同上)

補七九

五月廿六日 石谷因幡守様御到着の事、

御觸及口達

嘉永五壬子年

儉約令は諸問屋興廢令と關係無し

町奉行石谷穆清

因幡守様、今日當表御到着被成の間、此段承知可有之、以上、

子五月廿六日

南組惣年寄

(同上)

圖三三六 五月廿九日 天滿攝津國町大和屋幸助支配借屋根來屋喜八伴藤三郎外女壹名、孝心又の貞節奇特成者に付、夫、御褒美被下し事、

天滿攝津國町
大和屋幸助支配借屋
根來屋喜八伴

藤三郎

孝子藤三郎
に錢を賜ふ

右藤三良義、父喜八を加筋日吉村百性(姓命)にて七右衛門伴、廿壹ヶ年已前辰年妻子諸とも當地に引越、日雇働致渡世、此者儀の拾貳歳に比、攝碁難波村中丁疊職河内屋喜兵衛方へ、拾ヶ年奉公に罷越の後、喜八追々及老衰、日雇働も難相成、素々困窮相暮シ罷在の義を深く心配ひ、主人に申斷、日々主家職業仕舞の上、纔に儲可致及深夜迄相働、休日逆同様に相働、聊宛別段に賃錢貫請、右貫溜に錢貯置、年々七月十二月兩度に金壹兩余ッ、其外折々小遣錢等相貢、主家手透に砌を暇を乞兩親を相訪、好し品等を買調、不行届無之様ひ、毎年主人が貫請に仕着セ等も兩親に相贈、自分の僉服ヲ着、主家大切に相勤罷在の處、五ヶ年已前申年季相滿の付、仕分料と一錢百貫文并諸道具類等貫請に得共、其儘主人に預ヶ置、其後の主家に被相雇、あ、奉公中同様大切に相勤、右仕分貫の後、節季毎に金貳兩ッ、相貢、兩親日用

に賄万端不行届無之様致し、去亥三月姉とへ外方へ嫁付の節、錢三拾貫文余差贈、身は廻相調遣、平日身分相慎、物見遊參等にも罷越、孝養を專に心掛ケの段、寄特に由相聞の二付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

天滿八丁目
針屋忠右衛門借屋
堺屋貞助女房

沈

貞婦とめに
錢を賜ふ

右と沈義、夫貞助を豆腐屋渡世にて、同人方へ嫁付の後、男子出生ひ、得共、無程相果の二付、天滿綿屋町長柄屋佐右衛門娘を養女に貫受、家内睦敷相暮居の處、貞助義六ヶ年已前末年、疝中風差發の付、藥用爲行届の得共、手足等も不叶様成行、兩便を勿論寢起に至まて、厚介抱ひ、相好の食物等も夫と相与に、聊夫に意に不背、日々未明か家業出情相稼ひ得共、女に義且の夫病中物入多、追々困窮差迫、付、渡世に透に按腹療治相稼、儲錢ヲ以ケ成に相暮、右兩職に付得意先に罷越の節、夫に服藥并給物等相調置、娘をへや付、傍に爲付添、隣家にも懇に頼置、家更向万端心ヲ付、諸掛合無之、右妹女に手業を渡世向取續、長病に夫ヲ致大切、貞節ヲ專に心掛ケの段、寄特に由相聞、二付譽置、鳥目三貫文差遣ひ、

(同上)

○南組惣年寄の副書日
付は五月廿九日なり、

圖三五三 〇例五
に同じ、

圖三三七 六月朔日 地車太鼓、糸りの等、飾又を藝者と衣裝、自今木綿晒を可相用、右届

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇〇五

出上及見分事、并地車行逢節、曳違を唱、事六ヶ敷掛間敷事〇二一七

補遺 七九三 同日、女髮結ニ髮結セハ儀、并湯屋男女入交ニ儀不相成事、

當月朔日惣御年寄中々左と通被仰渡ハ、

女髮結の禁

一此節女髮結流行いふハ趣相聞ハ、女髮結ニ髮結セハ義不相成段、兼被仰渡有之義ニ付、其旨無違失可相心得ハ、

男女混浴の禁

一湯屋男女入交リ義も不相成段、兼被仰渡も有之處、此節多入交リ入湯可致趣相聞、以來右様ニ義無之様、急度可相心得ハ〇補遺七三五を見よ、

補遺 七九二 六月五日 失物取調方相改事、

(御觸帳)

盗難紛失品の調査手續改正

質屋・古道具屋・古手屋仲間再興ニ付、名前帳取調出來、向後失物觸達右三商ニ者ニ直ニ相廻シハ、右ニハ模様品物帳等ニ義も、町ニ不及取扱、此段可被相心得ハ事〇補遺六三〇及七八二を見よ、

子六月五日

掛物年寄

(御觸書承知印形帳)

補遺 七九四 六月廿八日 火元入念可事、

火の用心

早打續、間火元念ヲ入、用水汲溜等行届ハ様、精ニ可被ヤ合ハ、以上〇二一七及二二九を見よ、

六月廿八日未上刻

南組惣年寄

(同上)

圖三三六

六月廿九日 安治川南四丁目上荷船乗平三郎外十五名、難船助遣ハニ付、并内平野町壹丁目帶屋宗七借屋柳屋新兵衛、盜賊差押ハニ付、夫ニ御褒美被下ハ事、

安治川南四丁目上荷船乗

- | | | | | |
|-----|-----|----|-----|----|
| 平三郎 | 伊三郎 | 徳藏 | 嘉兵衛 | 儀助 |
| 十三郎 | 忠助 | 淺吉 | 勝藏 | 佐吉 |
| 房吉 | 源九郎 | 長松 | 平治郎 | 龜吉 |
| 友吉 | | | | |

難船を救助せる平三郎に外十五名に錢を賜ふ

右ニ者共義、先月十一日同廿六日、安治川口於テ、廻狀貳艘俄ニ強風ニハ淺瀬へ被吹付、難儀ニおよビハ節、迎ニ居合、又ニ出役ニ者差圖ニ隨ヒ、早速右船ニ漕付、精ニ相働、危難を助遣ハ義、兼ニ渡難舟助ケ方ニ義、厚相心得ハ故ニ義ニ付譽置、爲手當平三郎外五人ハ鳥目五百文ツ、忠助外九人へ同壹貫文ツ、差遣ハ、

子六月十九日

内平野町壹丁目

帶屋宗七借屋

柳屋新兵衛

盜賊を逮捕せる柳屋新兵衛に錢を賜ふ

其方義、隣家源助ハ頼を受、同人留主中心付ハ覺シ居、内、右方表ニベリを明、盜ニ立入ハものを差押ハ段、兼ニ觸渡ニ趣相守、寄特ニ義ニ付、爲褒美鳥目貳貫文遣ハ、

御觸及口達 嘉永五壬子年

○南組惣年寄の副書日
付は六月廿九日なり、

(同上)

圖三三九 同日 炎暑と砌こひ共、火と元無油斷入念可事、

口達

火と元と儀こ付あり毎々中渡、觸書をも差出置の義に、得共、土用入已來照續の付あり、諸品
乾キ火移多とく可有之、暑氣と節の火災無之と、心弛ゆる等閑相成の故、既此頃及出火時宜
付、炎暑と砌こひ共、無油斷火と元念入、丁々用水汲溜置、夜番人とも見廻り無忘様可事付の、
右と趣三郷町と末と迄不洩様可事聞事、
○圖三三九八及
○圖三三九四を見よ、

子六月 日付は廿九日なり、
○南組惣年寄の副書

(同上)

圖三三〇 七月朔日 七夕短冊竹精靈祭の品々、川へ捨間敷の、尤右品々を 公儀御入用

觸五三三 七月六日 川筋掟と事、
○圖三三八
こ船を出し、取捨させし事、
六に同じ、

補達 七五五 同日 千日參七墓廻と者、鉦太鼓を携ひ儀可爲無用事、
○圖三三二に同じ、但し、
「先達相觸置」とあるを「是
迄相違置」
に改む、

觸五三四 〇圖三三二
一に同じ、

補達 七五五 七月八日 穢多雪踏直と者共、下駄と齒入爲致間敷事、

一下駄齒入渡世と者町内相廻りゆ處、近來穢多雪踏直シとの、右下駄と齒入致シゆ由、右と先
年と通り夫と相分りゆ様可致旨被仰出ゆ付、爲直ゆ者も相心得ゆ様、口上こお御中渡有之ゆ、

穢多に下駄
の齒入を爲
さしむ可か
らず

以上、

子七月八日

(御觸書承知印形帳)

圖五三五 七月九日 素人こお砂糖荒物仲買同様と渡世致間敷事、

右と通十二ヶ年已前丑年相觸、
○圖五四二
ゆ處、其後諸株問屋仲間組合等停止、素人直賣買被仰渡
ゆ付、前書觸書と趣弃捐と相心得、仲買と外、素人共勝手次第諸國在とに賣捌ゆ付、仲買
とも荷物不捌ゆ難澁ゆ由、然ル處今般諸問屋組合再興被仰出ゆ付あり、前書觸渡と趣相心
得、素人こお仲買同様と渡世致間敷ゆ、自然相背こおるゆ、吟味と上急度可令沙汰ゆ、
右と趣三郷丁中可觸知との也、
○圖六五五
五を見よ、

子七月 〇町中家持の承知判
形日付は九日なり、

因幡

(同上)

圖五三六 七月十三日 絞草絞油共直段下直と相成ゆ様可心掛事、在と仲買と稱、油稼をも

不致素人共兩種物賣買と携中敷事、村と兩種物と賣口、町在油稼人と絞油賣口、
大坂油問屋仲間買と絞油賣口并買口と事、

油相場と義、絞草直段に絞入用等元附と見合、并菜種綿實等豊凶と差別も有之、何とに絞草
直段より、油相場を生ゆ管と可有之と處、近來油相場と引當、絞草賣買ゆ多、本末及混雜
ゆ付あり、油高直と隨ひ、絞草直段引上ケ、右引上ゆ直段猶又油相場へ相響、先繰次第送り
と直段引上ケゆ由相聞ゆ條、先達米高直と節諸色にも相移、夫と高直と相成ゆ得共、去秋已來

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇〇九

油相場は絞
草の直段に
因る可し

無株にて砂
糖荒物仲買
類似の業を
營むを禁ず

絞草の直段は其作柄の豊凶に因る可し

株仲間解放中に在る種物仲買の弊

在方仲買を禁ず
絞草の買口

絞草の賣口

兩種物問屋の再興と右問屋の業務

米相場引下ケ、殊當子年(柄)の義、在、茶種出來(柄)も隨分宜ハ趣ハ上ト、絞草絞油とも追レ下直ニ可相成處、無其儀段、如何ニ亘ルハ、日用ニ油高直ニてハ諸民致難儀ハ付、前カ厚御世話も有之義ニ、間、在ニあルてハ絞草出來方ニ應ジ、相當ニ直段を以、成丈ケ下直ニ可賣出ルハ、大坂絞油屋始在、油稼人共其程を考、直段引上ケ糴買等決ル致間敷ハ、當節新茶種賣買專ニ義ニ付、心得違無之様可致ル、

一去、寅年株札并問屋仲間組合等停止、諸品素人直賣買勝手次第相成ルニ乘リ、在ニあルク仲買を唱、油稼をも不致素人共、兩種物賣買ニ携、徳用取ル義及増長ハ由ルハ、右躰賣買手越相成ル故、絞草絞油とも高直相成ル哉ニ相聞、其上右仲買を唱ルハ、兩種物賣買ニ携間敷ハ、前カ中渡有之處、猥再發ルハ、以テ外ニ亘ルハ、既此度諸問屋組合とも調シ上、再興相成ル分ハ、都テ素人直賣買不相成、間、前カ如ク可相心得旨、御觸も有之義ニ付、旁其段嚴重相守、在、仲買を唱、油稼をも不致素人共、兩種物賣買ニ携ル義決ル不相成ルハ、且大坂絞油屋始在、油稼人共、絞草ニ義ハ是迄ニ振合を以、寂寄村(姓)共ト相對次第直買致シ、又此度調シ上、再興相成ル兩種物問屋を賣出ル分をも買受、出精相稼可シ、

但、村、兩種物ニ義ハ、大坂絞油屋始寂寄在、油稼人共ニ賣渡、又運送等ト便利ニ寄、兩種物問屋へ差送り外、他所積等不相成旨、兼テ中渡有之趣相守、不取締ニ義無之様可致ル、且此度調シ上、再興相成ル兩種物問屋義も、國ニより廻着ニ茶種綿實等買受外、寂寄在、より差送ル分、是又前カ如買受、町在油稼人共ニ平等ニ行渡ル様心懸可取捌ル、勿論右賣

方買方とも無謂直段引上ケ中間敷ハ、

一右躰近年諸品素人直賣買勝手次第相成ル寄、町在油稼人共絞油ニ分、銘ニ手元カ他國賣、并寂寄小賣屋ニあル賣、或大坂油仲買共ニ直賣致シ、同所油問屋ニ出油相減ル付、自然相場高直ニ相成ル一基ニあル、其上右油問屋カ江戸積廻り油高ニ抱ル由相聞ル、然ル處此度前條ニ通り諸問屋組合等再興相成、諸品賣買方ニ義ニ付テも、御觸而テ趣弁別致シ、在、油稼人共絞油ニ分、大坂油問屋ニ差出、猶も出精絞増ル分を以、住國一國限直小賣致シハ格別、他國賣致間敷ハ、尤大坂絞油屋共義も、銘ニ手元カ絞油ニ不殘同所油問屋ニ賣渡可シハ、尤大坂地廻ル唱、三郷并町續在領ル義も、兼テ油仲買共賣場ニ差定有之義ニ付、大坂絞油屋共直小賣不相成ルハ、右油仲買共入用油ハ、油問屋共カ買受外、決ル他カ手カ拔買致間敷ハ、勿論右地廻賣場ニ外、兼テ取引仕來ル故を以、他所カ油注文受ル節ハ、油問屋へ寸談、差支無之様可致ル、

但、攝碁ニ内灘目并水車新田水車油稼人共絞油ニ分、江戸大坂へ差廻方ニ義ハ、兼テ仕來も有之、是又前カ通り可相心得ル、

一大坂油問屋共油賣買方ニ義も、是又前カ通相心得、江戸大坂ニ融通ヲ專ニ心掛、精ニ取斗、決ル新規ニ自法等相立テ中間敷ハ、
右ニ趣觸渡ルハ、尤大坂油賣買元方取締主法ニ義、追テ中渡ル義も可有ルハ得共、差向一統此旨相守、賣買方口錢等も成丈ケ引下ケ、正路實直ニ渡世可相營ル、總テ直段ニ高下ト、其筋ニ者

株仲間解放中に在る種物仲買の弊

町在油稼人の絞油賣口

油仲買の絞油賣口及買口

大坂油問屋の絞油賣口及買口

共賣買方、掛引も寄事付、銘一己と利欲不抱、絞草油直段とも下直に相成の様、能く勘弁取斗可や、若又此後も不良仕方を以テ、夫と直段引上ケル者有之様子相聞ひ、急度可令沙汰、

右と通三郷丁中可觸知者也、○圖五四九六及六四八四を見よ、

子七月○町中家持の承知判、形日付は十三日なり、

因幡

左衛門

(同上)

圖五九七 七月十八日

東海道天龍川渡船賃錢割増事○圖五七三九及六一一七を見よ、

圖五九八 ○圖六

に同じ、

圖三三三 七月十九日

新規仲間加入者共々、多分と禮銀振舞杯爲致間敷事、

口達

此度問屋調上再興相成ひ分り、都る素人直賣買不相成ひ間、前々如く可相心得旨等と義、從江戸表御觸有之の付あを、大坂表と義も問屋組合共再興相成ひ分り、同様相心得可や段、當正月相觸置○圖五九〇、處、右問屋組合等と内、心取違者も有之、其後仲間加入者有之節、前々仕來ひ迎、其品柄不相當と禮金又と振舞料杯乞ひ分も有之哉と粗相聞ひ、右躰前々如可相心得旨ヲ渡ひ義の、賣買筋と義あり、外仔子細無之處、元仲間と者共身勝手に引付、不直と及談ひ段、不埒と至二條、早と相改、此後新規仲間加入者有之の、兼あや渡置の通り、其者共より多分と禮金振舞等爲致間敷と勿論、諸君右や渡し趣無違失相守、不取締と義

仲間新加入者より多額の禮金を振舞料等を徴するを禁ず

無之様精々心懸ケ、銘と渡世正路實直に可相管ひ、自然此上にも欲心迷ひ、右や渡を不相用者有之、い、吟味と上嚴重可や付直二條、一統此旨ヲ存厚可や合ひ、

右と通三郷丁中端と迄にも不洩様可や通事○圖二二八

子七月○町中家持の承知判、形日付は十九日なり、

(御觸書承知印形帳)

圖五九二 七月廿一日

京都東山光雲寺祠堂金、相對を以借請ひもの、元利無滯可相濟事○

三七〇八に同じ、但し、「明和二酉年迄」とあるを、「寛政六寅年迄」に改む、

圖三三三 七月廿四日

白米小賣直段と儀、米相場に應へ正路と賣方可致事、

口達

町と搗米屋共白米小賣直段と義を、堂嶋米相場高下と釣合、不相當と義無之様可致と勿論と直此處、右搗米屋共と内頃、此日と風雨と寄、俄と白米小賣直段引上ひ者も不少哉と粗相聞ひ、右風雨と義を、當節稻作出來方と差障ひとも不相聞、既堂嶋米相場、益後を例年と如、俵別内味升目と見込も格別相減ひ由と付あを、旁以益前と於賣實直段引下ひ方と有之上と、全搗米屋共一己と利欲不抱、右躰仕成ひ義を以て外と直此處、都る小賣直段引上ひあり、身薄と者共別致難儀の筋と付、其段能く相弁、早と正路と直段と相改可賣出ひ、尤夫と所と者共も精々心を付、可致世話の、自然此上にも心得違、搗米屋共其外米商ひと携ひを、一同不直と取斗致シの様子相聞ひ、無用捨召捕、嚴重可及沙汰の間、其期と至後悔致間敷、右と趣三郷町中搗米屋共の別と義、其外一統不洩様早と可や通ひ直○圖二三〇五・二三三

私利に耽り白米小賣直段を引上ぐ可からず

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇一三

子七月○町中家持の承知判、形日付は廿四日なり、

(御觸書承知印形帳)

三三三 七月廿八日 安治川南四丁目上荷船乗治三郎外九名、難船助遣ひに付、夫々御褒

美被下し事、

安治川南四丁目上荷船乗

治 三郎 彌兵衛 嘉兵衛 宇兵衛 市藏
利 八常治郎 源三郎 清治郎 岩右衛門

目印山に罷在

其方共義、當月二日於安治川口、淡路國津志浦綿屋武兵衛所持(漁カ)魚船壹艘、俄に強風なる高浪

被打込、乗沈、及難義節、辺に居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助ケ遣段、兼あや渡

難船を救助せる治三郎外九名に錦を賜ふ

(同上)

補達 七九七 八月十三日 石谷因幡守様御産穢し事、

因幡守様、奥方様昨夜御出産、御女子御出生に付、來ル十八日迄御産穢相成の間、此段承知可

有之、以上○補達七九八を見よ、

子八月十三日

北組惣年寄

(御觸帳)

補達 七九三 ○補達七九四に同じ、

三三四 八月十六日 銅延板致所持の者と、銅座へ賣上可申事○禮書二一三八に同じ、七九九を見よ、

三三五 八月十九日 川路左衛門尉殿參府し事、

川路左衛門尉事被爲召、四五日、支度ころ參府し、

八月十九日

(御觸書承知印形帳)

補達 七九六 同日 石谷因幡守様御月番被成御勤し事、

因幡守様、今十九日、御月番被成御勤の間、此段承知可有之、以上○補達七九七を見よ、

子八月十九日未下刻

北組惣年寄

(御觸帳)

三三六 同日 町中ニ隱賣女差置間敷事、

口達

隱賣女の禁

惣嫁

隱賣女及抱主は正業に復す可し

隱賣女差置、遊女屋同然に身過を勿論、右世話を渡世にゆゑにもの所と有之由、殊に御城近邊町家にも、同様と者有之哉に相聞に付、取締方(御觸帳)に「前」に渡置の趣も有之の處、忘却し者も有之哉、近比町と辻合道端等に若年と女連立出、往來人ヲ客ニ相勸、前條と小宿に連行、内と身賣致し族も有之哉に相聞に付、猶亦取締と義、去亥三月相觸置○三二八を見よ、の義と處、兎角右風儀不相止、内と女ヲ抱置、爲致身賣、亦と密通と小宿杯渡世に致し者有之趣相聞、御城近邊と別あり義、不埒に至るに、既此節召捕及吟味にもの有之の間、猶追と可遂穿鑿の條、若心得違し者も有之の、早と正路と渡世に可相改め、彌此上にも不相止者有之の、無用捨召捕、所し者迄も嚴重と可及沙汰の間、精々取締、若不相用者有之の、早と可訴出

御觸及口達 嘉永五壬子年

右、趣三郷町之不洩様可申聞置の事、

子八月○町中家持の承知判、
形日付は十九日なり、

(御觸書承知印形帳)

關五九三 八月廿七日 當三月十日夜、下總國結城郡結城村庄七并召仕惣助外壹人を及殺害

逃去の、右庄七元召仕幼名與會吉事九兵衛人相書事

關三三七

八月廿九日 江子嶋東町淡路屋六三郎代判彌七下人政助外三名、盜賊差押又り

孝心を竭のこ付、南竹屋町橘屋喜兵衛外四十八名、白米下直の賣出のこ付、并目

印山に罷在の忠助外六名、難船助遣のこ付、夫、御褒美被下の事、

江子嶋東町

淡路屋六三郎代判彌七下人

政 助

其方義、怪敷相見の當時無宿金藏を差押、所の者中合、召連訴出の段、兼お觸渡と趣相守、
特に義のこ付、爲褒美鳥目貳貫文差遣の、

八月八日

舉動不審な
る者を逮捕
せる下人政
助に錢を賜
ふ

孝子吉兵衛
を賜ふに錢

讚岐屋町石川屋五郎兵衛借屋
播磨屋吉右衛門伴

同

右吉兵衛女房

石吉兵衛宗兵衛、父吉右衛門義兼の病身者に付、兩人共幼若の節を吉右衛門に代り、塩醬油等

荷ひ所と賣歩行、商ひに精を出シ、日々儲錢を聊も自用に遣拂ひ儀無之、不殘吉右衛門に相渡、
家賃銀滞を勿論、其外心障の儀を無之様爲取續、尤兩人共儉素を守、物見遊參等に罷越の義も
無之、身分相慎、兄弟睦敷相暮、殊吉兵衛儀女房をふに教示行届の付、同人も兄弟の者商ひ
を罷出の留守中を別々の儀、平常も兩親を大切に致、眞實に相仕、右躰中合孝養を竭のこ内、母
をん義眼病相煩のこ付、兄弟代り合、母の手に取、醫師方へ連行、療治介抱等致の得共、終に
盲目に相成、剩余病のこ不相勝のこ付、兩便穢物等迄も心能取片付遣、給物万事無手扱看病致
の得共、養生不叶、追お果の義を相歎、法事等厚相營、父の力を添、其後も同様中合、彌
以同人に孝養を竭、妹をも相憐の段、神妙寄特に付一同譽置、吉兵衛宗兵衛の鳥目五貫文宛、
くわいの同三々文爲取遣、猶此上行狀相慎、渡世出精可相勵の、

- | | | | |
|-----------|--------------|------------|-----------|
| 南竹屋町 | 順慶町五丁目經師屋佐七 | 雜喉場町 | 江子嶋町 |
| 橋屋喜兵衛 | 支配借屋和泉屋菊次良代判 | 大庭屋五兵衛借屋 | 荒物屋治右衛門家守 |
| 宮川町 | 伊兵衛 | 播磨屋重助 | 尼崎屋忠兵衛 |
| 池田屋半右衛門借屋 | 腹屋町 | 松本町 | 玉手町 |
| 阿波屋紋平 | 吉野屋藤五郎支配借屋 | 古金屋喜兵衛借屋 | 明石屋藤八支配借屋 |
| 西濱町 | 若狹屋八百次良 | 池田屋竹松 | 福野屋藤助 |
| 多田屋儀兵衛借屋 | 三右衛門町 | 新大黒町 | 泉屋町 |
| 淡路屋辰藏 | 北堀江三丁目 | 加賀屋又兵衛支配借屋 | 大黒屋甚兵衛借屋 |
| 瀬戸物町 | 河内屋平兵衛借屋 | 同所四丁目 | 播磨屋茂兵衛 |
| 天満屋平右衛門借屋 | 伊勢屋武助 | 同所三丁目 | 堀屋安兵衛支配借屋 |
| 伊勢屋武助 | 同 | 同所三丁目 | 堀屋新藏 |
| 南堀江貳丁目 | 伊勢屋定之助 | 同所三丁目 | 紙屋米兵衛支配借屋 |
| 德嶋屋重助支配借屋 | 大和屋喜兵衛 | 同所三丁目 | 河内屋利兵衛 |
| 伊勢屋定之助 | 同 | 同所三丁目 | |

御觸及口達 嘉永五壬子年

親質屋兩軒之内へ可罷越事、口達

大和町山本屋平四良義、質致商賣、諸向々取置の品之内、南綿町山城屋得兵衛大寶寺町松屋由兵衛方へ又々質物を入置、平四良義出奔致しの間、質入の品有之請出度者へ、十一月十日迄の内質札に元利相添、得兵衛由兵衛方へ持參可請戻し、尤日限過り、請戻し義不及沙汰し、

子九月七日

(同上)

圖五九三 九月十一日

御男子様御誕生、松平長吉郎殿と奉稱の事○體裁圖四〇六〇に同じ、尙圖五九八〇を見よ。

圖五九三

九月十六日

堺煙草庖丁猥に致商賣間敷事、

右に趣京保十五戌年以來、度々觸知らせ置○圖一四一・一五、三三二等を見よ。の處、去ル寅年間屋仲間組合等停止相成の後、別々商法相乱、兎角猥に當表の勿論攝河播に、こゝも、堺たて粉庖丁恰好相似、同様紛敷極印打立、專諸方へ賣出の者有之、堺庖丁鍛冶屋共渡世差支令難儀旨、右職人共訴出、既今般問屋仲間組合再興に相成の上り、旁先年々追々觸渡と趣無違失相守、心得違と取斗致間敷し、

右に通可觸知をの地、

子九月

○町中家持の承知、形日付は十六日なり。

因幡

圖五九四

九月廿日

川路左衛門尉殿御勘定奉行被仰付の事、

左衛門

(御觸書承知印形帳)

川路聖謨轉任

子九月廿日

因幡

(同上)

圖三四〇 九月晦日

梶木町尼崎屋市右衛門別家手代尼崎屋藤右衛門忠勤奇特成者に付、山田町年寄大庭屋與兵衛外二名、役儀出精相勤の付、夫々御褒美被下の事、

梶木町 尼崎屋市右衛門別家手代

尼崎屋藤右衛門

子六拾貳才

尼崎屋藤右衛門の忠勤を賞し錢を賜ふ

右藤右衛門義、先主市右衛門時代、此者弟佐介不奉公に義有之の承、氣毒に存相詫、佐助暇請の後、同人に代り、無給の召仕吳、様相頼、主人得心の上、右方に致奉公住の付あせ、無給の召仕の義如何に付、小遣料又を爲仕着料杯を唱、主家少々宛金銀与エ吳の義を厚相請、出精相勤罷在の内、右市右衛門義持病癩症差發、店方取締向万端難出來に付、諸事此者引請、實意に取斗、其上市右衛門女房た、俱々藥用介抱爲行届、一旦快氣に姿に相成へ共、右病中諸雜費其外臨時物入多、追々身上不如意に相成、前以仕來の商賣難取續、所持家屋敷共賣拂、同町に手狭に借宅に相答の仕義に相成の節、召仕と下女下男等不殘暇差遣の付、此者も同様暇可差遣旨を聞へ共、主人右跡に持病有之、難見捨に付、旁無給の召仕、介抱爲致吳様志願に次第述べ、其後も是迄に通致奉公、右に付爲仕着料等相減をも不相厭、前同様實跡に相勤、品々丹誠を盡し、漸當時に建家爲買求、弘住居の折節、市右衛門義癩症再發を盡し、

御觸及口達

嘉永五壬子年

乱心同様相成ニ付、猶又重々合、晝夜傍を不離看病のせし、主人ノ意ニ叶ハ様介抱爲行届
得共、養生不叶、終ニ病死のせしニ付、たゞ及心添、葬式勿論佛事等厚爲相營、其後親類
相談上、死亡市右衛門甥龜治良々者他ヲ養子ニ貫請、市右衛門を名を改、跡相續爲致、蠟
燭鬢附、油類小商爲相始、此者重荷を脊負、若年ニ當主附添、日々早朝ヲ得意廻任歩行、主家取
續方ニ心ヲ^(碎)挫、其上近來庄兵衛借屋へ別宅爲致貫ハ得共、獨身ニある相變晝夜共主家へ罷越、
家事手傳、追々及老年ハをも不相厭、商ヒ向余暇有之ハハ、主家日用吞水迄も、近邊川筋へ
自分汲取參ハ程ニ出精相働、勿論平日僮服を着シ、身分慎も宜、殊ニ近年聊々金錢も不貫請、
無給ニある年來主家太切ニハ、忠勤を盡ハ段、寄特ニ付譽置、鳥目拾貫文爲取遣、此後も
彌主家を大事ニ可致ハ、

山田町年寄 大庭屋与兵衛 中船場町年寄 錢屋源兵衛 車町年寄 藤屋平兵衛

役儀出精の
年寄大庭屋
與兵衛外二
名に銀を賜
ふ

其方共義、年寄役勤方宜、町入用減方精ニ心を用、公事出入可及義有之節ハ、可成丈ケ不事立
様取斗、諸更取締方行届、其外神妙^(奇)寄特成致取斗ハ段相聞ハニ付譽置、銀壹枚ツ、差遣、彌
此上相勵メ、

子九月 〇南組惣年寄の副
書日付は晦日なり、

(同上)

町在酒造儀、兼ハ觸渡置ハ次第嚴重相守、隱造過造ハ勿論、都る不取締ニ取斗致間敷ヤ迄
も無之更ニハ、然ル處追々酒造時節ニ差向、酒造稼ノ者共、右ニ相用ヒハ米一時ニ買立ハあり、

圖五五三

十月三日

酒造米儀、一時ニ手當不致、當然入用程宛買入ハ様可致事、

酒造米を一
時に買入る
可からず

白ラ糶買ニ相成、米直段ニ差響ハ筋ニ有之ハ條、此節諸向米直段不平ニ趣相聞ハニ付、厚世話
ハ、大坂米直段追々下落ハ、酒造人共時節前後ヲ弁、酒造米ハ分銘ハ一時
ニ手當不致、先^(緑)操當然入用程宛買入ハ様致シ、何モ米直段ニ差響ハ義無之様、精ニ心ヲ用
取斗可ヤハ、此後右ヲ渡ニ引違、酒造人其外一統一己ニ利欲^(拘)ニ抱、米賣買儀ニ付、不正路ニ
仕方致^(ハ)族有之様子相聞ハ、急度可ヤ付ハ間、兼ハ其旨可存ハ、
右ニ通三郷町中可觸知^(ハ)也。〇圖五八九
五を見よ、

子十月 〇町中家持の承知判
形日付は三日なり、

因幡

(同上)

圖五九三

十月八日 中山道長窪宿日光道中今市宿、人馬賃錢割増ニ事九、及六、一三二を見よ、

彌七九

十月十日 銅延板所持ノ者取調可ヤ出ハ事、

銅延板所有
者の調査

町ニニちハ、銅延板所持ノ者ハ差出ハ様、八月口達書を以被仰出^(四)を見よ、ハ後、於町ニ相調差
出ハ向も有之、右ニ御普請御用ニテ、格別延立方被仰付、得共、御差急ニ義ニ付、猶亦被仰出、
聊ニハ延板所持ノ者ハ差出、代銀渡リ、又ハ兼ハ用意ニ所持致シ居ハ向も有之ハハ、追々
御用濟次第、延板ニテ渡方相成ハ様ニ相成ハ義ハ間、於町ニ不洩様相調、其旨來ル十四日
五ツ時、惣會所へ可被ヤ出、尤八月御觸^(節)ニ差出洩ハ義ハ、相控^(料)ハ、相控^(料)ハ、相控^(料)ハ、相控^(料)ハ、相控^(料)ハ、
ハ得共、是ハ不苦、當然ニ御用弁第一ニ義ニ付、差急精ニ取調可被ヤ出ハ、以上、

子十月十日未中刻

(御觸書承知印形帳)

參 三六 十月十一日 米賣買方窮屈無之様、融通合專一ニ可致旨、并正米帳合米共平準

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇二三

相場相立、正路に賣買可致旨被仰渡、御請證文事、
被仰渡御請證文事

米方年行司共

近頃諸向米直段不平、趣相聞、こ付、追々申諭趣、年行司共始重立、米仲買とも厚聞請世話致し、此節一際米直段下落致、仕儀に至りぬ段、格別事にぬ、然る所追々新穀入津致し、物澤山に相成、とま乍申、時節前後を弁、多分米高買注文引請ぬ義、勘弁可致を勿論事に、へ共、賣買方格別窮屈無之様、融通合專一に可相心得、尤右に事寄せ、不正路に取斗決め致間敷、○圖二一五及二二〇を見よ、

一帳合米に義、正米掛繫融通第一品に付、追々取締方と義申渡置、趣も有之ぬへ共、不相用、免角に不行儀及増長に、諸國客先と氣請にも拘、自然市場に衰微を招、様仕成、族不少哉に相聞へ、以て外に事にぬ、元來米直段に基本にぬ、(諸色直段カ)其上米穀を以仕出に品を勿論諸金とも、(色カ)米直段を元として、賣出ぬ道理にぬ上と、堂島米相場と模様を寄、萬價にも差響ぬに付、享保年中格別御世話も有之、天明度米賣買心得方に儀に付、別段被仰諭趣も有之、夫是厚相弁、已來銘々一己に利欲に耽りぬ儀無之様、急度相愼、米仲買共相互に心を付、享保度已來規定を堅相守、實直に渡世相營、諸向に氣請宜、市場繁昌爲致、儀を第一に心掛、正米帳合米とも平準に相場相立、正路に賣買致、様精申合、掛引可致、若又此上にも右中渡を不相用、不埒に取斗致、族有之と、無用捨召捕、嚴重可や付、其節後悔致間敷、○圖二一六、二一九、二二〇を見よ、

米賣買の融
通を計る可
し

帳合米の本
意を失す

享保度天明
度の米仲買
の取締

○米方年行司の副書日
付は十月十一日なり、

圖五九三 十月十四日 神善四郎秤改事○本文は體裁圖四一七九に同じく、秤改仕様書は圖四六三九の仕様書に同じ、尙圖五六七八及六二二五を見よ、

圖五九三 十月十六日 佐々木信濃守殿大坂町奉行被仰付事、

佐々木信濃守○顯大坂町奉行被仰付、此旨三郷町中可觸知ぬの地○圖六一〇五を見よ、

子十月○南組惣年寄の副書日付は十六日なり、

因 幡

(御觸書承知印形帳)

圖五九三 十月廿七日 古金銀引替所に儀、猶又來丑十月迄、是迄通被差置ぬ事○圖五八八七を見よ、

圖三四一 同日 長堀茂左衛門町和泉屋武兵衛支配借屋淀屋辰治郎同家倅太吉外男女五名、忠孝を竭又盗賊差押ぬに付、并安治川北壹丁目上荷船乘庄五郎外廿七名、難船助遣ぬに付、夫々御褒美被下ぬ事、

長堀茂左衛門町

和泉屋武兵衛支配借屋
淀屋辰治郎同家倅

太

子貳拾才吉

右太吉義、幼年に節々、父辰治郎働と手助ぬせし、出精相稼、殊に近年兩親病中介抱等手厚に爲行届、其後も品々心を用相仕向、幼年に弟を憐、其身を儉素を守、僮服を着、身分相愼、年來孝心を竭ぬ段、若年者こそ別々寄特に付譽置、鳥目五貫文差遣ス、此上行狀相愼、兩親へ孝養を竭、家業出精可致段中渡、

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇二五

町奉行佐々
木顯發

孝子太吉に
錢を賜ふ

西高津町

木津屋太兵衛支配り

豐嶋屋喜兵衛

孝子豊嶋屋喜兵衛に錢を賜ふ

右喜兵衛義、^(性)生質實躰成者こゝろ、幼年こゝろ節ふ兩親こゝろ意こゝろ不背、渡世致出精、^(子)殊近年打續父進兵衛病氣こゝろ、追こゝろ病症相變、不一形躰こゝろを、藥用介抱こゝろ勿論其外こゝろ義も、品こゝろ心こゝろを用爲行届、弟妹等こゝろ身分をも相應こゝろ相片付、兩親致安心こゝろ様仕向遣シ、其身こゝろ儉素を守、龜服を着、身分相慎、年來孝心こゝろを竭こゝろ段、^(奇)寄特こゝろ義こゝろ付譽置、鳥目五貫文差遣、此上行狀相慎、兩親へ孝養を竭、家業出精可致段こゝろ渡、

子十月

堂嶋新地裏町

住吉屋治七郎下人

其方義、盜賊を差押、所こゝろ者こゝろ出、^(合)訴出こゝろ段、兼こゝろ觸渡こゝろ趣相守、^(奇)寄特こゝろ義こゝろ付、褒美こゝろ鳥目貳貫文差遣ス、

子十月廿三日

日本橋五丁目

塗師屋米藏姉

孝女しかに錢を賜ふ

右志の亡父吉兵衛義、町内こゝろ家屋敷買求住居罷在こゝろ處、廿壹ヶ年こゝろ前辰年致病死こゝろ付、兄岩松跡相續致居こゝろ處、拾三ヶ年こゝろ前子年こゝろ是亦病死こゝろ、其後天王寺村久保町山田屋こゝろ書面米藏を養子こゝろ貫受、此者弟こゝろ覺こゝろ相續罷在こゝろ得共、病身こゝろ渡世向難出來こゝろ間、右志方こゝろ養生こゝろ差遣こゝろ、此者義筆職出精相稼罷在こゝろ處、米價并諸式高直こゝろ及時節こゝろ付こゝろ、日用相賄兼こゝろ間、縫物指南相始こゝろ處、追こゝろ稽古人相次こゝろ故、ヶ成こゝろ取續罷在、然こゝろ處母こゝろ義老衰こゝろ折こゝろ病氣差發、善こゝろ藥用介抱爲行届こゝろ上、兩便こゝろ世話且こゝろ食事等こゝろ至迄、心こゝろ用看病致こゝろ付、追こゝろ至快致シ、右志方こゝろ義こゝろ生質氣隨者こゝろ、他人へ對こゝろ、法外こゝろ義毎こゝろ聞、其砌こゝろ内こゝろ此者先方こゝろ罷越、程能詫言致こゝろ爲相濟、勿論此者こゝろも右様こゝろ義こゝろ聞こゝろ得共、万事意こゝろ不背宜こゝろ成、陸敷相仕、是迄こゝろ養子こゝろ義他こゝろ勸こゝろ共、母こゝろ意こゝろ不相叶こゝろ却こゝろ不宜趣こゝろ斷、家屋敷の家質こゝろ差入有之こゝろ共、利足銀并買掛等爲滯こゝろ儀も無之、龜服を着、髮こゝろ鋸等不相厭、若年こゝろ比方身持宜、物見遊參等こゝろ不罷越、身分相慎、孝養を心掛、家内陸敷相暮こゝろ段、^(奇)寄特こゝろ由相聞こゝろ付譽置、鳥目七貫文差遣ス、此上行狀相慎、彌孝心こゝろを竭こゝろ様、

岩田町綿屋三良兵衛借屋

岡屋佐兵衛下人

又 兵衛

右又兵衛義、生國勢湯桑名郡桑名職人町俵屋又藏悴こゝろ、三拾四ヶ年こゝろ前卯年、先代佐兵衛前

御觸及口達 嘉永五壬子年

忠僕又兵衛に錢を賜ふ

久寶寺町三丁目住居、節、奉公に有付、年季無滞相勤のこ付、別家爲致、様中聞ひ得共、及辞退、實跡に相勤罷在の内に、右佐兵衛健症病差發、職業難出來、且身上不如意に相成のこ付、右佐兵衛弟岩田町綿屋三良兵衛借屋平野屋由兵衛方、九ヶ年已前辰年、家内不殘同家に相成のこ付あり、此者深く致心配、按服療治に罷越、又日雇働等致シ、夜分の町内夜番に被雇、晝夜に無厭出精致し、右儲錢を以相貢の處、同家主借宅間狭にも有之、多人數居合の義、病氣に障にも相成可やも存量、七ヶ年已前午年、家内不殘當時に借屋へ爲致住居の節、當主佐兵衛儀と拾貳才のめ、他に肩入致奉公居、然ル處先佐兵衛病氣追々差重、藥用介抱爲行届ひ得共、養生不叶、同年病死のせいのこ付、葬式佛亶等懇に相營、後家々みし意に不肯、陸敷相仕、先佐兵衛存生中給料と不叶受、其上家賃銀其外買掛等爲滞の義も無之、平日僮服を着、物見遊參等にも罷越、身分相慎、三拾年余も主家致太切の段、寄特に由相聞のこ付譽置、鳥目七貫文差遣、此後も主家を大事に可致旨に渡ひ、

天満又治郎町

津國屋利兵衛娘

志

子貳拾才

右志ん義、父利兵衛拾壹ヶ年以前寅年比々當時に至眼病相煩罷在、母少す義の右寅年病死のせいで、利兵衛義其後無妻あり、此の幼年の節より神妙あり、成人に隨ひ、家業に菓子商ひ引請、出精相稼、父の意に不肯、此者衣食の僮を不厭、父利兵衛へと相應に相与、日用取賄、手透

孝女しんに錢を賜ふ

こと父、弟、妹に着用もの穢洗濯縫仕業いさし、物見遊參にも罷出、外方々縁付に義中來ひ得共、出精心懸、家内陸敷相暮の段、寄特に由相聞のこ付譽置、鳥目七貫文差遣、年若に義彌此上行狀相慎、孝心を竭、様可や渡ひ、

子十月

安治川北壺丁目上荷船乗

庄五郎	熊藏	又七源	吉長五郎
德兵衛	藤四郎	清七	清兵衛
吉三郎	音治郎	伊三郎	庄七
彌兵衛	佐兵衛	長治郎	卯兵衛
市三郎	佐兵衛		源三郎

南傳法濱

六軒屋濱

右に者共義、當月八日同十四日、於安治川口、廻船四艘強風に淺瀬へ被吹付、及難儀の節、相詰罷在、又と迎に居合、早速右舟に漕付、精々相働、危難を助ケ遣ひ段、兼あや渡難船助ケ方義、厚相心得の故に義に付譽置、爲手當庄五郎吉三郎外拾八人に鳥目壹文ツ、市三郎外壹人へ同五百文ツ、差遣、

目印山に罷在、

吉助	庄兵衛	源九郎	吉藏	淀七
爲吉				

右に者共義、去ル廿日於安治川口、廻船壹艘強風に淺瀬へ被吹付、及難儀の節、助ケ方上荷

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇二九

難船を救助せる庄五郎外廿一名に錢を賜ふ

難船を救助せる吉助外

五名に錢を賜ふ

大阪市史第四

船乗共働兼ひに付、出役し者差圖に隨ひ、迎に有之の漁船に乘組、早速右舟に漕付、身命を不厭精に相働、危難を助ケ遣段、寄特に義に付譽置、鳥目壹貫文ツ、差遣ス、

子十月廿七日

(御觸書承知印形帳)

觸五九四〇

觸五九四一

十一月五日 唐物拔荷事

補達八〇〇 同日 朝鮮人來聘御差延相成事

今日南組惣會所に通達當番町に年寄被呼出、惣年寄中から左に通被仰渡り、

朝鮮人來聘延期

爲心得申達事

子十月 通達當番常珍町の通達

(御觸書承知印形帳)

十一月十二日 此節市中火災を勿論盜難も少く、一段に事こひ、彌以火に元萬事

可入念事

(口達)

町に火に元等と義に付、追に申渡り趣有之に付あを、此節市中火災に沙汰を勿論、盜難も少くゆ段、全町人共申合行届の故と義と、一段に申こひ、右に付兼る自身番并夜廻り等別る嚴重取斗、取締も宜相聞ひ町に、北組に内高麗橋壹丁目外貳拾五丁、南組に内本町壹丁目外貳拾五丁、天滿組に内天滿拾壹丁目外拾五丁、右年寄共於御役所別段譽置の條、一統其旨を存、追に風烈

本年市中靜謐なりしを賞す

時節に差向ひ間、猶此上町、無油斷心懸、彌以火に元萬事入念可申こひ、右に通三郷町中端迄も不洩様可申通ひ申

子十一月 承知判形日付は十二日なり

(同上)

同日 北組に内高麗橋壹丁目外廿五町、南組に内本町壹丁目外廿町、天滿組に内天滿拾壹丁目外拾五町、自身番并夜廻等行届に付、右町に年寄并町代御賞美に

事

北組に内

- 高麗橋壹丁目年寄 豐後町年寄 本天滿町年寄 長町六丁目年寄
- 越後屋新十郎 田邊屋平兵衛 松岡屋平兵衛 龜屋孫兵衛
- 尼ヶ崎町壹丁目年寄 四軒町年寄伊丹屋三良兵衛 南濱町年寄 灰屋平右衛門
- 高池屋榮治郎 病氣に付月行司 上中嶋町年寄 忠八
- 内淡路町壹丁目年寄小西屋 勘左衛門病氣に付月行司 北鍋屋町年寄 山田屋八兵衛
- 扇屋長兵衛 梶木町年寄天川屋長右衛門 病氣に付月行司 山下八良右衛門
- 大川町年寄 多田屋新右衛門 吉野屋達三郎 江戶堀五丁目年寄木屋芳之 北濱壹丁目年寄 西野屋平九郎
- 岡崎町年寄 池田屋伊兵衛 近江屋榮助 綿屋宇右衛門
- 南渡邊町年寄 播磨屋弁右衛門 箱屋町年寄 倉橋屋喜兵衛
- 新天滿町年寄 仁和寺屋喜兵衛 北堀江三丁目年寄 藤屋与助
- 南組に内

御觸及口達 嘉永五壬子年

本町壹丁目年寄 和泉屋三良右衛門
 南堀四良町年寄 錢屋太兵衛
 長堀治良兵衛町年寄 淡路屋源右衛門
 同所四丁目年寄 網屋茂兵衛
 同所三丁目年寄 奈良屋半兵衛
 九助町貳丁目年寄 河内屋小右衛門

天満組之内
 天満拾壹丁目年寄 吉野屋九右衛門
 同所小島町年寄 紙屋七良右衛門
 堂嶋新地三丁目年寄 炭屋閑五郎
 同所老松町年寄 中嶋屋太七

同所九丁目年寄 米屋市兵衛
 安治川上貳丁目年寄 名田屋喜兵衛
 同所貳丁目年寄 山田屋市右衛門
 同所樋上町年寄 京屋七兵衛

同所宮前町年寄 中嶋屋勘兵衛
 御池通壹丁目年寄 住吉屋喜兵衛
 天満又治良町年寄 長柄屋佐兵衛
 同所拾一丁目年寄 升屋吉五郎

同所攝津國町年寄丹波屋清
 右衛門病氣二付月行司 綿屋新兵衛
 同所四丁目年寄 兵庫屋重兵衛
 同所北木幡町年寄 尼屋清八郎
 同所天神筋町年寄 伊賀屋半兵衛

西高津町年寄 木綿屋源左衛門
 同所西一丁目年寄 塩飽屋善兵衛
 唐物町壹丁目年寄 相生村屋治良右衛門
 同所三丁目年寄 木本屋源右衛門

薩摩堀東一丁目年寄 金屋八三郎

木挽町中一丁目年寄 鏡屋小八郎
 上難波町年寄 升屋市右衛門
 同所貳丁目上半年寄 酢屋源藏
 南本町貳丁目年寄 播磨屋彦三良
 助右衛門町年寄檜皮屋忠兵衛
 衛病氣二付月行司 播磨屋吉右衛門

町々火元等と義に付、追々被仰渡、趣有之に付あり、此節市中火災と沙汰と勿論、盜難も少
 少くゆ段、全町々合行届の故と一段と義、殊其方共町々、兼あ自身番夜廻等別あ嚴重取
 取締も宜ゆ由達風聽、格別と更に付御譽置有之の間、猶も此上無油斷心懸、彌以火と元万更入
 念可中旨被仰渡の二を見よ、

子十一月
 十一月十六日 妙法院宮御抱三十三間堂及大破の二付、御府内并廿二ヶ國武家方
 勸化御免の事一を見よ、

十一月廿一日 琴三味線浚其外舞浚淨瑠璃會等、師家と者宅とあ可相催事、

口達

右町、丁代共

自身番及夜
番の取締嚴
重なる高麗
町壹丁目外
六十二町年
寄を賞す

同町代を賞
す

町々火元等と義に付、追々被仰渡、趣有之に付あり、此節市中火災と沙汰と勿論、盜難も少
 少くゆ段、全町々合行届の故と一段と義、殊其方共町々、兼あ自身番夜廻等別あ嚴重取
 取締も宜ゆ由達風聽、格別と更に付御譽置有之の間、猶も此上無油斷心懸、彌以火と元万更入
 念可中旨被仰渡の二を見よ、

子十一月
 十一月十六日 妙法院宮御抱三十三間堂及大破の二付、御府内并廿二ヶ國武家方
 勸化御免の事一を見よ、

十一月廿一日 琴三味線浚其外舞浚淨瑠璃會等、師家と者宅とあ可相催事、

口達

(同上)

琴三味線舞
浚淨瑠璃會
は成る可く
師家に催
す可し

夜會に長じ
又は座料を
取るを禁す

一琴三味線さらへ其外舞さらへ淨瑠璃會等と義に付、去ル寅年以來、追々相觸の趣も有之處、近
 比夫と師家と者宅とあるて、更に不相催、弟子内とゆ、渡世柄不相當と者宅借請、殊に夜會
 と長し、町家一般と猥と風儀と相流の哉と相聞、市中取締方と抱、如何と更に付、早と相改、
 此後右類と催更と如何様共致、可成丈師家と者宅とあ可相催ゆ、若右師家と者宅無餘義差支有
 之時と、其渡世柄相當と料理屋借請、稽古同様弟子共集、質素と相催ゆ義と格別、右と更寄、
 大造と取斗杯決あ致間敷、夫と所と者とも急度心を付可ゆゆ、尤右夜會と長しゆ義と勿論、座
 料を取ゆ義を彌以不相成の間、一統其旨を存、心得違と義無之様可致ゆ、

右と通三郷町中端と迄ゆも不洩様可中通ゆ事二四八五を見よ、

御觸及口達 嘉永五壬子年

○例九及一〇に同じ、

十二月十六日 門松注連繩等を忍こことつ取、或の押あ貫掛の儀仕間敷事二九

に同じ、

同日 ろくと穴打道中双六辻寶引の類禁可事三〇

同日 佐々木信濃守様御到着に事、

信濃守様、今日當表御到着被成の間、此段承知可有之、以上、

子十二月十六日

南組 惣年 寄印

(御觸書承知印形帳)

同日 小賣油正路と直段と相改、賣出可事、

口達

當秋以來油不融通あり、格別相場引上ケルに付、早世話致シ五九二の付あり、此節一際目立の程相場下落致し得共、町と油屋共の内、小賣直段不引下賣出の物も不少哉と相聞ひ、元來小賣直段と義と、元方相場高下と釣合、不相當と義無之様可致の勿論、日用と油高直とあり、身薄と者別致難義の付、其儀をも願、旁一己と利欲と不抱、早正路と直段と相改、賣出可事、自然此上にも不直と取斗致し者於相聞と、嚴敷可事付ひ、右と通三郷町中不洩様可事通ひ、

○南組惣年寄の副書日、

(同上)

十二月廿五日

當十一月三日曉、養母類を及殺害、女房仲孫へ疵爲負逃去ひ、武州足立郡川口宿百姓太四郎人相書に事

十二月廿六日

水戸中納言殿へ、線姫君様御入輿被爲濟の事四三二七に同じ、尙五八九八及六〇九三を

十二月廿八日

無益と手間掛の菓子并料理等賣買致間敷事、
○前文本年十一月十七日の江戸令に同じ、右と通此度於江戸表町觸有之、當地と義も前同様相心得、菓子并料理向等不益と手間掛りの品の勿論、都高直と食物類令停止の段、兼る嚴重觸渡有之趣無違失相守、右渡

高直なる菓子料理等を賣買するを禁ず

世と者其外一統、猶も此上心得違と義無之様可致ひ、
右と趣三郷町中可觸知者也五四四

子十二月の承知判形日付は廿八日なり、

信濃 因幡

(御觸書承知印形帳)

同日

高直と鉢植物賣買致間敷事、
○前文本年十一月十七日の江戸令に同じ、右と通此度於江戸表町觸有之、當地と義當時小万年青不致流行由に得共、外と鉢植物取扱ひ者も有之趣相聞の付あり、前同様相心得、都高直と鉢植物賣買不相成段、兼る嚴重觸渡有之趣無違失相守、植木屋共の勿論其外一統、猶此上心得違と義無之様可致ひ、
右と趣三郷町中不洩様可觸知の也五五〇

子十二月

信濃

御觸及口達 嘉永五壬子年

二〇三七

高價の鉢植物を賣買するを禁ず

因幡
女子履物鼻緒等高直と品相用の間敷事、

(同上)

女子履物鼻緒等高直と品相用の間敷事、其外衣類の勿論、都て手を込め奢侈と品相用の間敷旨も、度々觸示有之の處、江戸表町と義近來追々相寛、下駄并鼻緒等二手を込め高價と品相用の二付あり、此度町奉行所あるて、其筋と者に嚴重に渡有之の付、當地と義も同様相心得、筆あ觸渡と趣無違失相守、猶も此上心得違と義無之様、町とに入念に付置、精と心ヲ付の様可致の四を見よ、

子十二月

(同上)

同 日 大坂町人共々當表と有之諸家藏屋敷或は大坂町奉行支配國內に罷在の武家家來へ掛の貸金銀出入と分、向後取上、濟方と沙汰と及の事、

口達

武家方に掛りの金銀出入其外諸出入等、前々當表と取上せずの共、向後と義、大坂町人共々同所と有之諸家藏屋敷或は大坂町奉行支配國內領分知行所用場等に罷在の武家家來に掛りの貸金銀出入と分、訴出次第取上、濟方と沙汰とねよひの間、其旨可存の、

子十二月

(同上)

同日 目印山に罷在の寅吉外十八名、難船助遣の付、夫々御褒美被下の事、

大阪町人より武家方に對する貸金銀出入取上の範圍

女履物に高直の品を用ふ可からず

目印山に罷在の寅	吉利	八喜兵衛	彦兵衛	善七
長治良兵衛	助庄	七又三郎	源三郎	
市次郎	龜三郎	八小治郎	喜三郎	
勝三郎	萬藏	庄三郎	徳三郎	

南傳法濱上荷舟乗

安治川南貳丁目上荷舟乗

右の當月八日同九日安治川口にねわく、廻船三艘強風を被吹付、亦の楫打折沈舟相成、及難義の節、相詰且の邊に居合、早速右船の漕付、精と相働、危難を助ケ遣の段、兼あや渡難船助ケ方厚心得の故と義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ス、此上無油斷心懸の様可致の、

子十二月廿二日

(同上)

嘉永六癸丑年

正月三日 右大將様西丸へ被遊御移徙の事

正月八日 東海道酒匂川、中山道柏原宿、美濃路起宿、人馬賃錢并川越賃錢共割増

同日 中山道美江寺宿困窮の付、人馬賃錢割増の事

御觸及口達

嘉永六癸丑年

二〇三九

難船を救助せる寅吉外十八名に錢を賜ふ

難船を救助せる寅吉外十八名に錢を賜ふ

補達 八〇四 正月十一日 手嶋流心學道話儀、隨分ひろまりの様、町内の世話可致の事

○補達七五
二に同じ

補達 八〇五 同日 ほとんど火大形に無の様可致事、

せんと火大形に無の様可相心得、一時たきゆゑを自ラ大造にも相成の間、相分ケ度、こたき
の様、濱々若き者へよく、相諭可被ゆひ、旧冬以來火に用心と義、嚴重に相心得の義に付、右
たきゆ節、町役人心を付可被ゆひ、場狭き所辻合等にてたきゆ義を可爲無用の支○補達二〇一九及
補達八四八を見よ、

丑正月の承知判形日付は十一日なり、
町中家持

(御觸書承知印形帳)

題三五 正月十六日 明後十八日曉丑に刻か公事訴訟被成御聞の事、

明後十八日公事訴訟多可有之に付、曉丑に刻か被成御聞の間、其心得を以、無遅參罷出の様可
相達旨被仰出の間、此段承知可有之の、已上、

十六日

北組 惣年寄

(御觸書)

補達 八〇六 正月十七日 町と用水桶増の様可致事、

今日當郷惣會所に火消年番町年寄御呼出の上、薩摩屋小傳次様を左に通被仰渡ひ、
町に内用水汲溜今以行届兼ひ處も相見ひ、成丈ケ桶を増の様心掛、軒下に差置、商勝手ニ差
支ひり、明場所ニ圍置候共、於町に見斗ひ、いゝも消防に爲宜様、無油斷可被ゆ合ひ、
○火消年番大川町の通達
日付は正月十七日なり、

(同上)

とんどの取
締

御用日の公
事訴訟受付
刻限

用水桶の増
設を促す

帳合米買
の流弊

堂嶋米相場
の影響

享保度天明
度の米仲買
取締

参考 二一九 正月廿四日 正米帳合米共平準に相場相立、正路に賣買可致旨被仰渡、御請證

文の事、

被仰渡御請證文の事

米方年行司共

堂島帳合米に儀を、正米賣買掛繫融通第一の品に付、先年か度取締方と義申渡有之の共、
兎角及流弊、賣買方不行儀増長致、自然正米直段に拘ひ儀を勿論、市場と衰微を招、様仕成、
族不少哉に付あを、今般其方共格別差斗取扱、向後右体と義無の様、濱方取締相立の事、由、
一段の事にひ、元來堂島米相場と義を、諸國米直段に基に、其上米穀を以仕出、品を不及申、
諸品共米直段を元とて賣出の道理にの上を、米相場と模様により萬價に差響、筋に付、享保
年中格別御世話在之、天明に末にも米賣買心得方と義に付、別段被仰諭と趣も有之、夫是厚相
弁、銘と一己に利欲に迷、儀無之、諸事享保度已來に規定を堅相守、實直に渡世相營、諸向客
先と氣請宜、市場繁昌爲致の儀を第一に心掛、正米帳合米共平準に相庭相立、正路に賣買致
の様、猶も此上精と可申合ひ、若又已後右申渡を不相用、不埒と取斗致、者相聞ひに於て、
無用捨召捕、嚴重可申付、間、其旨を存、米仲買一統へ能と可申聞ひ○補達二一
八を見よ、

(米商舊記)

○米方年行司の副書日
付は正月廿四日なり、

補達 八〇五 正月廿六日 文恭院様拾三回御忌御法事、○體裁圖五五
四二に同じ、

題三五 同日 文恭院様拾三回御忌御法事、於四天王寺執行の事○體裁圖二二
五五に同じ、

御觸及白達 嘉永六癸丑年

二〇四一

圖五五五 同日 丹製法人の儀、寅年以前に通七人ニ限り、事、丹製法人の義、初發於江戸表御吟味の上、大坂境兩所一躰ニ相成、七人ニ限製法被仰付、改印も御下渡相成、其以來大切ニ相用ひ來り義あり、通例商賣人共仲間組合ニ類々を譯も違、其上元文中差定ひ直段にて、高下無之賣出來り趣ニ付、去ル寅年株札并問屋組合停止ノ節、丹製法商賣の義是迄に通据置、尤人數七人ニ限り、仲間組合の姿ニ相當の間、大坂堺兩所、丹製法望の者、其所に奉行所に斷出、問届請ひる製法の處、大坂改會所に差出シ、夫と立會相改ひ上、可賣出旨等と義相觸有之一^{〇圖五五一}の處、此度問屋組合再興ニ付及取調ひ處、去ル寅年以後も右七人以外、新規に丹製法商賣相始り者有之由ニ付あり、右寅年觸面と趣自然弃捐相成、諸事前と通相心得、前書七人以外丹製法不相成の間、一統其旨を存、此後も改印無之紛敷丹賣買致り者有之を、吟味に上急度可付ひ、右に通此度從江戸表御下知を以て渡り間、三郷町中不洩様可觸知者也、

丑正月〇前の二令及次の令と共に、町中家持の承知判形日付は廿六日なり、

信濃

因幡

(御觸書承知印形帳)

圖五五六

同日 琴・三味線・鍼治・導引等と藝業に携り者、百姓町人の悴と不及、武家陪臣の子弟こゝも、惣ろ檢校し可爲支配事^{〇圖五四〇四に同じ、但し、「文化十四年三月」の下へ、「天保三辰年二月」の下に「同十二年正月」の七字を加ふ、尙圖五五八九及六三八一を見よ。}

圖五五五

正月廿七日 順慶町五丁目大和屋源兵衛外七名、忠勤を竭又り盜賊差押ひニ付、

并目印山に罷在り忠勤外十五名、難船助遣ひニ付、夫と御褒美被下り事、

順慶町五丁目

大和屋源兵衛

大和屋源兵衛の忠勤を賞し錢を賜ふ

右源兵衛義、三拾ヶ年已前未年、同町大和屋彦吉祖父彦右衛門時代、奉公に罷越、實躰相勤ひニ付、拾四ヶ年已前亥年、別家爲致貴、自分と渡世と女房ニ爲任置、主家へ日勤罷在、處、主人彦右衛門義及老年、悴彦七の家名讓渡の後、同人病死ひせしニ付、彦右衛門再相續致り得共、極老にて家業難出來、同人女房いゝ義も極老に上、孫たみ義を手足不自由言舌難分、右躰老衰難病の者ニ付、自分家業相止、晝夜主人方に罷在、萬更引請取斗いせしひ得共、追々身上向相衰、主家可及退轉義を此者深致心配、所持の品賣拂、銀子致調達、借財方に實意に及掛合、濟方出來、彦右衛門致安心、其後同人病氣差發、藥用介抱爲行届ひ得共、終に養生不叶相果ひニ付、彦右衛門娘家へ縁付、致出生ひ彦吉とち者貴受、相續爲致、幼少ニ付此者致代判、家内不殘主家へ晝夜相詰、家事向并いゝたみと介抱爲行届、悴寅吉を下人同様召仕、夫と給銀等不貰受、たみ義追々病氣相重り、藥用介抱種々手を盡ひ得共、養生不叶致病死、此者實直に主家業致出精ひニ付、得意先氣請宜、商賣向致繁昌、身上追々立直り、いゝ義相悅罷在、同人老衰ニ付穢物洗濯等取片付致、喰物好の品等相与、諸衷心を付、主家葬式佛更と勿論、先祖年忌等懇に相營、其方を僉服を着、物見遊參等不能越、身分相慎、幼少と主人を大切に忠勤の段、寄特に付譽置、鳥目七貫文差遣、此後も彌主家を大事に可致ひ、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇四三

盜賊を逮捕せる越前屋善吉外六名に錢を賜ふ

難船を救助せる忠助外十五名に錢を賜ふ

御橋請負及旅籠屋支配を家口屋重三郎に許す

旅籠屋軒數の制限を解

泊茶屋を旅籠屋に準せしむ

南新町貳丁目夜番人谷町 同町垣外番天王寺長吏下
 三丁目吉村屋喜兵衛借屋 若キ者宇助弟子 支配借屋京屋彌兵衛下人 同町垣外番高田長吏下
 越前屋善吉(甚)吉 半 助 富 藏 八 兵 衛
 西高津新地九丁目夜番人 三郎右衛門町夜番人 若キ者利治助弟子 助
 大和屋彦藏借屋 榎屋藤兵衛支配借屋 若キ者利治助弟子 助
 越中(後)屋嘉兵衛 八幡屋定七 市 助
 其方共義、盜賊を差押、夫之所者中合、召連訴出の段、兼お觸渡し趣相守、(奇)寄特と義に付、爲褒美鳥目貳貫文ツ、差遣ス、
 目印山に罷在、

- 忠 助 吉 市 松 万 吉 常 吉
- 寅 吉 爲 藏 市 治 良 儀 右衛門 岩 右衛門
- 六軒家濱 上荷舟乘 吉 三 郎 重 治 郎 太 助 文 次 郎 治 助
- 仁 兵 衛

右者共、當月七日同十八日、安治川口におゐて、廻船貳艘強風にて淺瀬へ被吹付、又を沈船等ニ相成、及難義の節、相詰且の辺に居合、右船へ漕付、精に相働、危難を助ケ遣の段、兼お中渡し趣厚相心得の故に義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣ス、
 丑正月廿七日 〇南組惣年寄の副 書日付は晦日なり、
 (御觸書承知印形帳)

圖九七 正月廿八日 塚口屋重三郎御橋請負并旅籠屋株再興之事、床髮結仲間右同斷之事、常盤町三丁目塚口屋重三良義、大川筋天滿橋外拾橋掛直大修復 并平常小破急破御修復共、明和年中先祖七兵衛無代に引請、右爲手當旅籠屋差配に義願請以來、右旅籠屋九百軒に限、

仲間組合相立、右者共利潤の内々、壹軒に付壹ヶ月銀五匁宛役銀取立、右助成を以、年來橋の大小御修復無差支定請負仕來、去ル寅年株札并問屋組合仲間等停止の節、橋に定請負并旅籠屋差配仲間組合も差止に相成八を見よ、此處、此度諸問屋組合再興に付及取調の處、旅籠屋に義と、諸色直段にも差響の筋無之、其上旅籠屋とも稼方猥に相成のあり、盜賊惡黨共取締にも抱の付、旁文化以前に通、橋に御修復定請負并旅籠屋差配古復と義、前書重三良へ付、旅籠屋共仲間組合も再興中渡の間、一統其旨可存の、
 (可脱)
 一右旅籠屋と義、去ル寅年以來、銘に勝手ニ渡世致の付あを、差向人數増減も有之、其上當表に義諸國海陸入込の場所にて、旅客多く立廻りの義に付、旅籠屋軒數九百に限りあを、諸商賣手廣に御趣意にも相振の付、前と軒數に不抱、現在に姿を以、重三良に差配に付の條、此後新規に「旅籠屋商賣」相始の者と、重三郎差配可請、同人差配外にも同商賣致の義不相成の、且三ヶ所泊り茶屋と義も、去ル寅年御改革以來、旅客寐泊をも引受、旅籠屋同前と稼方に付右に分別廉相成のあを、是又不縮に抱の付、泊茶屋と義も旅籠屋並に通役銀差出、夫と無差支様可致の〇圖二二八
 (御觸書承知印形帳)
 一大坂床髮結と義、元和年中(已來)、無賃にて窄屋番同所下男に召仕の故を以、町に近在等其者共限り髮結床爲差出、追お取締した免、仲間組合も相立の付あを、内仕亘を唱、内分にあ床髮結同前と稼致の者、(共脱)床髮結と差下に相成相働旨等と義、寛保度以前々度、觸渡七四〇圖四九七等、在之、去ル寅年株札并問屋組合仲間等停止の節、床髮結共窄屋御用を召仕の義と勿論、

床髮結仲間を再興し牢屋番の勤務を命ず

内仕事を爲す者は床髮結の配下たらしむ

右に者共仲間組合も差止○圖五五九に相成ひ處、此度諸問屋組合再興に付及取調ひ處、髮結と義を諸色直段に差響ひ筋無之、右躰町在に髮結床爲差出ひ助成を以、往古方無賃を牽屋御用相勤來ひ義あり、通例無賃人足に類ひ譯も違、其上髮結共稼方猥に相成ひあを取締抱に付、旁文化以前に通、床髮結共牽屋御用を召仕、右に者共仲間組合も如元相立遣、右に付御威光を借、權柄ケ間敷取斗を勿論、不取締に義無之様可致段、元床髮結仲間重立ひ者共へ中渡の間、一統其旨を存、諸吏前々通相心得、内仕吏々唱、床髮結同前と稼致ひ者共ひ、床髮結と手に附可相働ひ○圖八〇八を見よ、

右に通此度從江戸表御下知を以中渡の間、三郷町中并所と請負地等迄はも、不洩様可觸知者也、
丑正月○次の令と共に、町中家持の承知判形日付は廿八日なり、 信濃

因幡

(同上)

補達 八〇七 同日 佐々木信濃守様 來月御月番被成御勤ひ事、
信濃守様、來月御月番御勤被成ひ間、此段承知可有之ひ事、

丑正月

(同上)

觸 五九八

○觸 三

に同じ、

觸 九九九

二月五日 紀伊一位○治殿御逝去に付、鳴物停止に事○體裁圖四八

觸 九九〇

同日 川筋掟に事○觸 一

觸 九六一

二月七日 中山道熊谷宿外五ヶ宿美濃路墨俣宿外壹ヶ宿・奥州道中鍋掛宿困窮に

付、人馬賃錢割増に事○圖五七六六及六一五一を見よ、

觸 五九六

同日 中山道落合宿外八ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増に事○圖五七六一及六一四六を見よ、

補達 八〇八

二月十日 床髮結渡世に者改人の事、

同所平野口町

- 元頭取 京屋 辰五良 和泉屋 常二良 和泉屋 熊治良
- 南久太良町壹丁目 吉原町
- 岸部屋 七兵衛 松葉屋 豊七
- 錦町壹丁目
- 重立ひ者 天王寺屋 嘉十良 外 五人

今般床髮結再興被仰出ひに付、右に者共々床髮結渡世に者調に罷越ひ筈に處、紛敷者調に罷越、致混難維ひ由相聞、以に外に吏に付、前書名前外に者に決り引合不中様、右渡世に者に可中聞置ひ事○圖九九五七を見よ、

二月十日酉下刻

南組惣年寄

(御觸書承知印形帳)

補達 八〇九

二月十六日 石谷因幡守様御忌服に事、

石谷因幡守様御父に實方御伯母、小普請組酒井内藏助様御支配永田金平様御養母御病氣に處、御養生不被成御叶、去ル八日被成御死去ひ、依之因幡守様定式半減に御忌服、殘日數被成御請ひ旨御達有之、間、此段承知可有之ひ、以上、

丑二月十六日

南組惣年寄

(同上)

床髮結改人

補遺

ハ一〇 三月七日 西國・四國・中國筋・并因幡・伯耆・出雲・石見・隱岐、右國々々百姓町人、訴

認對決日限迄ニ罷登ル様可致事、

今日通達年番町、年寄當郷惣會所ニ被招呼、惣年寄中々左ニ通被仰渡、

西國・四國・中國筋・并因幡・伯耆・出雲・石見・隱岐

遠國金銀出入の訴狀を
受けたる者
對決日に不
參する勿れ

右國々等々百姓町人、當表々者々掛り金銀出入儀、最初其向々訴狀相達の後、定々日數相滿、金主々度々追訴請ひあも、出入内濟々勿論、數月相立ひあも對決々も罷登ル族不
少、不埒々至々付、向後嚴重可及沙汰の間、在々領主地頭々おひ々厚世話在之、成丈々可爲相
濟、若又々分在之々、最初相達の日限迄ニ無相違罷登り、對決致々様可取斗旨、今般從江戸
表御下知を以、右國々諸家當表藏屋敷詰役人々々達、尤御料所々分并私領々あも、當表出張役
人無之分々、同所々罷在御用聞町人々、其向々々可相通段も少渡の間、此旨可存ル事、

丑三月

右觸達等々譯々々無之の間、無急度組合年寄迄寄々通達可被々事、

○通達年番北濱貳丁目の
通達日付は三月七日なり、

關五九三

三月九日 綿諸鳥料理鳥普請用石類并あふ々細工儀、右仲間組合外ニ直賣

(御觸書)

買致間敷事、

去寅年中株札并問屋組合等停止被仰付處、其以來(御觸書)取締相崩、諸品下直々々不相成、却
め不融通々由相聞ひ々付、此度諸問屋組合共、前々々通再興被仰付の間、是迄々商法々不流、

三郷綿仲間
以外綿直積
買致間敷を禁
ず

諸鳥問屋及
仲買以外
鳥類直賣買
及出買を禁
ず

石問屋以外
の普請石直
賣買を禁ず

諸商人共物價引下ケ々々義精々厚心掛、實直々渡世相營可々旨等々義、去々及三月中町々々サ
渡、猶又右問屋組合等再興相成ひ分々、都々素人直賣買不相成の間、前々々如く可相心得旨等
も、去子正月中從江戸表御觸達有之々得共不相用、兎角去々寅年以來々仕癖々相泥、取斗々者
共も有之哉、既大坂綿商賣々義、三郷綿仲間外ニ在々人々廻々、綿直買直積等致間敷、縱
令余商賣相兼ひ共、右仲間々加り可々旨等々義、明和九戌年以來、追々相觸二一〇等々見々、有之
處、近來猥々相成、諸問屋舟宿亦々町續在々商人共々内、表向々余商賣杯々々、在々人々
廻々、百姓々綿直買、或々糶買致々、綿職人共を抱、諸國々買客々致案内者數多有之、綿屋
共々勿論綿職人ニ至迄、渡世差支難義々々由々、取締々義綿仲間年行司共願出ひ條、右
仲間々義、此度調々上、再興相成ひ廉々上、其義相弁、向後綿取扱ひ者々、縱令余商賣
相兼ひとも、綿仲間々加り可々、右仲間外々綿取扱、地賣他所賣等決々致間敷、
一市在々當表々賣出ひ諸鳥料理鳥共、前々々諸鳥問屋買取、同仲買々賣渡、右仲買々素人々賣渡
ひ仕來々、右仲間外々直賣買致間敷旨、天保十二丑年相觸二〇五〇見々、有之處、是又近來猥々
相成、市中住居々者、亦々他所近在等々三郷町内々入込、諸鳥料理鳥共直賣買、并近在等々
致出買ひ者數多有之、問屋仲買共渡世差支、難義々趣を以、兩仲間年行司共々前同様願出ひ條、
右問屋仲買々義も、此度調々上、再興相成ひ廉々上、其義相弁、向後諸鳥料理鳥共問屋共
へ賣渡、望々者々仲買々買取、仲間外々直賣買出買等決々致間敷二〇六〇九
一諸國山方々當表々積登りひ普請々相用ひ石類々義、一旦當表石問屋へ引受、石商人共へ相送

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇四九

石問屋高寺
屋善右衛門

枋屋仲間以
外の枋細工
を禁ず

り仕來にて、石問屋に手ヲ離賣致間敷旨、天保九戌年相觸○補遺有之處、是又近來猥ニ相成、石商人共荷主又を致買積の船人（頭）と馴合、石問屋に手を離致賣買、右商賣人（頭）と外素人共義も、船頭を直買致の者不少、石問屋業躰ニ差障、難義と趣を以、石問屋高寺屋善右衛門義、前同様願出の條、右問屋に義も、此度調の上、再興相成の廉（頭）の上を、其義相弁、向後普請石取扱の商人共と、石問屋に及相對、買取の義の勿論、素人と右商賣人を買取、荷主船人共直買等決あ致間敷の、

一三郷あふこ細工職と者の、御仕置をの有之節、役動をも仕來のこ付、右仲間にも不加、外職人共あふこ細工致間敷旨、寶曆五亥年相觸○圖二二二有之處、是又近來猥相成、右職人（頭）と外、あふこ細工渡世致の者數多有之、渡世差支難義と趣ヲ以、あふこ屋仲間年行司共義、前同様願出の條、右仲間と義も、此度調の上、再興の意の廉（頭）の廉を、其上御仕置者有之節、役動も前と通復古中渡のこ付、其義相弁、向後あふこ致細工のの右仲間に加り可や、櫛屋を勿論外職人共も、仲間外にてあふこ細工（御書承知印形帳）致間敷の、
右ヶ條と趣の勿論、此度諸問屋組合再興のこ付、前段中渡并御觸面と趣無違失相守、夫と仲間外にて直賣買等決致間敷の、若亦此後も心得違、右中渡不相用者有之の、其仕義次第嚴重に可や付の、
右と通三郷町中端と迄へも不洩様可觸知の也、

丑三月形○町中家持の承知判
日付は九日なり

信濃

因幡

（御書承知印形帳）

三郷棟問屋
棟仲買以外
の棟賣買を
禁ず

圖五九六

三月十日 當表市中并近在から出糠を、糠仲買共へ賣渡、猥ニ他所賣致間敷事、當表市中并近在から出糠の、前々三郷棟仲買に買取、同問屋に賣渡、右問屋仲買共が所々に賣方致仕來のこ付、出糠不殘右仲買共へ賣渡、猥ニ所々に直賣致間敷義と處、去ル寅年間屋仲買組合等停止被仰渡の後、商法相乱、品と差支と筋も有之のこ付、去ル亥年右問屋仲買（御書承知印形帳）組合等再興被仰出、諸商賣とも都如前と、何品より、其筋問屋仲買等可相拂段も、中渡の義と有之の處、右中絶中の流弊に泥、又と不心得と者も有之哉、近年三郷其外近在から出糠を仲買共へ不賣渡、他所他國に直賣致の者不少のこ付、江戸表に積下方と勿論、其外賣方にも差障、問屋仲買共難義と趣と相聞の、向後右出糠不殘右仲買共の賣渡、直賣と義決あ致間敷の、若直賣致の趣於相聞と、吟味と上急度可令沙汰の、
右と趣三郷町中可觸知の也○圖五三八
一を見よ、

丑三月形○町中家持の承知判
日付は十日なり

信濃

因幡

（同上）

圖三五六

三月十一日 問屋組合再興相成の口とを、其品限、素人直賣買不相成の事、去ル寅年株札并問屋仲間組合等停止の節、何國から出の何品こあも、素人直賣買勝手次第たるをさ旨、從江戸表御觸有之の處、今般調の上、問屋組合等再興相成の分の、都る素人直賣買不相成の間、前々如く可相心得段、猶又去子正月中御觸○圖五九〇趣も有之の得共、兎角と右

御觸及口達 嘉永六癸丑年

問屋組合再興の分は素人の直賣買を禁ず

寅年以來、仕癖相流、商法混雜いさし、渡世差支ゆ由を以、此度再興相成ひ三郷綿仲間并諸鳥問屋向仲買石屋(問取)あふこ屋仲間糠問屋同仲買、右夫々年行司共等々追々依願、其品限素人直賣買差止と義、再觸差出○圖五九六三及五九六四を見よ、ひ義こあ、右と外前同様問屋組合等再興相成ひ口と内こも、追々同様再觸願出仕宜こ至ひあり、際限も無之而已ならは、前書御觸面こも相背、以て外不埒と事こい間、其品限、仲間外素人と身分不顧、地廻り并他所と者と直賣買直取引等致、或の當表に可積登荷物を、入津以前途中に出張、又の在と荷元に入込、糶賣買杯いさしひ義無之様相改、右問屋組合等再興こ付、御觸面と趣無違失相守、都る素人直賣買不相成次第、町人共の能と諭、向後右躰と儀無之様精と取締可やひ、

丑三月○町中家持の承知判形日付は十一日なり

(同上)

圖三五七

三月十六日 紀州御簾中様御遺體御通棺御道筋書事、

紀州家簾中遺骸通行道筋書

紀州御簾中様○豐子齊躰至御遺躰御通棺御道筋、來ル廿六日、牧方街道を野田町通野田橋、相生町を京橋南詰濱側西へ、今橋御渡西に、境筋南へ、備後町西へ、御堂筋南に、西本願寺北に門を御入、御晝休、夫々御堂筋南へ、北久寶寺町東へ、心齋橋筋南へ、博勞町東へ、境筋南へ、長堀橋日本橋御渡、長町住吉街道、

○本令端書に三月十六日御觸とあり、

(御觸書判形帳)

圖五九六五

三月十九日 東海道平塚宿外拾ヶ宿困窮こ付、人馬賃錢并渡船賃共割増と事○圖五九六五及六一五四を見よ

銀箔方差配人の交替

圖五九六六 同日 銀箔差配人糸屋清兵衛病氣こ付、跡役伊勢屋源助へ被仰付事、京都と外こ銀箔打ち義不相成旨、先年々觸置、猶又爲取締、京都銀箔中買定職、内兩人、銀箔方差配人と名目差免ひこ付あり、右と者共國と在町に相廻、銀箔隠打ち者相糺可や間、此旨可相心得旨、(文政カ)天保元寅年正月觸置○圖四四四二を見よ、ひ處、其後退役と者有之、當時差配人播磨屋源兵衛糸屋清兵衛兩人と内、清兵衛義病氣こ付退役中渡、跡役と義の中買共と内、伊勢屋源助に銀箔差配人ト渡ひ間、此旨可相心得ひ、

右と通可觸知をの也○圖五七五五を見よ

丑三月○南組惣年寄の副書日付は十九日なり

信濃 因幡

(御觸書承知印形帳)

圖三五八

三月晦日 阿波堀町年寄讚岐屋八兵衛外壹名、役儀出精相勤又の忠孝を竭ひこ付、夫々御褒美被下事、

阿波堀町年寄

讚岐屋八兵衛

右八兵衛義、丁入用減方心を用ひ、公事出入可及儀、可成丈不事立様取斗、其外丁内貧窮と者への米品等相惠、役儀出精と相勤ひ段、(奇)寄特こ付譽置、銀壹枚爲取遣ひ、彌此上可相勵ひ、

周防町 大和屋定七別家手代 同町

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇五三

役儀出精の年寄讚岐屋八兵衛に銀を賜ふ

大和屋伊助

右伊助義、幼年、砌々、主人定七三代以前定七方へ奉公に罷越、實跡に相勤、殊に主家身上不如意相成ひ儀を致心配、商賣向并家事等迄引受取締ひに付、追々身上向立直りひ儀の、全伊助忠勤故に義と相聞、當時別家罷在、不相替主家へ日勤致し、幼主を守立、殊に伊助兩親存生中の孝養を竭ひ由相聞段、寄特に付譽置、鳥目拾貫文爲取遣ひ、猶此上身分相慎、精々可相勵ひ、
丑三月○南組惣年寄の副書日付は晦日なり、
同(同上)

三三五 四月廿八日 靈源寺祠堂銀貸付支配人代り事、

設樂八三郎御代官所攝劾西成郡難波村北丁
大和屋善右衛門借屋

三河屋卯吉

右に者、京靈源寺祠堂銀貸付支配人九、助町壹丁目大和屋利右衛門借屋川崎屋熊治郎、幼少に付代判伊助、跡支配人に相成ひ事○圖二四〇

○南組惣年寄の副書日付は四月廿八日なり、

補觸 一八九

四月 甲州道中上野原宿外九ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○書附留により補入

補觸 八二

五月十五日 往來又ひ明地面等こゝ、子供翫に花火焚や間敷事、
(御觸書承知印形帳)

靈源寺祠堂銀貸付支配人の交替

大和屋伊助の忠孝を賞し錢を賜ふ

道路明曲等に花火を焚ふ可からず

往來又を明地面等こゝ、子供翫に花火焚ひ義無之様、丁内を心を付可被ゆひ、以上○圖二四三
丑五月十五日 (御觸書承知印形帳)

觸 五九六

五月十八日 三筋山中法藏寺御宮其外大破に付、修復爲助成、三ヶ國并御府内勸

觸 五九六

六月朔日 地車太鼓・絲りもの等飾又を藝者に衣裝、自今木綿晒を可相用、右届

觸 五七〇

六月四日 中山道和田宿外七ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増し事○圖五七七

觸 三六一

六月晦日 南久寶寺町五丁目年寄銚屋嘉兵衛外壹名、役儀出精相勤又を忠勤を竭

南久寶寺町五丁目年寄

銚屋嘉兵衛

右に者年寄役勤方宜、町入用減方心を用、公事出入可及義の、成丈ヶ不事立様取斗、其外(奇)特に取斗ひ多し一段相聞ひ付譽置、銀壹枚差遣ひ間、彌此上可相勵ひ、
立賣堀四丁目

和泉屋與助

右に者貳拾四ヶ年以前寅年、右同町和泉屋源兵衛方に奉公に罷越、實跡に相勤ひ處、主家身上

御觸及口達 嘉永六癸丑年

和泉屋與助の忠勤を賞

役儀出精の年寄銚屋嘉兵衛に銀を賜ふ

追々不如意ニ相成、借財多、請目安出入濟方難出來、身軀限可相渡及仕義、主人源兵衛多病ニ付、此者引受掛合爲行届内、源兵衛病氣追々相重り、種々致薬用介抱外共、養生不叶致病死、同人悴龜之助源兵衛と改名致相續、幼年ニ付渡世向家事等此者引受、實直ニ取引致シ付、借財方約定通皆濟致後、源兵衛壹人立渡世出來様相成、四ヶ年以前戌年、主家々金子并諸道具貴受別宅致シ、其後女房呼迎、夫婦諸共肩入致日勤、身分を慎、主家大切ニ忠勤を竭シ段、寄特ニ付譽置、鳥目五貫文差遣シ、此後も彌主家を大切ニ可致シ、

六月○南組惣年寄の副書日付は晦日なり、

(御觸書承知印形帳)

三三三

七月朔日 七夕短冊竹精靈祭品々、川々へ捨間敷シ、尤右品々々 公儀御入用

五七七

七月四日 峯壽院○峯姫様御逝去ニ付、鳴物停止シ事○體裁國五五四〇に同じ、尙國四三二七を見よ、

五七二

七月五日 中山道下諏訪赤坂兩宿困窮ニ付、人馬賃錢割増シ事○國五七七九を見よ、

八二

七月六日 千日參七墓廻シ者、鉦太鼓を携シ儀可爲無用シ事○國七九五に同じ、

八三

同日 石谷因幡守様御忌服シ事、

因幡守様御父々實方御叔父、御書院番土岐豊前守様御組仁賀保内記様御養父御隱居、仁賀保誠遊様、御病氣々處、御養生無御叶、去月廿九日被成御死去シ付、因幡守様定式半減シ御忌服殘日數被成御請シ、依之今六日信濃守様御月番被成御勤シ旨、御達有之ハ間、此段承知可有之ハ、以上、

丑七月六日

(御觸書承知印形帳)

五七三

○國六一に同じ、

三三三

七月十七日 紅毛錫御買上シ事、

口達

紅毛錫の買上
所有者の調
査と届出期
限

此度紅毛錫急御入用シ義有之ハ間、市中其筋商人共々勿論素人(可脱)も、右錫所持シ者有之ハ哉(可脱)〔二付〕夫々持合シ分、時々相場を以御買上相成、間、其旨を存、壹町限町役人共嚴重取調シ上、有無共來ル廿二日迄ニ、方角々惣年寄方へ可申出シ、若隱置、後日ニ相顯シ、當人并町役人共迄も、急度可申付シ、

丑七月十七日

右々通三郷町中端々迄も不洩様早々可申通事、
右々通被仰出ハ間、於町々格別入念取調、有無共書付、年寄印形にて、來ル廿二日五ツ時迄ニ、物會所へ可被差出シ、尤所持有之分を斤數認可被差出シ、御急シ義ニ付、等閑シ義無之様、早々取調可申シ、以上○國二四一七を見よ、

丑七月十七日(御觸書承知印形帳)

五七四

○國六一に同じ、

三三三

七月廿五日 酒中次々者共、銘々量樽所持致度旨願出シ付、聞届シ事、當表三郷酒造人共々酒賣渡シ節、壹斗壹升入シ溜樽を以量渡シ處、右ハ夫々手元ニおぬク拵シ

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇五七

南組惣年寄
の副書

三郷酒造人
に量樽の使
用を許す

酒中次人に
も量樽を所
持せしむ

將軍家慶
葬

義ニ付、少シツ、違目も有之、其上先般株仲間組合等差止相成ひ得と、彌以賣方升目不同有之、
自ラ酒直段ニ響合、不締ニ相聞ひニ付、取調ニ上、右溜樽相止、新規ニ酒造屋共手元ニて同様
升目ニ樽爲拵、量樽を名目改、三郷於惣會所組ニ者ニ爲及見分ひ上、焼印打、兼酒造ニ義取
締居ハ惣年寄共へ取扱付、酒造稼鑑札ニ應、酒造屋共へ渡遣ひ付、右品を以量渡ハ様可致、
其外取締等ニ義、去ル午年四月口達〇圖二一七を以爲相觸ひ付、其已來酒中次ニ者共酒造屋ハ買
受ハ酒、當地小賣酒屋を勿論、下筋國々ハ石敷賣捌ハ節を、酒造人共手元ニ量樽借受相用ハ得
共、多人數ニて行届兼、商賣差支ハニ付、中次ニ者共も銘々ニ量樽所持致度願出、取調ニ上承
届、新規ニ量樽爲拵、酒造屋共同様、三郷於惣會所ニ組ニ者爲及見分ひ上、焼印打、酒造取締
居ハ惣年寄共へ取扱付、仲次ニ者共へ渡遣ハニ付、右ニ趣小賣屋共を勿論、酒賣買ニ携ハ者
とも令承知、彌不正無之様、嚴重ニ可致賣買ハ、
右ニ通三郷町中不洩様可付支、

丑七月〇南組惣年寄の副書
日付は廿五日なり

(御觸書承知印形帳)

圖五七五

七月廿六日 公方様薨御ニ事〇體裁圖五四一〇に同じ、尙圖九九七九、
五九八二、五九八六、及五九九四を見よ、

圖五七六

同日 餌指漁師殺生差止ニ事〇體裁圖三〇二九に同じ、
尙圖二三六九を見よ、

圖三三五

同日 御穩便中自身番并町中慎方ケ條ニ事〇體裁圖一九七九に同じ、但し、第三項の但書
遊ハ義も、尤相慎可事ニ改め、第十項を「商賣からニ寄、目印ニ差出有之小職、其外右類ニ品取置可事
事」に改め、又末項當高なる職商賣を列舉せる内、道具市の次に「大道ニて米搗」の一項を加ふ、尙圖二三
四六、二三六九、二三七〇、二三七
四六、二三七五、及二三七八を見よ、

圖三六六

七月廿七日 右箇條書ニ無之ハ共、嵩高ニ職商賣急度相慎可事、

覺

一此節御穩便中ニ付、諸事相慎可旨、最前ケ條書を以テ渡置〇圖二三六ハ處、嵩高ニ商賣ニあも、
五を見よ、右ケ條ニ載ト書載無之分と、不苦義ト心得違ハ族有之間敷共難ナハ條、右ケ條書ニ無之共、嵩
高成商賣体ハ急度相慎可事ニハ間、何品ニ不依、店先嵩高ニ商賣居細工水揚ケ大道ニあ荷
造等迄も、銘々隨分相慎可事ニ付、此度ハ格別重キ御穩便中ニハ得と、都メ義、尙亦町ニ
末ニ迄も心得違無之様、重々付、急度相慎可事、

丑七月廿七日酉下刻

(幕令)

圖三七七

七月廿七日 異國船渡來ニ付浮說ヲ觸、又ハ右ニ乘、米穀其外金銀諸品等買置

中間敷事、

口達

都メ浮說ヲ觸、又ハ右様ニ張昏杯致ハ族有之ハ、見付次第捕置可訴出旨、兼メテ渡〇圖二〇三
三を見よ、有之處、此節長崎表ハ異國船渡來致、尤別條筋更ニ無之處ニハを、其儀を勿論、最前相州浦
賀ハ渡來ハ異國船速ニ退帆致ハ義(等脱)ニ品を付、浮說ヲ觸ハ之有之由、就メハ右ニ被惑、時合
をも不顧、夫々名目を附、米穀其外金銀諸品杯、専ラ買置ニ義心掛ハ之も不少、自然融通ニ
も拘リハ哉ニ相聞、以テ外ニ事ニハ條、右ハ此節柄ニ義別ハ相慎、銘々産業を正路實直ニ可相
營ハ、若又右ヲ渡を不相用、此後も前同様浮說ヲ觸、或ハ右ニ乘、一己ニ利欲ニ迷ハ、(姦)

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇五九

總て嵩高な
る職商賣を
慎む可し

外船渡來に
つぎ浮說を
唱ふる勿れ

右浮說に乗
じ米穀其外
金銀諸品を
買持するを
禁ず

曲に取斗致し族有之、の、嚴敷可や付の間、一統其旨可存ひ、
右に通三郷町中末迄も不洩様早に可や聞ひ事、

丑七月○御觸書判形帳に、南組惣年寄の副書日付を廿七日亥上刻とす、

(御觸書承知印形帳)

一往來人謠小哥淨留理、其外雜言并高聲を給との賣歩行ひとの等、自身番にものより爲慎可や事、

高燈籠
軒先燈籠

一高燈籠并軒先挑灯差止可や事、

一接待相止可や事、

煮賣其他大
道の出店

一大道に煮賣其外給との、西瓜・菓物・甘酒等出店類、差止可や事、

軒前又は濱
側の納涼

一軒先又濱側等に涼、儀、差止可や事、

一の干に涼、灯を燈し、儀、差止可や事、

懸行燈
釣提燈

一商賣体により、軒先へ懸行燈又提灯釣り、儀、差止可や事、

納涼船

一川中へ涼舟無用事、

一納家下を非人火を焚、儀、差止可や事○圖二三六五及二三六六を見よ、

○年寄の副書日付は七月廿八日なり、

(御觸帳)

圖三六六 七月廿九日 江子嶋西町京屋忠兵衛支配借屋綿屋福松同居叔母のる外六名、忠孝を竭又の役儀出精相勤ひに付、夫と御褒美被下事、

江子嶋西町
京屋忠兵衛支配借屋
綿屋福松同居叔母

孝女はるに
錢を賜ふ

右のる義、兼お實躰成(者脱)の、兩親に意に不背様相心得、母たつ義四ヶ年已前々中風と症相煩ひ、歩行難相成、其後も打臥居ひを、藥用介抱爲行届罷在、父吉藏義の去々亥年病死致、兄太助熊藏(同脱)儀の濕病相煩、働難相成、太助の四國順拜罷出、立歸り不中、熊藏義の今以不相勝、妹すへ義の他へ縁付、男子兩人出生後、夫致家出ひに付、幼少に子供兩人召連歸、大勢に家内難育ひに付、中合他へ奉公稼罷出、聊に給金を家事入用に立足、別宅致居、兄藤七俱々致心配ひ由に、得共、同人も身薄に夫と際立ひ世話も行届兼ひを、此の日夜手仕事等ニ精を出し、大勢に家内を養ひ、其上右躰極老に母病氣介抱万事爲行届、孝養竭、病身に兄熊藏を大切致し、幼少に甥兩人を憐に、其身の鹿服を着し、物見遊參等へも不罷越、慎方宜、家内陸敷相暮ひ段、神妙(奇)寄特に付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

道頓堀久左衛門町
小嶋屋市兵衛支配りや

女房
堺屋徳藏

右徳藏と儀、兼お兩人共働稼出精致し、徳藏父徳兵衛に意に不背様大切に致し罷在、同人義

御觸及口達 嘉永六癸丑年

孝子堺屋徳
藏夫妻に錢
を賜ふ

五ヶ年已前酉年か中風い症相煩、半身不隨こ歩行難相成ひ付、藥用療治等こ心を付、折と好
ひ品買調相与へ、退屈不爲致様仕向遣、入湯杯望と節り、徳藏脊負さと付添、寂寄湯屋へ連參
り爲致入湯、其外日と兩便と世話の勿論、介抱向も厚爲行届、右躰徳兵衛發病後の、徳藏義働
用有之おも、他國へ罷出ひ義無之而已から、平常も夫婦と内、何と壹人の在宿介抱致し、程
こ心を用、尤兩人共僉服を着、物見遊參等こも不罷越、身分相慎、中合孝養を竭、段、神妙寄
特こ付譽置、徳藏へ鳥目五貫文、さとへ同三貫文差遣ス、

南久太良町三丁目年寄

平野屋六兵衛

南農人町貳丁目年寄

堺屋他四郎

右に者共儀、年寄役勤方宜、町入用減方精、心を用、公事出入可及儀有之節り、可成丈ケ不事

立様取斗、諸事取締方行届、其外寄特成心懸ケ有之趣相聞ひこ付譽置、銀壹枚ツ、差遣ス、

天滿拾壹丁目年寄

枳屋吉五郎

大川町

鴻池屋與三吉病身こ付
代判別家手代

役儀出精の
年寄平野屋
六兵衛外壹
名に銀を賜
ふ

役儀出精の
年寄枳屋吉
五郎に銀を
賜ふ

米屋定七

右定七儀、幼年と砌、書面与三吉七代已前与三兵衛時代ニ奉公住致し節り、實躰ニ相勤、度
と主家名前入相替り、得意先氣受不意、身上向不如意と相成ひ義を精と心配致し、主家家事向
万端實意こ取締ひ付、追と立直り、渡世も已前と通手廣と相成、當時別宅罷在、得共、無怠主
家へ相通ひ、數年忠勤を竭ひ段、寄特こ付譽置、鳥目拾貫文差遣ス、

(御觸書承知印形帳)

丑七月 日付は廿九日なり、
○南組惣年寄の副書

御穩便中こ付、町と自身番嚴重相勤可中事、

格別重キ御穩便中と儀こ付、此間方追と相達し趣、尙又昨夕も委敷及演舌四を見よ、一通、篤
と申合可相慎、且又自身番と儀、雇人差出置、おも相濟、様相心得、あり、以と外と事、捨
子且又盜難等と儀も無之様相心得、詰居ひ處か丁内相廻ひと節、人數差繰い多し、相廻、者
外、詰所に相残り、嚴重相勤ひ様可被中合、御組衆晝夜繁と廻り方被仰付ひ旨と中間、旁と能
と相心得、少しも等閑不愼と儀無之様可被中合、此間中相達し趣條と外こも精と心付ケ、行
届、様可被中合事三三六五及、二二七六を見よ、

七月廿九日未下刻

北組惣年寄

(御觸帳)

御穩便中諸商賣向差止又と愼等と義、去ル廿六日中渡置三三六五を見よ、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

米屋定七の
忠勤を賞し
錢を賜ふ

自身番には
雇人を差出
す可からず

解禁の職商
賣 (其一)

湯屋

一湯屋 經、あま、可致難義哉ニ付、左ニ通、

米市場

一米市庭 但、火ニ元別可念入候、尤夕七ツ時限相仕舞、入湯可致物靜候、

銀相場

一銀相庭

漁獵

一漁獵致し候もの

油相場

一油相庭

錢相場

一錢相庭

右職商賣ニ分、明二日カ差止慎等差免ハ、尤此節柄ニ儀ニ付、得共、夫ニ渡世ニ儀ニ付、右ニ通テ渡、儀ニ付間、銘ニ「相慎」、嵩高ニ儀無之様、諸事相靜可致候、右躰職商賣差免、迎、若年又ニ身輕ニ者、最早平日ニ通テ心得違、不慎無之様可致候、右ニ通町ニ末ニ迄不洩様可ヤ聞事○圖二三七

○北組惣年寄の副書日付は八月朔日中刻なり、

(同上)

圖五七七 八月二日 右大將様 上様ニ奉稱ハ事 尙圖五九四九を見よ、

圖三七〇 同日 明三日カ差免ハ職商賣ニ事、

解禁の職商賣(其一) 青物市場

一青物市

音高き職商賣及嵩高なる職商賣

一音高き職商賣并嵩高成職商賣

火を用ふる職商賣

一都府火取扱ハ職商賣

傾城町

但、火ニ元別可入念ハ、

泊茶屋

一傾城町商賣

煮賣屋

一泊り茶屋

但、火ニ元別可入念、可致物靜ハ、

一煮賣屋

但、同斷、

右職商賣等明三日カ差免ハ、尤格別重キ御時節柄ニ、得共、夫ニ渡世ニ儀ニ付、右ニ通テ渡ハ儀ニ付、御穩便中彌以相慎、嵩高無之様、諸事致物靜、火を取扱ハ類ハ尙更入念可ヤ義、勿論ニ儀ニ付、右職商賣スジ差免、迎、昨日カ相達九を見よ、通リ、銘ニ平日ニ通テ心得違、不慎ニ儀無之様可致ハ、

右ニ通町ニ末ニ迄不洩様可ヤ聞ハ○圖二三六

丑八月二日 付は同日午上刻なり、

(御觸帳)

圖三七二 八月五日 搗米屋駄賣屋共、餘分ニ石數買入、内ニニ他所賣致間敷事、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

口達

當年作物之義、豊凶もいよさ不相定、當地有米之義平年通にて、新穀取入迄有亦も有之の處、追々米相場引上への趣に相聞如何の、右に付るを自ら人氣買持の方相傾、且搗米屋駄賣屋共の内こそ、一己の利欲に耽り、日々小賣駄賣等目當の外、餘分石數買入、内こそ他所他國に賣捌、徳用取の裁趣も相聞、以て外に賣る、右躰に取斗増長のきりあるを、土地に有米追々相減、彌直段引立の而已からば、小前末の者共可及難義の條、其筋渡世に携ひ者共、土地に米融通ヲ專一に心懸ケ、日用賣捌方目當の外、餘分米買を不及中、内々他所他國に賣捌の義を、決あ致間敷、自然右躰に者有之におゐて、吟味の上急度可令沙汰の、尤搗米屋共小賣米之義も、元付に割合を以、一己の利潤を離、成丈ケ下直に賣渡の様可致の、右に通三郷町之末迄不洩様可申聞の^{〇圖二二八}七を見よ、

丑八月^{〇町中家持の承知判}形日付は五日なり

(御觸書承知印形帳)

圖三三三

八月六日 川魚市雜喉場魚市魚鳥商賣御免之事^{〇體裁圖一九八一に同じ、但し、第一項第}二項を前後し、且つ「生魚市場」とあるを雜喉場魚市に改む、尙^{圖二三六九を見よ、}

圖三三七

八月七日 御穩便中ニ付、火元別あ入念可申、并遊山ケ間敷猥ニ他行政間敷事、

口達

此節重き御時節柄に義ニ付、火元別あ入念、様、最前申渡置^{〇圖二三六、}義ニ付、町々自身番無怠町内見廻り、義こそ可有之、得とも、當年儀を五月已來數日照續の付あるを、諸品乾き

米價騰貴

搗米屋及駄賣屋の白米買占及他所賣を禁ず

解禁の職商(其三)

五月以來の旱魃

火の元取締を嚴ならしむ
行樂に耽る可からず

解禁の職商(其四)

素人の慰に漁獵するを禁ず

強く、自然手過チ等及出火、様義有之、あを、以て外に義、此節柄別あ恐入、義に、既比日に至、繁々手過チ斷等も有之、間、猶此上町役人共を無怠見廻り等い、末迄無油斷火に元念入、様可致の、
一追々商賣職等差免の付あるを、御時節柄心得違、猥ニ遊參ケ間敷他行い、その有之哉に相聞、不慎に至り、右躰に者、組廻りに者及見のり、相谷可申、間、縦令諸參詣い、共、大行に徘徊不致様、町役人共急度取締可申付の、
右に通三郷町之末迄不洩様可申聞、

〇北組惣年寄の副書
日付は八月七日なり、

(御觸帳)

圖三三四

八月九日 御城前芝場において賣商致の者、并兩御役所近邊明地にお夫々店を出、小商致來の者共、慎差免の事^{〇體裁圖一九八二と大差な}尙^{圖二三六五を見よ、}

補達 八二六

八月十四日 御時節柄ニ付、素人共魚釣又を網舟等に罷越間敷事、
今十四日八ツ時、通達町之年寄當物會所へ被招呼、惣御年寄江川庄作様を左に通被仰渡の、格別に御時節柄ニ付、川に魚釣亦を網船等に罷越の義、決あ不相成の處、此頃心得違、猥ニ罷越の者多分有之由、甚以不慎に至、夫々渡世の者を格別に義、素人慰同様ニ、當所川を勿論近在向遠方より共罷越のもの、御組廻り中御見當相成、のり、其町々別あ不都合の義、御谷可有之の間、縦令子供より共右様義無之様、急度相慎、様、町々年寄より可申聞の間、組合町に通達可致様被仰渡のニ付、御達一申上、此段御承知の上、御調印に早々御順達可被成

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇六七

み、已上〇圖二三六

〇通達年番北濱貳丁目の通達日付は八月十四日なり、

觸五九七、〇觸五九八、なるべし、

補達 八七 八月十五日、御目付松下大學頭様御到着と事、

御目附松下大學頭様、唯今北組惣會所に被成御着の間、此段承知可在之、以上、

八月十五日

北組惣年寄

(御觸帳)

觸五九七 八月十七日 普請と儀差免と事、鳴物と儀を追お可申渡り事〇體裁圖二七六五に同じ、

觸三三五 同日 夜市・夜店商賣并船作事等差免と事、

覺

一 神明六齋夜市

一 順慶町其外町と夜市

一 都あ夜店商賣

一 諸船造作

一 湯屋渡世と者共、夕七ツ時限不及焚仕舞、平日仕來と通焚可申、

但、火と元別あ可入念、

右と通明十八日と差免の間、勝手次第可致職商賣、勿論此節柄と儀とを共、夫と渡世と

解禁の職商賣 (其五) 夜市 夜店 船作事 湯屋

義と付、右と通申渡り儀と、條、若年亦と身輕と者共心得違、高高と儀無之様、一同相慎、諸

事物静こいゑ、別あ火と元入念可申、

右と通町と末と迄も不洩様可申聞、〇圖二三六

丑八月十七日 付は同日申刻なり、

觸五九〇 八月廿七日 松平長吉郎殿御逝去と事 〇體裁圖四〇一八に同じ、但し、本文「御機嫌何等無之」の下に、「普請鳴物御構無之」の一句を加へ、又左の附記

あり、尙圖五九三二を見よ、

下ケ紙

此御觸面鳴物御構無之義、長吉郎様御逝去に付あも、鳴物御構無之義と、先達あ被仰

渡有之、鳴物停止御構無之義とあり無之、此段不心得違様可仕旨、惣年寄中々御口上と

あ被仰聞と事、

(幕令)

丑八月廿七日

觸三六 同日 町と自身番の勿論町内見廻方怠無之様可致事、

御穩便中町方一丁限、丁人共自身番無怠様いと可申、其外等と儀、最前相觸置〇圖八一、處、

此節所と捨子并盜賊等と訴追と有之、全く町と番人見廻り怠、故と義と相聞、以と外と事と、

町と自身番を勿論「晝夜」町内見廻り、怠無之様いと、火と元等別あ入念可申、自然等閑と

義於有之と、急度可令沙汰、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

捨子盜賊の出訴多し自身番の怠慢を戒む

右に通三郷町中不洩様可申開事

丑八月北組惣年寄の副書日

(御觸帳)

故家慶に慎
徳院と諡す

觸五九八 九月二日 家慶公御院號、御贈位、御贈官被爲濟體裁圖三三

補達 八六 九月四日 町々自身番見廻方行届の様可被申合三五に同じ

今四日五ツ時、通達町々年寄惣會所被召呼、惣御年寄中々左と通、

自身番を嚴
重に勤む可
し

御穩便中何事も晝夜番被致六、町々内此節に至六、捨子又と被盜と訴六の度、在之由
右に付先月も御口達書體二三七を以被仰出趣、彌不行届無之様、猶又精々町限被申合
様ニ被致度、惣躰嚴重に行届六、町々内行届兼儀在之六、都々不行届様相
成、如何事六、別々其儀を存、銘々念を入様可被申合、此旨組合町々早と篤と
相通置可被申事、

九月四日

(御觸書)

補達 八九 九月五日 未曾有早魃二、川と通船と勿論吞水迄も差支二付、爲御救臨
時増浚御取計被成二

市内諸川の
涸渴と飲料
水の闕乏
臨時川浚
着手期

百餘日不雨ニ付、未曾有及早魃、既ニ大川を始、堂嶋川其外堀々内、干沙二一切水無之
様相成、通船勿論吞水迄も差支、以外義ニ付、俄ニ厚御勘考二上、爲御救大造二搔分浚
又浚取冲捨等、應場所御取斗有之、既ニ明六日御取掛有之、多分御入用高二相及、
御仁惠二程難有可奉存義勿論事二、於町と船方并諸商勿論、都々不洩様可被相達

外事、

土砂入用の
者は届出づ
可し

但、本文御用ニ付、此方共内掛り被仰付の間、土砂入用二分り、右等爲取扱、西寄會所
に出席いゝ可罷在の間、四ツ時八ツ時迄の間、同所へ書付可有持參、尤此節柄二義ニ
付、御浚所へ年寄其外不及罷出二

丑九月五日

(御觸書承知印形帳)

題三七 九月七日 慎徳院様御法事、於専念寺執行體裁圖二二五

補達 八〇 九月十一日 臨時増浚被仰付ニ付、御入用御差加儀心得方二事、

今日南組惣會所通達町々年寄被召呼、惣御年寄永瀬幾代助様々左と通被仰渡、

強ひて町々
より上金又
は人足差出
るに及ばず

浚土砂入用
の向は申出
づ可し

此度臨時増浚被仰付、是迄も右様と節々、町々組合又と一町限二、御入用御差加儀心得
ヲ以、上金又と人足差出、或人足代銀等冥加ニ差出義有之二、右町名を以上金等致義
、此節柄義二も有之、右等自ラ町入用ニ相響義二、是非差出事と相心得義二無
之の間、町々年寄其趣相心得可被申、土砂入用と向と立二、御浚と時宜次第可被下、
尤冲捨等も大造義ニ付、入用二、聊二も申出方、御都合も可相成、

一己並同志
又は仲間よ
り上金を申
出づるは差
支無し

一右御差加儀、實々冥加を存、町人一己二申出、亦同志者申合、申立義の勝手次第二
申合、且亦同商賣申合、仲間と年行司又と重立者惣代等申立類、是又同様可爲勝
手次第二、寄特志有之二、不遂時冥加を存義も不相通、殘念二可存、左様と向無之
様、於町々行届様可被申合、

御觸及口達 嘉永六癸丑年

右、趣組合町へ相通可被事○圖八一九及八二二を見よ

丑九月○當番綿袋町の通達日付は十一日なり

(御觸書承知印形帳)

圖三七

九月十二日

御中陰も相満ひこ付、自身番を御免被成ひ得共、木戸火と元等取締方弛不中様可致事○本文體裁圖一九八五と大差なし、加ふるに左の附記あり

町内の取締を嚴ならしむ

右、通被仰出、處、未所作に致し、鳴物御免と御沙汰無之儀に付、旁町と物騒のしき儀無之様可致、町と木戸と義も、此節と通、暮六ツ時限りべ切可中、御組衆廻り方爰是迄と通り有之儀に付、其旨相心得、通例自身番其外共御觸面と趣中合、町内末と迄入念相心得の様可被相觸ひ、以上○圖二三六五及二三七九を見よ

九月十二日申中刻

北組 惣年 寄

(御觸帳)

圖三八

九月十六日

和錫類御用と有無、御沙汰有之の迄り、他所へ相送ひ儀の勿論、地賣共致間敷事、

和錫御用 道具錫

錫類の他所送及地賣を禁す

紅毛錫と義、先達を御觸○圖二三六を見よ、有之、其砌所持と分差出と相成ひ處、猶又和錫御用に付、其筋取扱ひ者の中聞相調ひ處、錫器物潰シ品有之、右商のせしめ者と手前を、吹改ひを道具錫と相唱ひ由、右類の全品劣と可有之の得共、是等と品御用と可相成哉と有無、當時御調中と有之の間、折錫と仕立ひを始、都あ上品下品と不抱(抱)、古器物との共、錫類他所へ相送ひの勿論、地賣共追御用と有無御沙汰有之の迄り、何方を注文有之の共、賣引致間敷の段可相達

旨、御沙汰に付、其筋携ひ者の猶更と義、素人を取扱ひ者へも、心得方不洩様可被中聞ひ、若此上密、賣引致し者有之、の、急度御札可被成旨と、間、其段も可被中達ひ、尤他所へ買入ひ義の不苦ひ、此旨猶町と不洩様、一統へ篤と可被相達ひ、以上、

丑九月十六日申上刻

(御觸書承知印形帳)

圖五九

九月十七日

鳴物と儀、所作に仕ひをの計御免と事○體裁圖五四一五に同じ、尙圖五九七五を見よ

圖三九

同日

右に付、火難盜難等無之様、取締入念可中事○體裁圖一九八六と大差なし、尙圖二三七八及二三八〇を見よ

圖八三

同日

臨時増設と儀、都御入用を以御取計相成ひに付、御差加と儀不及中

出の事、

臨時川渡は官費を以て之を行ひ民間の上金を要せざるを告ぐ

一此度市中川と御渡被仰出に付、御入用と内に御差加へと義、是迄右等と義町ととも中立有之の處、此節柄と義にも有之、町入用と差響可中付、是非差出の事を相心得ひの無之旨相達置ひ、將又一己亦も同志と者中合、或も同商賣仲間中合の類を、差出ひも勝手次第と趣、是又相達置○圖八二を見よ、ひ得共、御渡追と抄取、都御入用を以御取計相成ひ義に付、一己并同志又を仲間御入用差加と義も、町と同様、差出ひ義との不及旨可被中達ひ事、

九月十七日

(御觸書承知印形帳)

圖三八

九月廿三日

御日柄相立ひ得共、火と元入念、諸事慎方不弛様相守可中事、

御觸及口達

嘉永六癸丑年

御中陰中市
中靜謐なり
しを賞す

御中陰中諸事相慎、可致穩便旨や渡置の處、火事沙汰等々無之、町中物靜なる、畢竟町人共や合セ行届の事を相聞ひ、追々御日柄の相立の得共、猶更火の元入念の義を勿論、諸事慎方不弛様、追々中渡の趣相守可申す○圖二二七九及二三八一を見よ、右に通町中へ可申聞ひ、

丑九月○北組惣年寄の副書日付は廿三日なり

内藤紀伊守殿御本丸へ被召連、月番加判御勤の事○體裁圖三三七に同じ、尙圖五九〇四及六三六五を見よ

九月廿九日 御代替の御禮相濟の事○體裁圖一九四六に同じ

同日 道具錫の儀、御用不相成の間、勝手次第賣引可致事、

道具錫の義（二付）、先達を達置○圖八二〇の儀も有之處、最早御用不相成の間、勝手次第賣引可致旨、寄々其筋のものをへ可被相達ひ、（已上）五を見よ

丑九月廿九日

十月朔日 城州愛宕郡聖護院村桂女儀、御影并安産抱瘡の守弘の事○體裁圖三八六五三二及六二〇六を見よ

十月二日 公事訴訟裁許の事○體裁圖三三三九に同じ、尙圖五九七五を見よ

十月十二日 新穀入津の時節の付、米賣買方窮屈無之の様、融通合專一に相心得、且帳合米の儀も不行儀無之、正路の賣買可致旨被仰渡、御請證文の事、

被仰渡御請證文の事

米方年行司共

不正米仲買の處罰
正路の賣買は危惧す可きにあらず
米穀の融通を計る可し
帳合米の本意を失ふ勿れ

米仲買共の内、不正の商内致、者共、先頃より召捕、及吟味の付ある、濱方にあ心得違と者と有之、賣買手狭に相成ひある、追々新穀入津の時節、諸藏入札等に差響、如何の事に、右吟味に及ひ者共、全一己の利潤に拘り、米穀高直窮民難澁の時節柄をも不弁、不正に取斗致、故に儀に付、素々正道の商内方に於ても、聊危踏可申筋無之、殊當年を作物も相應に趣にも相聞、新穀登高等を銘々渡世柄相弁の儀に付、諸藏入札不差滞様、時合等、儀も篤と致弁別、可成丈け土地有米及潤澤、賣買方格別窮屈無之の様、融通合專一に相心得、賣買を勿論、都一己の利潤に耽り、義無之様、急度相慎可申ひ、且帳合米の儀も、享保已來追々申渡、次第、正米掛繫の意味無忘失、聊不行儀無之様、正路の賣買致、を、諸國客先氣配も進、追々市場繁榮の基に付、正米帳合とも平準に相庭相立、正路の賣買致、様、精々申合掛引可致、若又此上にも不正に取斗致、者有之、召捕嚴重可申附ひ、右之通申渡、條々承知、仲買共一統へ能く可申諭候○圖二三八三、二八四、二八五、二八六を見よ

嘉永六丑年十月十二日

（米商舊記）

十月十五日 一統物靜なる火難盜難等も無數に付、格別ニ自身番相勤の事不及

十月廿七日 古金銀引替所の儀、猶又來寅十月迄、是迄に通被差置の事○圖五九三九及六〇二

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇七五

七を、
見よ、

選三六二 十月廿八日 慎徳院様百ヶ日御法事、於專念寺執行し事○體裁體二二
五五に同じ

補編 一九〇 十月 中山道安中宿外四ヶ宿、奥州道中白澤宿、甲州道中鶴川宿外二ヶ宿困窮こ

付、人馬賃錢割増し事○圖五七八九及六一八七よ
り推考して、本目錄を存す、

關五九八 ○圖八
に同じ

補編 一九一 十一月五日 公邊御用途一時こ差湊ひ儀こ有之の間、御國恩を弁、銘こ身分こ

應し、上納金相願ひ様可致事、

〔通考〕
嘉永六丑年十一月五日御召被仰渡し

御諭書

去ル子年西丸御普請こ付あ者、御用途莫大い處、速こ御出來相成、右者諸家御手傳并こ依願上納金、其外万石已下い面こ高割上納金も被仰付ひ處、當夏浦賀表に異國船渡來こ付、御固メとして諸大名出張被仰付、右こ付あ者 公儀御入用も若干い儀こ得共、右い面こ失費も不少、其上防禦武備い御世話有之いこ付、右御手傳并こ高割上納金等い分も、都あ御免被仰出、西丸御普請御入用者、皆御出方こ相成ひ儀こあ、殊こ近年異國船度々江戸近海へ渡來こ付、防禦御備向い儀者、嚴重こ御手當無之いあ者難相成、是又如何程い御用途こ至り可や哉難斗、然處此度い御大喪、引續御代替、將軍宣下等い御大禮、都あ御省略難相成、就中右海防筋い御入用者、前後見合も無之程い儀こあ、不容易大御用途一時こ御差湊ひ儀者、是又前後見合も有之間敷、

上納金諭書

異國船防禦

御大喪と將軍宣下の大禮

上納金は國恩を報ずる所以

御城代始自分共一同深恐入痛心致ひ、大坂表い儀者諸國こ無又豪富い者共群居致ひ、是又度々御用金等相勤、當時年割御下辰中とい乍や、此時節柄も徒こ見聞致居ひ儀者、不相成場合こ付、猶又此度御用金等い御沙汰可有之趣こ得共、前件い通不容易御用途御差湊い折柄、誠こ不得止事次第有之い、於然者改あ被仰出無之内、其方共心得を以、御國恩い冥加を弁へ、銘こ身分相應上納金相願、今般い御用途御差加へこも相成、御治世大平い御恩澤こ浴し、安逸こ渡世相營ひ冥加を弁へい者勿論、殊こ當所町人共抽寄特い取斗於有之者、諸國一体い手本こも相成、公邊御用途御操合い一端こも相成、其方共身分を以、御手傳相勤ひも同様い儀、一廉い御奉公甲斐相立、如何斗規模い筋こ可有之い、然を万一心得違猶豫いさし、上より被仰付い様こあ者、折角い誠意規模を失ひひ而已ならは、如何こも御恩澤御時節柄も不弁い様こあ、平生有福こ相暮ひ富豪い名を被唱、詮も無之、實以残念なる次第こ付、御城代こも厚御思慮い上、被中合い次第も有之、自分共い再應熟考を加へ、右等い趣い諭い條、能こ會得いさし、篇を勘弁い上、夫こ身分こ應、出格い上い上納金相願ひ様致へし、
一改あ中聞ひ迄も無之い得共、御城代者當地い御管領職、町奉行も町方其外支配こあ、上い御爲者勿論、下い爲筋をも厚勘弁い上取扱ひ御役筋こあ、土地い者共撫育引立方等い儀こ付あ者、兼こ厚存含專こ談居ひ儀も有之、旁此度い義も、上より御用金等被仰付ひ様あ者後手こ相成、別あ此度い儀者、是迄い振合とも違、一際御國恩冥加を相弁へ廉不相立いあ者、難相成場合こ可有之、旁其方共心得を以上納金願出、い、一入寄特い心底も相貫、公邊御用途御操合こも

相成、其方とも身分規模とも相立、先祖以來御治世御恩澤を蒙り冥加に相叶、銘の家名永續者勿論、行末子孫に後榮とも相成の事ニ付、當座一果に私情杯に拘り、踟躕いふ儀に有之間敷い、是等儀御城代にも深御勘考、自分共も厚談判に上、改め御用金等不被仰出以前、前件に趣申諭の條、其旨相心得可申の事、

一當時海岸防禦の儀者、素々天下國家被安の御仁惠に大本にあり、彼是厚御配慮被爲在、且万石已下御旗本に面々勝手向不如意に由達御聽、此度拜借金被下金をも被仰出、次第、莫大に御入用、且亦自然海運に便利を失ひいある者、是又不容易儀に付、海に所々通船路堀、又者陸地運送等儀、夫々に御手當も無之いある者相成間敷敷、旁大造に譯あり、幾許に御入用仕に至り可申哉、實に難斗盡義有之、公儀に者末々に者迄往々安堵に相成遣度との御仁惠にあり、斯迄御苦辛被遊の事この條、おろそり相心得いある者、實に冥利に背の儀と存の事、

一士農工商各其職有之の事、何事時農の歩役等之苦に、心力を勞ひ得共、商賈者取分軍事に預りい儀無之、産業を守、太平に御恩澤に浴し、衣食住者勿論何無不足安穩に渡世罷在、いつの時此御厚恩を報し可申哉、責め御國用を弁へい處當然に儀に可有之、旁如斯御時節、一廉に御奉公不相勤いある者不叶筋と存の事、

右に通し譯あり、一体於公儀も非常に御手當向の兼め被爲在の儀に心得共、前ヶ條に申諭の通、彼是不容易御用途一時に御差凌に相成、素々天下萬民被爲對の御政務筋、暫時も難被差置儀にあり、事實不被得止事次第、一同深恐入痛心致の間、實に此度者日本國中上下一体に力を合、

御安心の場合に至りい様、武家者武家丈、百姓者百姓丈、町人を町人丈、粉骨を相盡、御國恩を可奉報謝者此御時節に付、右等に趣厚相弁、銘に彼是に私情を相除、御爲筋一圖に相心得、速に請いとせし、

但、一朝一夕に儀に無之の間、銘に篤を勸弁に上、否に義封書を以可申立い、尤今日罷在の内、諭に趣肺腑に銘に、會得いふいものも有之、い、前後左右に斟酌不及、速に請可致、追め御賞美の節、其心得可有之儀にの事、
○圖八二

(御用金之控)

圖五八九 十一月十一日 東海道岡部宿外三ヶ宿并富士川、甲州道中鶴川困窮に付、人馬賃

錢并川場賃錢共増割の事○圖五七九四及六一九七を見よ、

圖三六三 十一月十二日 米仲買共不限、市中米賣買に携い者共、無危踏米賣買可致の事、當丑年に義、夏以來稀成早魃に、場所に寄、豊凶甚不同有之を乍や、止る處相應に作柄に由相聞い得共、國に廻米手後、諸家新米も延着等あり、いよ例年程に米高多賣出も無之、其上米仲買共義、追々新穀入津の時節、諸藏入札不差滞様取斗、可成丈ヶ土地有米及潤澤、賣買方格別窮屈無之様、融通合專一に可相心得旨等に義、先月中品に申諭○圖三二二の後も、何なく賣買を危踏の遺念不相去、差向市中米融通不宜趣相聞の條、總め何商賣にあり、見込商に買持等に義に可有之を、畢竟右に功不功を以、職業に得失をなすに義に付、一通に義に

早魃の當年
作柄に及せ
る影響

米穀の融通
宜しからず
見込商は商
家の常なり

米仲買以下
危供する所
なく買買す
可し

不_(御觸書承知印形帳)正_(御觸書承知印形帳)と筋も無之處、右躰賣買危踏取引手狭に相成ひあせ、「自然」諸國と米直段難行合而
已から_(拘)、廻米進方にも抱、諸般差支を生ひ筋の_(拘)間、米賣買に携ひ者共、右意味合を勿論、
先月中_(拘)諭置の趣をも能く致弁別、此上融通合專一に相心得、無危踏米賣買可致旨、猶亦米仲
買共へ厚可_(拘)申ひ、
右と通米方年行司共_(拘)申渡の間、米仲買共_(拘)不限、市中米賣買に携ひ者も、一統此旨を存、無
危踏米賣買可致ひ、
右と通三郷町中不洩様早と可_(拘)申通ひ_(四見をよ)、
丑十一月_(御觸書承知印形帳) ○次の令と共に、町中家持の
承知判形日付は十二日なり、

題三六四 同日 光雲寺祠堂金貸付支配人_(御觸書承知印形帳)の事、

南渡邊町

岩井屋才助借屋

大和屋清八郎

光雲寺祠堂
金貸付支配
人

光雲寺貸附支配人_(二四五五を見よ) ○題一九二六及

題三六五 十一月十三日 水戸殿直仕入國產物賣捌方の事、

覺

水戸家直仕
入國產の賣
捌

水戸殿直仕入國產物賣捌方の_(同上)、此度取締相立、試いた_(同上)先、先右に内粕干鰯、寒天草、紅花紙
類等、大坂表に爲差登、堂嶋新地三丁目_(同上)に有之_(同上)の水戸殿用場_(同上)に取扱、其筋と_(同上)問屋共へ手拂

相成、右代金在來に爲替等_(同上)に組入、品と取斗の趣_(同上)に付、一統其旨を存、已來右用場_(同上)に拂出の荷
物_(同上)に分、無危踏取引可致ひ、尤其余彼方領民共_(同上)に相廻_(同上)の荷物を、不正_(同上)に品_(同上)に付、決_(同上)め引受_(同上)申
敷_(同上)ひ、
右と通其筋と_(同上)問屋商人共等へ可_(同上)申置事、
(同上)

丑十一月_(同上) ○南組惣年寄の副書
日付は十三日なり、

補遺 八四 十一月十九日 莫大_(同上)に御用途被爲差_(同上)湊_(同上)の間、奇特_(同上)に志願有_(同上)之面_(同上)の、家持借屋

人_(同上)に不拘、銘_(同上)と勝手_(同上)に上金可_(同上)申立_(同上)事、

上金の諭示
國恩を報う
るは此時に
在り
上金を欲す
る者は家持
借屋人を論
ぜず申出づ
可し

莫大_(同上)に御用途被爲_(同上)湊_(同上)の處、浦賀表に異國船渡來、前後御見合も無_(同上)之御入用、重_(同上)と不容易御儀_(同上)
に付、是迄御用金相勤_(同上)の面_(同上)と其外にも上金_(同上)と義、於御役所重_(同上)と厚御諭有_(同上)之_(同上)、實_(同上)に奉恐
入_(同上)の義_(同上)の、當地_(同上)に儀_(同上)を四方_(同上)に大洋遠く、異船等_(同上)に義_(同上)も遙_(同上)に嚙承_(同上)り_(同上)而已_(同上)に、安穩_(同上)と土地柄
に有_(同上)之、就中外_(同上)に場所_(同上)を_(同上)譯_(同上)も違_(同上)ひ義_(同上)に有_(同上)之、奉報御國恩_(同上)の義_(同上)を今此時_(同上)にて、此度御呼出被
仰諭_(同上)ひ者_(同上)に限り_(同上)の譯_(同上)の無_(同上)之、尤此頃右御諭_(同上)の義_(同上)を及承、上金願出_(同上)ひも有_(同上)之の間、奇特_(同上)に志願
有_(同上)之面_(同上)の、家持借屋人_(同上)に可_(同上)抱儀_(同上)も無_(同上)之、銘_(同上)と勝手_(同上)に可_(同上)申立_(同上)義_(同上)に有_(同上)之、全躰諸株御解放_(同上)
相成_(同上)ひも、物價_(同上)と義_(同上)を_(同上)下_(同上)と爲_(同上)を思召_(同上)ひ義_(同上)、又右_(同上)に可_(同上)却_(同上)る物價_(同上)不引_(同上)下_(同上)に付_(同上)あせ、諸仲間再
興被_(同上)仰出、それは皆安民御仁惠_(同上)を_(同上)出_(同上)の處_(同上)に有_(同上)之の間、深難有奉存、仲間_(同上)と_(同上)申合_(同上)ひ共上金願立、
偏_(同上)に報國_(同上)の義_(同上)を重_(同上)し_(同上)の様有_(同上)之度、ケ様_(同上)に御時節_(同上)に不_(同上)申上_(同上)ひあり、可_(同上)申上期_(同上)も無_(同上)之と存_(同上)ひ條、於
町_(同上)と年寄_(同上)を厚_(同上)く可_(同上)被_(同上)申諭_(同上)ひ、以上、

但、書付出の、西寄會所にて可有持參、尤上金當年相納の義こと無之の、心得迄相達置の

○圖二四〇八及圖二四〇九を見よ

掛 惣 年 寄印

十一月十九日

十一月廿一日 上様將軍宣下御當日方 公方様を奉稱し事、

上様御事、將軍宣下御當日より、公方様を可奉稱ひ、

右に通從江戸被仰下り條、此旨三郷町中可觸知の也、

丑十一月 形日付は廿一日なり、

因幡

十一月廿五日 米津越中守殿卒去に付、鳴物停止し事、

米津越中守 政懿、玉 殿今曉死去に付、

郷町中可相觸ひ、

丑十一月廿五日 御觸書判形帳に、南組惣年寄 信 濃

同日 順慶町五丁目山田屋儀三郎支配借屋船橋屋徳松悻傳兵衛外壹名、孝心奇

特成者に付、并木津川町上荷船乗善助外卅五名、難船助遣ひに付、夫に御褒美被

下り事、

順慶町五丁目
山田屋儀三郎支配借屋
船橋屋徳松悻

傳 兵 衛

孝子傳兵衛
に錢を賜ふ

右傳兵衛義、兼る實躰成とのこゝろ、兩親に意に不背相仕、父徳松義近年病氣に取合、家内多に
あ追々及困窮の義を、傳兵衛心配をせし、仕覺の職業に精ヲ出、其身を万々慎宜、父病氣介
抱爲行届、兩親安心のせし様仕向、弟妹等に慈情ヲ竭ひ段、孝心奇特に付譽置、鳥目三貫文
差遣ス、

山本町紙屋彌兵衛借屋
総屋喜兵衛嫁

孝女きくに
錢を賜ふ

右きく義、麴町塩屋小兵衛娘のこゝろ、文政十亥年書面喜兵衛悻佐兵衛女房に相成、舅姑大切の
せし、食物万端心ヲ付、夫佐兵衛義兼る病身なる、商賣向難出來に付、家裏并得意先掛合等引
請、同人介抱藥用爲行届罷在、佐兵衛義養生不叶、拾四ヶ年以前相果、葬式相應相營の後も、
極老の舅姑、并實母の義も極老の及老衰、打臥居に付、近辺同借屋に内借受、是又前同
様大切に介抱のせし、孝老を竭、娘孫等をも慈愛を加へ、大勢に家内を致養育、其身の龜服を
着相稼、家賃銀等も無滞相渡、身分慎方宜相聞に付譽置、鳥目五貫文差遣ひ、

木津川町 上荷船乗 善 助 市 右 衛 門 甚 助 江ノ子嶋西町 上荷船乗 虎 吉 直 吉

御觸及口達 嘉永六癸丑年

十二月四日

(同上)

南 圖五九四 十二月六日 將軍宣下相濟ひ爲御祝儀、公家衆御馳走御能被仰付事。

將軍宣下相濟ひ爲御祝儀、去廿五日公家衆御馳走御能被仰付ひ、最早鳴ゑの有之ひる不苦趣

こひ、此以後鳴物御免ゝ觸者有之間敷ひ、右ゝ通從江戸被仰下、條、此旨三郷町中可觸知ゑの也、

丑十二月六日 信濃 因幡

圖五九五 十二月十二日 將軍宣下諸御禮無殘所被爲濟事〇體表圖八九五に同じ

圖三八七 同日 大佛殿修理銀貸付所代り事、

妙法院御門跡家來

横山 伊織

右伊織義、堂嶋中壹丁目豊嶋屋庄兵衛支配借屋大津屋安兵衛方止宿、大佛殿御修理銀貸附取扱

居ひ處、此度同借屋富田屋彌三郎方を貸附用所ニ相成、伊織義前同様貸附方取扱ひニ付、町中

序觸ゝ義〇圖三三〇・三四三九・及二四四一を見よ、

〇前令と共に、町中家持の承知判形日付は十二月十二日なり、

圖五九九六・五九九七 〇圖九及一〇に同じ、

圖三三八八 十二月十六日 門松注連繩等を忍、こゝろ一取、或り押寄貴掛儀仕間敷事〇圖九

補遺 八七 同日 ろくと穴打道中双六、辻寶引ゝ類禁可ヤ事〇圖三〇

圖三六九 十二月十九日 上金儀、小前ゝ者共をヤ勸ひ儀致間敷事、

口達

此度不容易御用途被差湊ひ付、當表身元宜相聞ひ町人共々、上金儀義論趣及傳承、外町人

共中合、亦銘壹人立、右御用途に御差加ひ志願を以、上金儀義追願出ひ者一統奇寄特

事ニひ、然ル處右口ニ内ニを、其所ニ年寄共等心取違、身元ニ厚薄ニ不抱、小前ゝ者共々も

一般ニヤ勸、金銀爲差出、上金ニ内ニ差加ひ分も有之哉ニ粗相聞ひ、左ひあり一躰ニ論ニ趣

意ニも相振、如何ニ至付、右様ニ類決差加ヤ間敷ひ條、是等ニ處町ニ年寄共待々弁別致し、

取斗可ヤひ、

一前書ニ次第ニ付、町ニ小前ゝ者共其旨を存、上金ニ加りひこひ不及ひ、

右ニ趣三郷町中不洩様早ニ可ヤ通ひ事〇圖八二

丑十二月 日付は十九日なり、

圖三九〇 十二月廿二日 西高津新地九丁目若狹屋幸次郎外二名、盜賊差押ひニ付、大寶寺

町年寄八幡屋伊兵衛外壹名、役儀出精相勤又ハ忠勤を竭ひニ付、并安治川南四丁

目上荷船乗友七外九名、難船助遣ひニ付、夫々御褒美被下事、

若狹屋幸次郎 越中屋嘉兵衛 近江屋兵助

御觸及口達 嘉永六癸丑年

二〇八七

將軍代替御祝儀能興行

大佛殿修理銀貸付所の變更

小前の者に上金を迫る勿れ

盜賊を逮捕せる若狭屋幸次郎外二名に錢を賜ふ

役儀出精の年寄八幡屋伊兵衛に銀を賜ふ

鹽屋宗七の忠勤を賞し錢を賜ふ

其方共儀、盜賊を差押、所^(奇)のヤ合、召連訴出^(奇)の段、兼^(奇)觸渡^(奇)趣相守、寄特^(奇)義^(奇)ニ付、爲

十二月五日

八幡屋伊兵衛

右^(奇)者義、年寄役勤方宜、町入用減方心を用ひ、公事出入可及義と、成丈不事立様取斗、其外寄特^(奇)取斗い^(奇)の段相聞ニ付譽置、銀壹枚差遣^(奇)、彌此上可相勵^(奇)、

京橋貳丁目

塩屋万次郎別家手代
同町右万次郎借屋

右^(奇)者義、菊屋町河内屋伊兵衛忤^(奇)の、幼名宗吉と^(奇)、五十五ヶ年以前寛政十一未年、書面方次郎四代以前彌兵衛時代奉公ニ在付、實跡相勤^(奇)の付、三代已前彌十郎時代、別家爲致^(奇)の趣再度中聞、へ共、店方無人^(奇)の折柄^(奇)の連及辞退^(奇)の付、三十六ヶ年以前文政元寅年、商賣元手銀と^(奇)て三貫五百目貫請、父^(奇)右伊兵衛支配借屋^(奇)爲致^(奇)別家貫、瀬戸物商^(奇)の相始、其後^(奇)の^(奇)主家へ通勤罷在^(奇)の處、廿五ヶ年以前文政十二丑年、右彌十郎致病死、付、死跡先代万次郎改名彌兵衛儀、幼年^(奇)の家事向万端引請^(奇)の處、自宅^(奇)の掛隔有^(奇)之、主用難行^(奇)の付、書面^(奇)の丁内へ致變宅、養子貫請、渡世向爲相任置、主家へ無怠通勤罷在^(奇)の處、十七ヶ年以前天保八酉年、右彌兵衛義致病死、

其後居宅并掛屋敷共及類焼、其砌當主万次郎儀當才^(奇)の、一旦身上向^(奇)の抱^(奇)の付、此者深く致心配、家事向等都取締爲行^(奇)の付、居宅懸屋敷共普請出來立、當時^(奇)の掛屋敷等買求^(奇)の場合至^(奇)の段、全此者取締宜、幼主を大切^(奇)の守立、平常身分相慎、危難を着^(奇)、物見遊參等^(奇)の罷越、五十年余主家四代忠勤を竭^(奇)の段、寄特^(奇)由相聞^(奇)の付譽置、鳥目拾貫文差遣、此後^(奇)も彌主家を大事^(奇)の可致^(奇)の、

安治川南四丁目
上荷舟乘

友 七 宇 兵 衛 長 次 良 太 三 郎 孫 三 郎

次 三 郎 松 兵 衛 源 七 善 七 市 藏

其方共義、當月九日於安次川口、銀先町和泉屋吉兵衛所持^(奇)の廻船壹艘、強風^(奇)の淺瀬^(奇)の被吹付、及難儀^(奇)の節、相詰罷在、早速右船へ漕付、精^(奇)の相働、危難を助^(奇)ケ遣^(奇)の段、兼^(奇)の渡^(奇)の難船助^(奇)ケ方^(奇)の義、厚相心得^(奇)の故^(奇)の義^(奇)ニ付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣^(奇)、猶此上無油斷心掛、様可致^(奇)の、

丑十二月廿二日

(同上)

十二月廿九日 紀州日前國懸兩社大破^(奇)ニ付、修復爲助成、五ヶ國并御府内勸化御

免^(奇)の事

同日 市中取締宜、火事沙汰も無之、一段^(奇)の事^(奇)の、猶此上無油斷世話行^(奇)の

様可致^(奇)の事

御觸及口達 嘉永六癸丑年

難船を救助せる友七外九名に錢を賜ふ

安政元甲寅年

觸五九九 正月 東海道小田原宿外八ヶ宿・中山道守山宿・奥州道中喜連川宿・申州道中白野宿

外二ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割増ニ事○圖五七九九及六二〇四を見よ

觸六〇〇 正月八日 南鐐壹朱銀吹立ニ事○圖六〇〇四を見よ

觸六〇〇一六〇〇二 ○觸一及二に同じ

補達 八三 正月十一日 手嶋流心學道話ニ儀、隨分ひろまり様、町内カ世話可致ハ事

○補達七五二に同じ

補達 八三九 ○補達八〇五に同じかるべし

達三三三 正月廿九日 攝州曾根崎村和泉屋佐助下人太吉外男女二名、盜賊差押ハニ付、夫

々御褒美被下ハ事、

攝劔曾根崎村

和泉屋佐助下人

太

常

吉

吉

盜賊を逮捕せる下人太吉外壹名に錢を賜ふ

其方共主人ヲ付請、店方預リ居ル内、品被盜取ハ次第、主人へ對テ無テ譯儀々、幼年ニ身分ニあ心配いニス余リ、右女ニ面鉢相覺居カを幸ニ、右ニシテの見當リ、品可取戻ニヤ合、最寄ニ神

社ニ祈願を込、日々參詣いゝ居ル内、主人用向ニ近邊へ連立參ル途中、最前盜相働クもみを見當リ、不取敢引留、盜ニ始末相尋ル亦まとも、口堅ヲ張、逃去掛ル鉢ニ付、取逃ハめと殘念ニ存、力限り猶も引留居ル内、廻リ方役人其場を通リ合、召捕ル仕儀ニ至ハ段、幼年ニシテこと健氣成いゝ方、密特ニ儀ニ付、爲褒美鳥目貳貫文差遣ス、
十二月廿九日

尼崎町貳丁目

鴻池屋百助下女

其方儀、盜心懸ハものを捕押ハ段、女ニ身分ニあを健氣ニ儀ニ付譽置、爲褒美鳥目五貫文差遣

○南組惣年寄の副書日付は正月廿九日なり

(御觸書判形帳)

觸六〇三 ○觸三に同じ

觸六〇四 二月六日 南鐐壹朱銀通用ニ事、并切賃ニ事○圖六〇〇〇を見よ

觸六〇五 二月十一日 東海道伏見宿外三ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割増ニ事○圖五八〇二及六二〇九を見よ

觸六〇六 二月十四日 道中通日雇請負仲間再興ニ事、

去ル寅年株札并問屋仲間組合ヲ唱ハ義停止相成ハ節、道中通日雇請負仲間も差止ヲ渡置○圖四九一を見よ、然ル處今般問屋組合等再興被仰出ハニ付、道中通日雇受負仲間ニ義も同様ヲ付、諸事前

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九一

盜賊を逮捕せる下婢さふに錢を賜ふ

道中通日雇請負人の再興

人員の制限を解く

通嚴重可相心得、尤夫々名前帳差遣^(出)置^(出)共、株式と申筋に無之の間、人數に増減勝手次第に相心得、雇先^(姓)名并人數出立歸着又ハ渡世替等義、其度毎届出、彌以通日雇^(出)共不法重頭等無之様堅可^(出)付、若相背^(出)ハ、急度可及沙汰段、右請負人共へ申渡、間、一同其旨可存^(出)、

右通三郷町中可觸知^(出)の地、

寅二月^(本令端書に二月十四日御觸とあり)

信濃 因幡

(御觸書判形帳)

同日 四天王寺并山村與助兩支配外^(出)者、井戸普請致間敷事、

口達

四天王寺並山村與助支配外にて井戸堀業を營むを禁ず

三郷家作手傳井戸堀兼職^(出)の共、往古々四天王寺配下^(出)者、御用役^(出)廉^(出)に付^(出)、山村与助支配^(出)の^(出)處、右兩支配外^(出)者、於市中井戸堀普請手掛^(出)の^(出)も有之、御用役差^(出)に節致混雜^(出)由相聞^(出)の間、右支配外^(出)の^(出)井戸普請同職^(出)に義致間敷^(出)、

寅二月^(御觸帳に年寄の副書日付を十四日とす)

(同上)

三月八日 三州岡崎六所大明神社頭其外大破^(出)に付、修復爲助成、七ヶ國并御府内

勸化御免^(出)の事

同日 京都正東山若王子祈禱札相對配札^(出)の事、

京都正^(東)本山若王子配下年行司、御池通三丁目

寶積寺

京都若王子祈禱札の配

右若王子者御代々様御由緒有之、永代御祈禱被仰付、大峯葛城^(兩)支嶺參籠修行致、御撫物并御札を勿論、年々御星祭御札をも献上^(出)の^(出)儀、右星像^(出)の^(出)儀ハ毎歲彫刻^(出)の^(出)儀、道場へ安置^(出)の^(出)儀、處、右道場并諸堂社及大破^(出)に付、修復爲助成、當寅年正月々來ル申年十二月迄七ヶ年^(出)の間、祈禱^(出)の^(出)儀、大坂三郷町中寺社とも、右寶積寺を以配札^(出)の^(出)儀、間、御免勸化^(出)の^(出)儀、違ひ、右配札^(出)の^(出)儀、間、右^(出)趣無急度三郷町中^(出)に申達可置^(出)の^(出)儀、

寅三月^(八日)

(御觸書判形帳)

三月廿九日 安治川南四丁目万次郎外廿四名、難船助遣^(出)の^(出)儀、夫々御褒美被下

此事

安治川南四丁目

同所北三丁目

同所上貳丁目

同所北三丁目

上荷舟乘

万次郎

市

外次郎

外壹人

藤

外七人

吉

上荷舟乘

外三郎

外四人

難船を救助せる萬次郎外廿四名に錢を賜ふ

右^(出)者共義、當正月廿五日同廿六日當月四日、於安治川口、廻舟四艘強風^(出)の^(出)儀、淺瀬^(出)に被吹^(出)付、爲手當万次郎徳三郎外十三人へ五百文宛、市次郎外壹人藤吉外七人へ再度相働^(出)の^(出)儀、壹貫文宛差遣^(出)ス、

三月廿九日

(幕令)

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九三

三九六 四月八日 京都大火ニ付、米穀材木板類、其外諸色直段高直ニ致間敷事、

口 達

京都大火に
乗じ諸色直
段を騰貴せ
ずしむるを禁

去ル六日京都大火ニ儀ニ付、右ニ付於當表米穀始メ材木板類、其外都る諸色直段猥ニ高直ニ不
相成様、銘々可相慎ム、若徳用ニ迷ヒ、非分ニ賣方いふ者有之趣相聞ハル、急度可令沙
汰ハ、

右ニ通三郷町中不洩様可ヤ聞ハ事三〇四二

寅四月〔八日〕

〔御觸書判形帳〕

三九七 四月 天滿天神末社正遷宮ニ付、寄進ニ品持參ハ者共心得方ニ事、

口 達

天滿天神末
社に寄進す
るに當り花
美に裝ふ可
からず

諸社正遷宮寄進物ニ義ニ付、寛政六寅年以後追々相觸ハ趣も有之ハ處、此節天滿天神末社正遷
宮ニ付、寄進ニ品花美ニ取傍、又右ニ事寄、風躰を替、市中横行踊歩行ハ族も有之哉ニ相聞、
取締も拘リ、且ハ京都大火御所向炎上ニ折柄可憚處、無弁別所業ニ付、右躰ニ義無之様、町
役人共ハ借屋住末ニ迄篤々可ヤ聞事二二六〇及三〇四二

寅四月〔前令と共に、町中家持の承
知判形あれども日付を闕く〕

〔同上〕

三九八 四月十日 火ニ元入念可ヤ事、

口 達

火ニ元ニ儀ニ付ハ事、兼々觸達置ハ趣も有之、銘々可入念義勿論ニハ得共、此度京都大火ニ付、

火の用心

彼地々當表へ入込ハ事ノ多有之哉、自然混雜ニ紛、籠略ニ儀無之様、別ハ火ニ元入念、諸事
心ヲ付可ヤハ、

右ニ趣三郷町中末ニ迄不洩様可ヤ聞事三〇四二

四月〔北組惣年寄の副
書日付は十日なり〕

〔御觸帳〕

三九九 四月 東海道四日市宿困窮ニ付、人馬賃錢并渡船賃錢共割増ニ事三〇四二

補觸 一五三 四月 東海道四日市宿困窮ニ付、人馬賃錢并渡船賃錢共割増ニ事三〇四二

八及六二一
一を見よ、

四〇〇 五月朔日 石谷因幡守殿參府ニ事、

石谷因幡守儀被爲召、四五日ニ支度ニ參府ニ事、

〔御觸書判形帳〕

五月朔日〔南組惣年寄の副書日
付は同日未中刻なり〕

補觸 八三〇 同日 佐々木信濃守様御月番被成御勤ハ事、

信濃守様、今朔日ハ御月番被成御勤、間、此段承知可有之、以上、

〔同上〕

五月朔日未中刻

四〇一 五月十三日 天滿東寺町專念寺相對勸化ニ事、

今日通達町ニ年寄被召呼、安井九兵衛様ハ左ニ通被仰渡、

口 達

天滿東寺町淨土宗專念寺、當七月愼徳院様御一周忌、來卯七月三回御忌ニ處、御佛殿并土塀破

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九五

天滿專念寺
相對勸化

石谷穆清轉任
町奉行川村
修就

關六〇三 五月廿九日 石谷因幡守殿御普請奉行被仰付、跡御役川村對馬守殿被仰付の事、石谷因幡守事、御普請奉行被仰付、跡御役川村對馬守^{○修就}被仰付の、此旨三郷町中可觸知との也^{○關五九二一及六〇四七を見よ、}

寅五月廿九日^{○南組惣年寄の副書付は同日午下刻なり、}

信濃

(同上)

關三〇二 五月 鈴木町年寄大坂屋貞次郎外壹名、役儀出精相勤のこ付、夫々御褒美被下の事、

鈴木町年寄

大坂屋貞次郎

天滿鈴鹿町年寄

綿屋甚右衛門

右との共儀、年寄役勤方宜、町入用減方精と心を用、公事出入可及儀有之の節の、可成丈ヶ不事立様取斗、諸事取締方行届、其外^(奇)寄特成心掛ヶ有之由相聞、一段の事こ付譽置、銀壹枚宛差遣の、

寅五月

(同上)

關六〇三^{○例關五}

六月朔日 地車太鼓、糸りとの等、飾又と藝者と衣裝、自今木綿晒を可相用事、并右届出の上及見分の事^{○關二〇三}

關六〇四

六月六日 東海道品川宿外六ヶ宿困窮のこ付、人馬賃錢割増の事^{○關五八一〇及六二二四を見よ、}

關六〇五

同日 甲州道中玉川渡船并同道中淺川川越賃錢共割増の事^{○關五六二}

補遺 八三

六月十六日 一昨夜の地震に、住居も難成程致破損の家屋、并命こ拘の程に致

怪我の者、都々可届出、且右こ付浮説等々出間敷事、

地震
大破の家屋
及重傷者あ
らば届出づ
可し
浮説を唱ぶ
る勿れ

一昨夜地震有之の處、破損に人家又と納屋等も無之哉、尤怪我人等も有之の趣に届も無之の、^{(拘)(程)}右聊に義斷の不及の得共、相損住居も難成處、并怪我いゝ命こ抱の様とのを、都々御番所并惣會所に可相断の、一昨夜の後追と地震薄く相成、世上安心と躰相聞の、右こ付銘と彌火に元又と盜賊等と用心無怠様いゝ、且浮説や出、惑ひに相成、無譯恐怖等いゝの儀無之様可被申聞、以上、

(御觸書判形帳)

寅六月十六日申下刻

關六〇六

六月廿八日 紀州熊野三山貸付金と事、

紀劔熊野三山貸附金と儀、天保七申年十二月相觸置^{○關五二〇}の處、攝劔兵庫津におゐる貸附と義、先差止に相成のこ付、同所東出町渡海屋治衛支配借屋貸附所引拂、貸附先返納方の儀、當表江戸堀四丁目貸附所にお取扱のこ付、此旨可存の、
右と通三郷町中可觸知との也、

寅六月^{○南組惣年寄の副書付は廿八日なり、}

對馬

信濃

(同上)

御觸及口達 安政元甲寅年

二〇九九

紀州熊野三
山貸付金
兵庫貸付所
の廢止

役儀出精の
年寄大坂屋
貞次郎外壹
名に銀を賜
ふ

父民助を經師職渡世致し、者こひ得共、近年痲症こゝ世事と營もいふ兼、母とくゝの盲目こゝ處、兼幼年と節とり兩親と意こ不背、家事賄煮焚萬端引請相營、手習稽古等こ罷越居の砌も、日こ食用煮焚致し、刻限こ必立歸取賄、兩親へ孝養を竭、其上をく盲目相成の後、兩人と妹を出産いふ節、心配いふし、別あ季と妹出産およひ頃、最早とら拾三歳こ相成居の付、不一形心を用、産婦と介抱万端厚取斗、兩人と妹追と成長いふこ付あき、愛憐を加へ世話いふ、其余衣類洗濯等迄爲行届、右躰父民助痲症こ前後不揃と義も有之、母をくも盲目而已からば、余病こ足痿相成の付深心配致し、兩親と藥用介抱を勿論、時こ寄兩便と世話等迄も重と爲行届、殊こ民助儀生得酒を好、病發後を別あ儀、晝夜酒給度趣申出、其余日用と儀も右こ准、不都合と振舞も有之、其上をく前段と通身體自由不相成のこ屈シ、兩人共折と無譯事共申罵の得共聊不逆、父こ酒買調、程能相勸、母をす歴、氣鬱不致様仕向、家業と義も相應と職人を相雇、渡世取續罷在、内、民助追と快方職業こも取懸りの様相成、折柄、又の痲症再發致し、家内と日間を考、自身と刃物を以咽喉を搔切の儀有之節も、早速取留、其筋とをのへ申告、奉行所に訴出貫、檢使と上、疵養生申付請の付あき、猶又醫療無手扱抱い、且右療治代諸雜費等、をら身分こ取あき一時こ難賄金高、素方貧窮こ行届兼ねを、危急と場合不失、身賣奉公いふの成共相償の由申、所とをのへ相歎、取替貫の厚手厚こ醫療を盡、疵平癒爲致、其後右取替受の雜費償と内入とて、身貧と中か錢調達いふ、家主方へ持行の程こ誠實を盡、其身と行狀相慎、物見遊參等こ罷越、父母と看病不忘、妹共をも憐

と、近頃民助痲症甚敷、及深更無謂表口戸外に駆出、何角高聲こ罵杯いふの儀聞と有之、度毎をらも付添出取看家内へ連歸、晝夜精と介抱いふ、痲症と父盲目と母の孝行を竭、段、心妙寄特成をのこ付、其段江戸表へ申上の處、此度依御下知爲御褒美銀七枚被下之、右と趣三郷町中不孝不實とをの共教戒こも可相成、間、一同へ申聞可置の事、

七月○南組惣年寄の副書日付は六日なり、

(同上)

補遺 八三三 ○補遺七九五に同じかるべし、

關六〇七 七月十七日 慎徳院様一周御忌御法事、○體裁關三三九〇に同じ、

關二〇八 七月十九日 御用途へ御差加と志願を以上金願出の段、願と通被成御聞届の事、

近來莫大と御用途被差湊、別あ海防と御入用を前後御見合も無之事と由、奉恐入の儀こ在之、右こ付銘と御治世御恩澤と浴し、安逸と渡世相營の冥加を弁ひ、此御時節柄と徒こ及見聞居の義の無之筈こ付、當表身元宜敷相聞の町人共者勿論、右差續の者等身分相應上金願出の、御繰合と一端こも相成、町人共おのくも規模相立、上下体裁相整の儀こ付、去冬以來右と者共呼出、追と事實申諭の趣及傳承、何きも御國恩と難有儀と同様こ付、右御用途に御差加と志願を以、其方共始夫と丁内家持借家人共と内、或は會所屋敷家守丁代共等追と申合、又と壹人立、是又身分こ應、員數相進上金願出の段、一統寄特と儀こ付、被爲御賞譽、右上金願と通被成御聞届の、

御觸及口達 安政元甲寅年

家持借屋人の上金出願と其許可

右に通從江戸表御下知を以て渡り條、此旨承知いし、一統難有存、夫々丁内限上金願ともの共に不洩様可申候、尤上金當年分納比合等儀を、猶取調し上追お可及沙汰候○圖二四二・圖二四三・圖二四四・圖二四五見よ、

(御觸書)

補達 八三 七月廿八日 川村對馬守様、來月御月番被成御勤候事、對馬守様、來月御月番御勤被成、間、此段承知可有之候、已上、

寅七月廿八日

北組惣年寄

(御觸帳)

補達 八四 閏七月朔日 町内中合願出上金、此度御聞届被仰渡候に付、町別取集置候に不苦候間、納頃合不滞様可致事、

今日通達年番町々年寄西寄合所に被召呼、惣御年寄中左に通、
通達年番年寄に相達候覺

去秋以來年寄々被申立候、町内中合願立上金、此度御聞届被仰渡○圖二四〇候上、町別取集置候に不苦候、追お御沙汰有之、頃合、納方不滞様可被相心得、尤金に申立候分候、壹兩代六拾五匁積を以相納候義に有之、右上金申立有之候町々、爲心得組合限可有通達候事、

壬七月朔日

(幕令)

圖六〇八 閏七月十四日 川筋淀候事○圖一

上金は町別に取集置候も差支無し

金目にて届出の分は銀目に換算せしむ

圖六〇九

閏七月十五日 線姫君様御平産、御女子御出生候事○圖四七

圖六〇〇

同日 天保度五兩判金、當寅十月を限通用停止被仰出候間、所持候者早、

圖六〇一

差出引替可申事○圖五二・五六及六〇二七を見よ、

圖六〇二

○圖六

補達 八五

閏七月十八日 火事沙汰遠かり候へ共、猶無油斷火に用心可被申候事、

火事沙汰遠かり候に付、猶又無油斷様用水汲溜火消道具修復等心掛、夜番人無怠様申付、火用心厚可被申候事○圖二九九八及圖三〇〇

閏七月十八日

南組惣年寄

(御觸書判形帳)

圖二四九 閏七月廿七日 白米小賣直段儀、米相場に應じ、正路に直段に相改賣出可申候事、

口達

此節堂嶋米相場、追々引下ケ方に相移候趣に候得共、町々搗米屋共内候、元附と割合を申立、小賣直段引下ケ方○圖に及遅候儀も不少哉に粗相聞候、元來搗米屋共小賣直段儀を、米相場高下に釣合、不相當に義無之様賣出可申候勿論に義に、既米相場相進候時、元附に不拘速に直上致し、下落候節を差向容易に直段引下ケ不申段、如何に仕方候、總お小賣直段高直候、身薄候儀を共難儀いふ候筋に付、能く相弁、早々正路に直段に相改賣出可申候、

御觸及口達 安政元甲寅年

二一〇五

火の用心

白米小賣直段は堂嶋米相場に準據す可し

尤夫々所々もの共も厚く心を付可致世話の、自然此上にも心得違、搗米屋共内不正路と取斗致ひもの有之様子相聞ひり、急度可及沙汰の條、兼め其旨可存ひ、

右と趣三郷町中搗米屋共の別あり義、其外一統不洩様早々可申通度

○圖二二〇 日脱

京都正東山若王子配札人之事

京都正東山若王子室家來

此度相廻りひもの 今 井 衛 門

御池通三丁目

寶 積 寺

右兩人、内配札いゝ事

○圖二三九 四を見よ、

○圖六〇三

八月六日 長崎廻寒天并世上食用、角寒天、尼崎又右衛門へ一手取締復古中渡り

長崎廻寒天并世上食用角寒天に儀、大坂町人尼崎又右衛門一手取締仕來ひ處、去ル寅年都お株札問屋仲間組合等停止、諸色素人直賣買勝手次第相成ひ御趣意を以、右一手取締と廉差止、長崎廻寒天に儀の同人へ賣上請負付、食用角寒天の製作人共の勝手と賣出可申旨、追お相觸置

尼崎又右衛門の長崎廻寒天及食用角寒天取締を復す

○圖五六〇 然ル處此度諸問屋組合等再興相成ひ付あり、右に准し、長崎廻寒天并世上食用角寒天とも、如元右又右衛門の一手取締復古中渡り間、一統其旨を存、諸事去ル寅年以前と通相心得、不取締と義無之様可致ひ、

右と趣三郷町中可觸知ものを、

對 馬

信 濃

○圖六〇三 八月十日

東海道六郷川渡船役困窮に付、渡船賃錢割増し事

○圖六〇二

九月十八日

異國船相見へ共、決り驚中問敷、且右に事寄、諸色直上致問敷事、

口達觸

此節近海に異國船相見の趣に心得とも、當地海岸の遠淺なる、異船可乗寄場所に無之、自然解

等を以乗入の儀の、向て手配も有之、決り爲乗入不申手筈に、間、右沖合に異船相見の敷、又

の湊先等に滯船致し共、決り驚騒キ申問敷の勿論、猥に浮説等不申觸、銘々妻子召遣ひもの

迄も諸事心得違無之様得と申示、別り火に元入念可申、

一右舳異船近海に相見へ共、事寄、諸商賣諸取引等相滞り義無之様いゝ、諸色直段等引上ケ申

間敷、

右と通三郷町中小前末の迄不洩様「早々」可申開事

御觸及口達 安政元甲寅年

右に乗じ諸色直段を諸貴せしむる勿れ

外船渡來につぎ徒に動搖する勿れ

○南組惣年寄の副書日付は九月十八日酉中刻なり、

(御觸書判形帳)

備忘 八三 九月十九日 異國船近海へ來り沙汰有之に付、米穀其外諸品共買貯の儀致問敷事、

異國船近海に來り沙汰有之に付、御口達○圖二四一を以被仰出の通に儀この處、小前○圖二四二の共白米を買立の儀有之由、全無弁當然を危踏○圖二四三、右躰に所業有之哉に相聞の間、得と申論、米を勿論諸品共買貯の義を、甚以如何と事この間、能く相心得の儀、別末迄と者に、心迷ひ無之、穩に致し罷在、様可被申聞の事、

九月十九日卯上刻

(同上)

同 日 異國船渡來に付、町に騒敷儀を勿論、右見物に船差出の儀仕問敷、并諸廻船入津出船共、聊無危踏諸荷物運送可致事、

口達

此度異國船渡來に付、兼る爲固メ被仰付有之武家人數場所(一)に罷越に付あり、浮説等も可有之哉この得共、右を固メて被差置の儀あり、異國船に儀を願ひ筋有之、渡來いふに義に付、最前相觸○圖二四一を見よ、ひ通、町に騒ケ敷義無之様可致ひ、
一 異國船掛り居の處へ、見物に船乗出に近寄の義あり、決る不相成、問、所役人共嚴重に相制可申ひ、若不相用船差出の儀有之に得共、早に可申出ひ、
一 異國船渡來中、諸廻船入津出船共、聊差滞の義無之筈に、問、安心いふ、無危踏諸荷物運送

外船渡來につき米穀其
他諸品を買
貯ふ可から
ず

外船渡來と雖も動搖
する勿れ

外船見物の
船を出す可
からず

廻船積荷物
の運送を危
れ

畏縮する
勿れ

外船碇泊中
殊に火の元
を嚴重なら
しむ

外船見物の
船を出すを
禁ず

可申ひ、

右に通三郷町中不洩様早に可申通事○圖六〇二五及圖二四一四を見よ

寅九月十九日 付は同日亥下刻なり、

(同上)

備忘 八三 九月廿日 此節異國船渡來中に付、別火に用心厚可被申合の事、

今日火消年番町に年寄西寄會所へ被呼出、惣御年寄永瀬幾代助様、左に通被仰出ひ、夏以來火事沙汰無之に付、先づ月無油斷様達置○圖八三の處、其後も同様有之に、彌大切に心得、焚火并さら灰風呂等、仕舞方迄も格別入念、用水汲溜番廻り方等無怠様申付、風吹の夜の猶更に事この、殊に此節異國船渡來中、出火有之にあり別る混雜に儀に付、火に用心に義の厚く申合置可被申の事○圖八三九を見よ、

寅九月廿日 幕令に載する所、辭句本令と相違ありども、趣旨相同じきを以て略に従ふ、

火消年番
小

西 町印

(同上)

備忘 八三 九月廿五日 異國船見物に船等差出申問敷事、

此度大坂近海に異國船渡來に付、武家人數場所に出張有之に付あり、浮説等も可有之哉この得共、右を爲御固被差置の儀あり、異國船に儀を願ひ筋有之、致渡來の儀に付、町に騒ケ敷義の勿論、諸商賣諸取引向一同相滞の義無之、致安心、諸廻船入津并出船共、無危踏諸荷物運送可致、尤異國船掛り居の處に、見物に船乗出に近寄の儀あり、決る不相成旨等と義、最前大坂町中并最寄海岸附村、新田等へ、嚴重相觸置○圖二四一を見よ、ひ得共、其後も漁船又の沖合働に小船等こ

御觸及口達 安政元甲寅年

二一〇九

乘、見物罷出ひものも有之、或近國海岸附し場所か、追と見物船乗出ひものも不少趣相聞、以し外し事この條、前段中渡し趣相弁、決あ見物船等差出中間鋪ひ、自然此後も不相用様子相聞ひ、嚴重可し付、間、其旨を存、夫と所役人共も心を附、相制しひあも是又不相用ひ、其段其向とに可し出ひ、

右し趣三郷町中に可觸知もの也、

寅九月〔廿五日〕

對馬

信濃

(同上)

圖三四三

九月廿九日

御池通五丁目河内屋重右衛門支配借屋阿波屋菊松、孝心奇特成者こ

付、御褒美被下ひ事、

御池通五丁目

河内屋重右衛門支配借屋

阿波屋菊松

孝子阿波屋菊松に錢を賜ふ

右菊松儀、當七拾貳歳こ相成ひ母はふと兩人相暮罷在、兼あ實躰成ものこあ、幼年し砌り袋物仕立職仕覺、父仁衛儀三拾五年以前、文政三辰年致病死ひ後、右仕覺ひ職業出精い、母はふを相養ひ罷在、同人義七年已前申年不慮こ致怪我、身躰自由難相成、故、菊松儀攝あ難波村骨接療次いしひの方へ、はふを脊負連行療治受、爲致平愈ひ程こ、大切こ相仕に罷在ひ處、五ヶ年已前戌年か菊松眼病相煩、職業等出來兼、及困窮ひこ付、心配い、居宅表先に

雜菓子店差出ひ得共、右等し義こあと日用し凌方も難相成ひ故、按服導引習覺、右を稼こいしし、聊宛貫請ひ賃錢を以、母つるを養ひ居、内、同人儀去こ子年六月頃か病氣差發、起臥も難相成、處、種と藥用い、好ひ食物等も困窮し中か相調爲給、介抱爲行届ひこ付、漸と及快快服、由、然ル處自分ひ次第こ眼病相重、終こ盲目相成、同町こ別宅罷在ひ阿波屋龜吉とやのを弟こあ、同人も至あ貧窮こ相暮、子供等も有之、家内し育方も行届兼ひ得共、右躰母兄し難儀致心配、家賃錢ひ龜吉か相送り、心を付罷在ひ得共、素か充分し賄等力こ難及ひこ付、菊松義身分を慎、不相替母へ孝養を竭、神妙成者し由相聞ひこ付譽置、鳥目五貫文差遣、猶此上孝養を竭、行狀相慎、渡世出精可致段中渡ひ事、

○南組惣年寄の副書日付は九月廿九日なり、

(同上)

圖三四四 十月七日

異國船出帆し旨注進有之ひ間、平日し通産業可相營事、

口達

最前相觸二を見よ、ひ安治川沖こ碇泊罷在ひ異國船し儀、去ル三日同所出帆、彌大洋に出拂い、旨注進有之、間、安心致し、彌平日し通産業可相營と勿論、諸船出入諸取引等、彌以差滯儀無之様可致ひ、

右し趣三郷町と末と迄不洩様早と可し聞ひ、

(同上)

圖三四三

十月九日

異國船渡來こ付、度と御教諭被成下ひ段、御禮上の事、

御觸及口達 安政元甲寅年

二一一

外船出帆せるを以て平業を營む可し

昨日三郷年番町、東寄會所に被召呼、惣御年寄中、御差圖有之、左に通御禮奉之上、乍憚口上

今度近海に異國船渡來仕ひ付、追、御教示御觸〇四二四一三被成下、御奉行様晝夜御苦勞被爲在、町人共一統安心仕、家業相營、御憐愍難有仕合奉存、此段乍憚各様宜御禮被仰上可被下、以上、

但、右御禮、節、火、元、義矢張是迄、通、不相弛様可被相心得旨被仰渡ひ付、此段乍序御達之上、

嘉永七寅年十月八日

郷中惣代

南組年番町、
北組年番町、
天満組年番町、
寄印
寄印
寄印

惣御年寄中
乍恐口上

今度近海に異國船渡來仕ひ處、町心得方度、御教示御觸被成下ひ付、一統安穩家業相營、町人共末迄冥加至極難有仕合奉存、將又右異國船退帆仕、遠く大洋をも出拂、段、御觸書〇二四一四を見よ、趣彌安心仕、恐多も奉仰御威徳、末々迄重疊難有仕合奉存、依之乍恐御禮奉之上、以上、

嘉永七寅年十月八日

郷中惣代年番町

長濱町年寄	西信町年寄	内淡路町年寄	錦屋町年寄
板屋卯右衛門	倉橋屋勝兵衛	多田屋永四郎	尼屋定次郎
瓦町年寄	玉澤町年寄	肥後島町年寄	京橋六丁目年寄
高安杏山	布屋七郎兵衛	大坂屋喜兵衛	米屋又兵衛
南農人町年寄	左官町年寄	柏原町年寄	北久寶寺町年寄
綿屋吉兵衛	近江屋嘉兵衛	河内屋平七	伊賀屋助七
平右衛門町年寄	孫左衛門町年寄	炭屋町年寄	鹽谷町年寄
灘屋仁右衛門	和泉屋吉右衛門	豊嶋屋新右衛門	泉屋理右衛門
小西町年寄	天満空町年寄	南森町年寄	船大工町年寄
田中屋新右衛門	大坂屋清兵衛	八尾屋新助	神崎屋源助
橋通町年寄	橋通町年寄		
布屋七郎兵衛			

御奉行様

(同上)

十月廿八日 安堂寺三丁目榎屋榮治郎借屋辰巳屋久兵衛同居娘九弟、同人弟久三郎平治郎、孝心奇特成者、付譽置、九弟へ御褒美被下事、

安堂寺三丁目
榎屋榮治郎借屋
辰巳屋久兵衛同居娘
九弟
同人弟
久三郎

御觸及口達 安政元甲寅年

二二一三

市民上書して外船渡來の際安穩に業を營めるを謝す

市民上書して外船の無事退去を謝す

破損家屋及
査傷者の調
火の元及盜
賊の取締を
嚴ならしむ

一此間取調○圖八三、後損所怪我人等、尙亦相調可被申聞ひ、
一町廻り方別○圖八三の嚴重こいさし、火元盜賊等用心專一○圖八三可申合ひ、
右通被仰渡の間、猶又有無共御年寄中名印○圖八三上、明日晝迄○圖八三當惣會所へ差出可被成、以上、
但シ、半紙貳ツ折、

寅十一月六日酉上刻

年番
尼ヶ崎町壹丁目

觸六三

十一月七日 古金銀引替所儀、猶又來卯十月迄、是迄○圖八三通被差置○圖八三事、五兩判

觸三四

同日 此度地震津浪○圖八三あり、品と拾取○圖八三者有之、可届出事、附、明地面○圖八三ニ

觸三四

野宿致○圖八三者へ、施行致度存○圖八三者、無遠慮可申出事、

口達

津浪につき
流失品を拾
得したる者
は届出づ可
し

此度當表地震津浪○圖八三ニ付、船荷物流れ○圖八三の金銀板材木等○圖八三類、其外何○圖八三こよら○圖八三拾ひ取○圖八三の有之
の、早○圖八三奉行所○圖八三に可訴出、自然川内○圖八三を立廻、見當○圖八三板材木類○圖八三ニ極印○圖八三を打、又○圖八三書付等○圖八三
ゑ、或拾取○圖八三の隠置○圖八三の杯有之趣相聞○圖八三の、早速召捕、吟味○圖八三上嚴重可申付○圖八三、
但、町○圖八三火元○圖八三儀入念○圖八三の様、一昨四日○圖八三申聞置○圖八三事、得共、猶又心○圖八三を付、晝夜○圖八三不○圖八三限重
入念可申付○圖八三事、
右○圖八三趣三郷町○圖八三と端○圖八三迄不渡様早○圖八三可申通○圖八三事、

寅十一月七日

避難の貧民
に施行せん
と欲する者
は申出づ可
し

惣御年寄永瀬様方御演舌○圖八三の被仰渡、地震○圖八三ある家等崩れ、明地面○圖八三ある野宿○圖八三いゝ罷在、極
難澁○圖八三ものへ、施行○圖八三いゝ度○圖八三の有之、西寄合所○圖八三に可被申出○圖八三事、
○圖八三御觸書判形帳

觸六〇

十一月八日 東海道舞坂宿新宿日光道中宇都宮宿美濃路萩原宿困窮○圖八三ニ付、人

馬賃錢并今切渡船賃共割増○圖八三事

補達 八二

十一月九日 施行申立○圖八三類、都○圖八三西寄會所○圖八三へ可被申出○圖八三事、并溺死○圖八三者○圖八三家

内親類知音方○圖八三罷在○圖八三者、取調可申事、

施行申出の
者は西寄會
所へ届出づ
可し

強地震適合○圖八三の男女、引續○圖八三高汐○圖八三溺死○圖八三いゝもの不少、然ル處一昨七日施行○圖八三儀○圖八三ニ付相達
置○圖八三處、出役場所○圖八三に内粗相片付○圖八三もの有之、且其場所○圖八三へ申出○圖八三ある、右殘家内等追○圖八三取
調中、旁及混雜難行届○圖八三の間、施行申立○圖八三類、都○圖八三西寄會所○圖八三に可被申出○圖八三、殘家内并極難○圖八三もの
は、追○圖八三伺○圖八三上割渡遣可申、間、其旨可被相心得○圖八三、
一溺死○圖八三いゝもの○圖八三家内親類知音方○圖八三罷在○圖八三、可被相斷、尤世話行届、様可被心得○圖八三、
○圖八三御觸書判形帳

○南組惣年寄の副書日付
は十一月九日酉中刻なり、

補達 八四

十一月十日 安治川木津川兩川口○圖八三ニ於て、致溺死○圖八三の乗船○圖八三者、右○圖八三者共○圖八三家内○圖八三ニ

あ親類知音方○圖八三罷在○圖八三、者并極難澁○圖八三者等、組合町○圖八三ニ相調、有無共可申出事、

御觸及口達 安政元甲寅年

御奉行様

年

寄連印

圖四一八 十一月廿三日 米切手通用事、

○前文圖二五 右、通明和貳酉年相觸、趣を以、文化十貳亥年にも再觸○圖一四二 差出有之處、其後年月相立、忘脚^(却)の又の不相弁をも有之哉、近來入替と唱、米切手質物に取、儀を不安心に存、追々取引差扣ひをも有之哉、粗相聞、條、右様と儀決あ無之筈、間、前段觸渡と趣厚相心得、米賣買に携ひをのり別あ儀、其外一統無危踏取引可致旨、三郷町中不洩様早々可申通事、

寅十一月^{○本令端書に十一月廿三日御觸とあり}

(同上)

圖四一九 十一月廿九日 松屋町表町年寄梅屋張兵衛外七十七名、役儀出精相勤又の難船助遣ひに付、夫々御褒美被下事、

松屋町表町年寄

梅屋張兵衛

役儀出精の年寄梅屋張兵衛に銀を賜ふ

○原本以下六十八名を擧ぐ、本文の員数と合はざるのみか、排列の順序も不明なれば是なり

安治川南三丁目上荷船乗竹

藏

難船を救助せる竹藏外七十六名に銀を賜ふ

右の共儀、當十月十一日、同十六日、同十九日、同廿一日、同廿二日、同廿四日、於安治川口、艀船七艘強風なる淺瀬に被吹付、及難儀の節、相詰又を邊に居合、早速右船に漕付、危難を助ケ遣ひ段、兼難船助ケ方の儀、厚相心得の故に儀に付譽置、爲手當竹藏外貳拾九人の鳥目五百文ツ、喜兵衛外拾五人に同七百文宛、善四郎外拾八人に同壹貫文ツ、新七外拾壹人に同三貫文宛差遣ひ、猶此上無油斷心掛の様可致ひ、

寅十一月^{○北組惣年寄の副書日付は廿九日なり}

(御觸書)

圖四二〇 十二月朔日 火元入念可申事、

口達

火元入の儀を兼相觸^{○圖四一八四}に付、銘と用心いふの義、得共、頃日打續風烈敷處、既昨廿九日大火有之に付、彌無油斷入念可申、當秋已來異國船渡來又の地震津浪等變事も有之、此上大火あとの有之にあり、以て外に儀に付、町々廻りこの并町役人共見廻り方不及申、丁内裏借屋壹人暮の迄、銘と厚心付、庵末に儀無之様、別あ火元入念可申事、右に通三郷町中末迄不洩様可申事、

寅十二月^{○南組惣年寄の副書日付は朔日酉中刻なり}

(御觸書判形帳)

圖四二一 十二月六日 宮門跡方其外諸名目金銀、當表貸付願濟に口と貸付方事、

宮門跡方其外諸名目貸付金銀借り受の節、彼是失費^(符)をも有之、其上返濟滞り砌、其筋に被呼出、往還等こゝ多分の雜費相掛り、難澁相迫、俱々欠落いふものも有之哉に相聞、右と元

御觸及口達 安政元甲寅年

二二二

十一月廿九日の大火

火の元の取締を嚴ならしむ

其貸付方
(一) 利子
(二) 證文認
料
(三) 口入料
(四) 人足賃
其他諸雜費

(五) 鈞印

前記以外の
諸名目金銀
を口入し又
は之が爲に
旅宿用所等
を貸與す可
からず

上金の納入
を命ず

上金納入の
方法

預金銀の取
付商品仕込

來貸附に趣意無弁別借受の故、右躰に及仕宜の義あり、於當表貸付願濟に向て、

一 妙法院宮御抱大佛殿修復料金貸付 ○圖二三八

一 青蓮院宮御祠堂金貸付 ○圖二二九

一 知恩院宮御用意金貸付 ○圖二二九

一 靈鑑寺宮御廻向料并祠堂金貸付 ○圖二二四

一 光雲寺祠堂銀貸付 ○圖二三八

一 泉涌寺祠堂銀貸付 ○圖五七九

一 靈源寺祠堂銀貸付 ○圖二三五

一 高野山大徳院修復料金貸付 ○圖一二三

一 紀伊殿用途金貸付 ○圖五六五

一 紀伊熊野三山修復料金貸付 ○圖六〇一

一 紀伊藏屋敷の取扱、江戸芝鑑連社修復料金貸付 ○圖一八〇

一 尾形藏屋敷の取扱、江戸芝天光院修復料金貸付 ○圖一五九

右の外諸名目金於當表に不取扱、右貸附に向り、最初借り受、節利足先引の勿論、借受證文

貸付所の認遣のひとも、紙筆墨料等の無之、且右貸付の内こと、立入町人共手次を以貸渡、

向も有之由に、共、都の口入料等の不爲差出、并濟方の儀に付、貸付所へ被呼寄出、共、人

足賃其外諸雜費出財の無之事あり、且當表貸付所におもく、他所支配場のものに金銀貸渡、

節、鈞印又の銀印杯と唱、金銀借受不、當表にの證文に加印致、義間、有之哉に相聞、右躰に義の決有之間敷筋に付、其段貸付方にものにも中渡、條、右に次第相心得、借請、をの共返濟不差滞の様、嚴重に濟方可致、尤他所の願濟に諸名目金、於當表貸付の義の無之、間、口入を勿論右貸付取扱、をのこ、旅宿用所等貸、儀、決る致間敷、若利徳に拘り、右に携の歟、(御願濟)願濟の外、内この差加へ金等いとしの有之におもく、吟味に上急度可令沙汰の、

右に通三郷丁中可觸知の他、

寅十二月 ○本令端書に十二
月六日御觸とあり、

對馬 信濃

(同上)

口達 同日 上金に儀此節上納の事、并右日限の事、

此度當表丁人之内、身元宜の并に右に差續の其外一統、銘、壹入立又の同志の等の等々合、御國恩上金に義、願に通御聞届相成、付ある、當寅年納の分、先月中爲相納可やに處、地震高浪等の中及混雜の趣にお見合置、此節上納可や付、間、其旨可存、尤右納に義、正銀に限らぬ、手形にお相納のあも不苦、且一時に納方差支、年割を以上納相願の分も、是又最前御聞届相成有之上を、旁以上納も致し易く、差向金銀融通等に差障、義決る無之處、何角を浮説に觸し、亦右に拘泥を、當然入用にも無之預金銀を勿論、兩替等へに入込金銀過急に及

御觸及口達 安政元甲寅年

二二三

仕癖に泥、仕入し時節に向ひあも、兎角糶賣糶買と類出來、商内物同様ニ成行の儀の、全價
 甲乙の事發の儀にあり、既に町方内にも旧家に向、價に不拘、御趣意守り、先前か仕來の通賣
 物不致故、旧來の百姓不相替請入罷在、何分近村に向の小便肥一無之、外肥あるを作付生た
 かさく、不斗天保度遠近在及出入の節も、其譯奉中上、處、被爲聞召譯、近村に向の直請場取
 村、又遠在に向の買村等立譯、和談相整、近在一同難有奉存、然ル處家所混雜仕のあも、手
 當肥に相放、百姓の難澁^(難勢)盡、迎も此儘あり御田畑相續に相拘、歎ケ敷奉存、得共、下
 甲乙無之様平等に取締行届かなく、不恐願奉歎願、何卒格別御憐愍ヲ以、攝河數万の百姓
 恐御救被爲成下、下尿同様の振合を以、壹人別價貳百五拾文直平均に御沙汰奉頂戴度、然ル上
 の先方任届、先前か掛來、品々、御定被爲成下見積りを以、町在應對次第、先方勝手相成、
 品掛込の様成行の、百姓一統肥手差支永續仕の義と、御厚恩に程、生々世々難有仕合可奉
 存、以上、

嘉永七寅年十月廿七日

御奉行様

乍恐口上

右願人 彌三右衛門

○以下四名は前掲に同じ、

肥小便請入村年番

請合 惣代 共

小便壹人分の平均直段を二百五十文に定めんとす

小便直段を二百五十文と定めたる理由

從來の掛物直段の不同

小兒六歳以下は計算に入れず

一 肥小便價直平均の義、先月廿七日奉歎願の處、今日私共御召出の上、願の筋口、御糶に付、乍
 恐左に奉中上、
 一 願面ニ壹人前價貳百五拾文に相立、譯柄御糶に御座、此儀の壹人前壹ヶ年小便出荷凡七荷、
 直段四季平均百荷に付當時五拾目位、代銀壹人分三匁五、内百文明ヶ子人足賃、引残り貳百
 五拾文に見積に御座、
 一 掛物價の儀を、餅白米壹人前壹升を貳升五合位迄、錢壹人前百文を貳百五拾文位迄、實綿壹人
 前百五拾目を貳百五拾目迄、操綿四拾目を六拾目迄、香の物大根三拾本を五拾本位迄、
 右の通品、不同掛來り、混雜難澁仕の付、前書直建元附貳百五拾文平均奉願上の義に御座、
 外に茄子をたる兩品掛入の代錢百文斗の品に御座、此兩品相止、貳百五拾文見究相場直段に
 御座、付、矢張下尿同直段の品柄に奉存、尤價替物の品を年々相場を以、平均直段見積を以、
 掛込に心得に御座、
 一 小兒の儀を是迄壹人前七才已上掛來り、六歳以下、無代に心得に御座、
 右口御糶に付、有躰奉中上、何卒右の段御聞濟被爲下、の、難有奉存、以上、

川上金吾助様御代官所入組
住吉社領攝劔住吉郡島村庄屋

彌三右衛門

脇坂淡路守殿御役知
河羽天田郡横堤村年寄

喜右衛門

御觸及口達 安政元甲寅年

御奉行様

乍恐口上

一私共今日被爲御召出、攝河近村貳百三拾三ヶ村之内、肥小便直請場取村、年寄惣代共々肥小便請入家所價直平均歎願儀被仰渡、奉畏、然ル處組合町一同相談等仕付、來卯年二月十五日迄御日延奉願上、何卒御開届被爲成下、ハ、難有奉存、以上、

- 三郷火消年番町、内
- 北組瓦町貳丁目年寄
- 高安 杏山
- 京橋六丁目年寄
- 米屋 又兵衛
- 南組北久寶寺町一丁目年寄
- 伊賀屋 助七
- 天満組南森町年寄
- 八尾屋 新助
- 川上金吾助殿御代官所
- 攝河住吉嶋村
- 彌三 右衛門

(同上)

觸六〇三〇 十二月十四日

觸六〇三一六〇三三

觸三四三三 十二月十六日

觸三四三三 十二月十六日

年號改元爲安政旨、御弘有之ハ事〇體裁圖一六〇五に同じ、門松注連繩等を忍々こつ取、或ハ押ハ貫掛ハ儀仕間敷事〇圖一

補遺 八四五

同 日

十二月廿七日

口達

禁裡造替に
つき米穀其
他諸色直段
を贖貴せし
む可からず

本年市中の
静謐なりし
を賞す

米穀并諸色直下儀也、兼取締付置〇圖二一五ハ處、當夏京都大火ハ砌、猶又米穀始メ材木板類其外都諸色直段、猥ニ高直ニ不相成様、銘々可相慎旨口達觸六〇三三九、差出ハ付、非分ハ賣方ハ多ハ義有之間敷、得共、此節禁裏御所御造營ニ付、江戸表方諸役人被差登、諸國ハ諸職人等相集ハ付、當表方米穀始メ諸色直段可積登間、尙又賣直段ハ不相當儀無之様可致、若徳用ニ拘、違背ハ多ハ有之趣相聞、ハ、急度可令沙汰ハ、

右ハ趣三郷町中端迄不洩様可ヤ聞、事、

(御觸書判形帳)

觸三四三三 十二月廿九日

觸三四三三 十二月廿九日

觸三四三三 十二月廿九日

觸三四三三 十二月廿九日

觸三四三三 十二月廿九日

觸三四三三 十二月廿九日

觸三四三三 十二月廿九日

御觸及口達 安政元甲寅年

觸六〇三五 同 月 東海道沼津宿外拾三ヶ宿、中山道板橋宿外拾貳ヶ宿并河渡川、甲州道中
小原宿外三ヶ宿、人馬賃錢船賃共割増之事○觸五八三六及六二四八を見よ。

安政二乙卯年

補達 八四六 正月六日 舊臘江戸表出火有之の事寄、諸色直段引上間敷事、
今日通達町々年寄當郷惣會所へ被招呼、惣御年寄中々左に通被仰渡ひ、

旧臘廿八日江戸表にあり出火有之由、格別之事を無之處、右に亘寄、諸色直段引上不々様、其
筋に者に通置可々旨、組合町に可被相達ひ事、

舊臘江戸出
火につき諸
色直段を諸
貴せしむ可
からず

○寅十二月當番常珍町の
通達日付は正月六日なり、

(御觸書承知印形帳)

觸六〇三六三七 二に同じ、

補達 八四七

正月十一日 手嶋流心學道話儀、隨分ひろまり様、町内々世話可致ひ事
○觸七五
二に同じ、

補達 八四八

同日 ほとんど火大形に無之様可致事○觸八〇
五に同じ、

觸六〇三六 二月朔日

此度勢弱海岸并當地近海爲見分、御勘定奉行石川土佐守○政
平被差遣ひ
に付あせ、無益に失費不相掛様可致事觸
三

觸六〇三九

觸六〇四〇

三月三日 布海苔元草儀、尼崎又右衛門へ一手取締付ひに付、右元草廻着、

和産荒物業
草仲間

尼崎又右衛
門に布海苔
元草の取締
を許す

布海苔製造
方其舊弊と
其影響

自今布海苔
元草は廻着
毎に又右衛
門へ通達す
可し

度毎同人へ致通達、正路に賣買可致事、

布海苔元草不取締(御觸書)有之、右品を賣買仕來ひ當地和産荒物業染草仲間者共、渡世向差支ひ
に付、寒天同様當地町人尼崎又右衛門一手取締世話受度旨、右仲間者共中出ひ趣を以、寒天
同様一手取締等儀、先達中又右衛門願出、取調に上聞届相成ひ處、元來布海苔元草を寒天草
似寄に海草あり、諸國海濱より取揚、諸廻船を以當地に致運送ひ品に付、荷主船頭并廻着問屋
其外一統、又右衛門一手取締儀不相弁ひあり、荷物散乱糶買等に相成、直段引上ひ而已あら
ば、布海苔干職に者共下品に寒天草を打交製ひ流弊も不相止、自然不正に品柄相成、前書和産
荒物業染草仲間者共、右品を買受職業に相用ひ者共迄も、致難儀の旨を以、猶又取締方儀又
右衛門願出の趣も有之、無余義筋に相聞ひ間、前書廻船問屋共の別あり義、其外一統其旨を存
以來布海苔元草廻着に度毎又右衛門に致通達、右元草外向に不致散乱、元附直段不相當に筋を
勿論、糶買ケ間敷取斗等も無之様ひあり、寒天同様又右衛門一手取締儀不相弁、正路に賣買可
致ひ、

右に通三郷丁中可觸知者也○觸二四二
七を見よ、

卯三月○町中家持の承知判
形日付は三日なり、

對馬

信濃

(御觸書承知印形帳)

觸六〇四一 三月六日 去寅十月、遠州榛原郡金谷河原町與次内女房たよを及殺害ひ、忤與右
衛門人相書之事觸

御觸及口達 安政二乙卯年

關六〇三

三月十三日

諸國寺院、梵鐘を潰し、大砲小銃ニ可鑄換旨被仰出の間、銅鐵の

關六〇四

勿論錫鉛硝石等

無之の相濟の品を、右類の製儀、無用の事〇關六〇六

一及關二四
二五を見よ

補達 八咫

三月廿四日

金春八左衛門興行勸進能棧敷代、疊代、木戸札代銀の事、

覺

於天滿天神社内勸進能興行

晴天六日

金春八左衛門

勸進能棧敷
代疊代及木
戸札代

一通 棧敷

代金五兩

一通 疊

代金壹兩三步

一日 棧敷

代金壹兩壹步

一日 疊

代銀貳拾五匁

一木戸札

代銀貳匁

一同三日目五日目

代銀三匁

札賣場

平野町三丁目
札賣場 丹波屋六兵衛

右札賣場所、明後廿六日代銀持參、引替ニ可罷越、尤立方の義ニ付、先例の通疊壹疊ニ付銀壹兩宛、祝義持參可有事、

木戸札を豫
め町々に分
配す

一勸進能の節、木戸入口の札代銀受取の處、混雜の多しに付、近例の通前以丁々の通札相渡

置、興行相濟の上、残り札を以勘定致度の間、持參有之度旨、金春八左衛門に立有之、尤取集

出張所の義を、追おし出の筈の事、

當町疊場所 ぬ 二三 四

但、組合の義ニ付日割の上、

當丁當日 初日 二日 四日 六日

右の通御座、尤木戸札預り有之の間、御越の節會所へ御出可被下、〇關六〇〇

但、初日來ル四月十一日、

關六〇五 三月廿六日 無益の器具ニ銅鐵錫鉛硝石杯を用、或の右等ニ無之の相濟

の品を、右類の製儀、無用の事、

海岸防禦のため、此度諸國寺院の梵鐘を、可鑄換大砲小銃の旨被仰出、右の武備御充實の御趣

意の、此外銅鐵を勿論錫鉛硝石等、何きも必備の品に付、右等ニ無之の相濟の品ヲ、

右類の相製儀の義、自今不相成旨等と義、御觸〇關六〇四 有之の品に付、當表銅鐵錫鉛其

外右類地の多賣買、并細工職渡世の者共、又丹白粉製方硝子職人共、年來に渡世取續方ニ

抱、殊に夫の下職人共、何きも身薄の者共ニ付、別混雜の趣に付、心得方の義伺出、

右を無益の器具小供手遊ひ等ニ、銅鐵錫鉛硝石杯を用ひ、或の右等ニ無之の相濟の品

を、右類の製儀の義を、自今被差止の義に、必用の品を別段の義に付、其段致弁別、夫々

御觸及口達 安政二乙卯年

二二三

既具に銅鐵
錫鉛硝石等
を用ひ或は
他の材料を
代用し得る
ものには是
等を使用す
可からず

梵鐘を以て
銃砲を鑄造
す

差支無之様得々可被示し、

三月廿六日

(同上)

三月廿九日 安治川北貳丁目土荷船乘新兵衛外廿六名、難船助遣ひ二付、夫々御褒美被下し事、

安治川北貳丁目

同所南壹丁目

上荷船乘

上荷船乘

目印山ニ罷在

新兵衛

宇右衛門

平

七

伊

助

權次良

茂兵衛

忠

助

喜兵衛

久三郎

市次郎

郎

万吉

喜兵衛

久五郎

源太郎

庄三郎

郎

清

三七

長七

同重

藏

庄次郎

仁三郎

伊兵衛

助

徳三郎

仁三郎

卯

八

太

平

猪

助

難船を救助せる新兵衛外廿六名に錢を賜ふ

右に者共義、當正月九日同二月廿四日、安次川口おゐる、廻船貳艘強風にお淺瀬へ被吹付、及難義の節、相詰亦の邊に居合、早速右船に漕付、精々相働、危難を助遣、猶又同月十七日御用材筏におゐる積登の節、強風にお御用材所へ散乱におゐるの節も、早速取集の段、兼お渡の義、厚相心得の故に義に付譽置、爲手當鳥目五百文ツ、差遣の事、

三月○次の令と共に、南組惣年寄の副書日付は廿九日なり、

(同上)

三月 寄の副書日付は廿九日なり、

尼崎又右衛門取締寒天草並布海苔元草取扱會所

尼崎又右衛門一手取締寒天草并布海苔元草取扱會所、義、瀬戸物町大津屋平兵衛支配借屋借請、會所ニ取補理の趣に付あり、以來右元草廻着、度毎、又右衛門宅に申出のあを手遠儀も有之の間、右會所へ向相達可申事、

三月

(同上)

同日 青蓮院宮貸付所、事、

尾張坂町

泉屋源兵衛家守

山田屋榮藏

青蓮院宮貸付銀取扱所

青蓮院宮貸附取扱所

○南組惣年寄の副書日付は三月廿九日なり、

(同上)

三月 瓦町貳丁目京屋伊八借屋田中屋武左衛門白焔硝製法願出儀、聞届の事、

口達書

瓦町貳丁目

京屋伊八借屋

田中屋武左衛門

田中屋武左衛門に白焔硝の製造を許す

右武左衛門義、焔氣有之の土を以、白焔硝製法に義願出、聞届の間、同人義土買取に義申談の、無危踏相對可致事、

卯三月

(同上)

御觸及口達 安政二乙卯年

二一三五

四天王寺並山村與助兩支配外の者、家作手傳ニ雇入間敷事、
四月二日 口達

三郷家作手傳職ニ者共、往古々四天王寺配下ニシテ、右ニ者共一同井戸堀兼職ハ多ク付、御用役ニ廉ニ付テ、山村与助致支配ハ處、近來他國ハ當表ニ致出稼、右職業相働ハ者多、當表職分ニ者共業躰差障ハ而已カラズ、井方御用役差ニ差支ニも相成、混雜ハ多ク趣相聞ハ間、向後右支配外他國ニ者、家作手傳ニ雇入ハ義致間敷ハ、
右ニ通三郷町中不洩様可申通事○圖二三九

卯四月○南組惣年寄の副書日付は二日なり

四月四日 去寅八月八日夜、江劔高嶋郡小荒路村百姓平七ハ疵爲負逃去ハ、同人(同上)

悴金藏人相書事圖二三三

四月十二日 川村對馬守殿參府事、

川村對馬守義被爲召、四五日ニ支度ニ參府事、

四月十二日

觸六〇四四○觸六〇四四に同じ (御觸書承知印形帳)

觸六〇四五 四月十六日 京都栴座福井作左衛門栴改仕法事○圖五七三に同じ、但し、文化八未年中同様に同じ、弘化四年同様に同じ

觸六〇五〇 同日 川村對馬守様御出立事、

川村對馬守様、今朝御出立被成ハ間、此段承知可有之ハ、以上、
卯四月十六日 南組惣年寄 (御觸書承知印形帳)

觸二四三三 四月廿五日 往來又ニ建家續明地面等ニシテ、子供翫ニ花火焚申間敷事、
(御觸書)

花火の取締
道路並建家續明地に於テ子供花火を翫ぶを禁ズ

御城近辺ニ勿論諸御役所辺、其外川内并縱令川幅廣キ所ニシテ、大造ニ花火を揚、川添ニ人家屋根等ニ火ニ子落散ハ義有之、火ニ元無覺束ハ間、右躰ニ義有之ハ、急度可令沙汰旨、毎々申渡、猶又以來建家有之場所ニシテ、花火線香ニ外決ハ無用ニ可致ハ、尤川幅廣キ所ニシテ、先ニ申渡ニ通相守、大造成花火揚ハ義致間敷ハ、万一不用者有之ハ、急度可令沙汰旨、天保十三寅年相觸置○圖五四九ハ處、近來往來又ニ建家續明地面等ニシテ、子供翫ニ花火焚ハ由相聞、火ニ元不用心、且ハ無益ニ費ニ付、右躰ニ義無之様所役人共相制、取締可申ハ、自然等閑ニ相聞ハ、所役人共迄モ嚴重可令沙汰ハ、
右ニ通三郷町中端ニ迄モ不洩様可申通事○圖八一

卯四月○南組惣年寄の副書日付は廿五日なり (同上)

觸二四三三 四月廿六日 賣賣屋并旅籠屋渡世ニ者、賣女屋同様ニ渡世致間敷事、

去ル亥年間屋組合ニ義、都前ニ通再興申渡ハニ付、賣賣屋并旅籠屋等ニ仲間ニ加リハ者共

御觸及口達 安政二乙卯年

賣賣屋并旅籠屋にて賣

女屋同前の
業を營むを
禁ず

内、天保以前に悪弊に習ひ、又も其外にも心得違、表口この正路に商業書顯の懸行燈を出、
内實の賣女屋同様、渡世の多し者も有之哉、風聞有之、隱賣女に紛敷、不屈に至、全夫と仲
間組合并所と者共不取締故に義、以て外に事この、彌右躰に族有之哉、所と者共の勿論、仲間
組合と者共致穿鑿、心得違と者共有之の早と爲相止、若不用者有之の所と者共可訴出の、尤
組と者も繁と爲相廻のこ付、及見聞の、無用捨召捕、所と者共迄も嚴重可及沙汰の條、後悔
不致様可相心得の、

右と通三郷丁中端迄請負地等迄も、不洩様可申聞の事（圖二二八）

卯四月町中家持の承知判
形日付は廿六日なり

觸六〇四 五月八日、東海道馬入川渡船役村に困窮に付、渡船賃錢割増の事（圖五八四五及
六二六八を見よ）

觸六〇七 五月十日、川村對馬守殿長崎奉行被仰付の事、（圖六〇一二及
六三一九を見よ）

川村對馬守長崎奉行被仰付の、此旨三郷町中可觸知の也（圖六〇一二及
六三一九を見よ）

卯五月十日、（御觸書承知印形帳）

觸六〇六 五月十二日、奥州道中白川宿困窮に付、人馬賃錢割増の事（圖五八五〇及
六二八七を見よ）

觸六〇九 五月廿九日、久須美六郎左衛門殿大坂町奉行被仰付の事、（圖六三四
三を見よ）

久須美六郎左衛門（御觸書承知印形帳）

卯五月廿九日、（御觸書承知印形帳）

觸二四三 五月晦日、上本町貳丁目年寄和泉屋忠兵衛、役儀出精相勤のこ付、御褒美被下

川村修就轉
任

町奉行久須
美祐衛

役儀出精の
年寄和泉屋
忠兵衛に銀
を賜ふ

事

上本町貳丁目年寄

和泉屋忠兵衛

右と者義、年寄役勤方宜、丁入用減方心を用、其外寄特と致取斗の段相聞のこ付譽置、銀壹枚
差遣の、彌此上可相勤の、（同上）

觸六〇五 六月朔日、地車太鼓・絲りもの等と飾又と藝者と衣裝、自今木綿晒を可相用、右届

出と上及見分の事、并地車行逢の節、曳違と唱、事六ヶ敷中掛間敷事（圖二一七）

觸二四三 七月朔日、七夕短冊竹精靈祭の品と、川とへ捨間敷の、尤右品とと、公儀御入用

補達 八五 七月六日、千日參七墓廻と者、鉦太鼓を携の儀可爲無用の事（圖七九
五に同じ）

觸六〇一 七月十日、暑氣と節とを心得共、無油斷火と元入念可申の事（圖二二二九
と大差なし）

觸六〇三 七月十七日、慎徳院様三回御忌御法事、夏（圖六〇
一七に同じ）

觸六〇五 七月廿九日、天滿伊勢町年寄天滿屋安兵衛外女壹名、役儀出精相勤又の貞節を竭

御觸及口達 安政二乙卯年

ひこ付、夫、御褒美被下事、

天満伊勢町年寄

天満屋安兵衛

役儀出精の
年寄天満屋
安兵衛に銀
を賜ふ

右安兵衛義、年寄役勤方宜、町入用減方精と心を用、公事出入可及義有之の節を、可成丈ケ不
亶立様取斗、諸事取締方行届、其外寄特と取斗等相聞ひこ付譽置、銀壹枚差遣ひ、

安堂寺町五丁目
大文字屋重兵衛支配借屋
池田屋彌三郎女房

貞婦いわに
錢を賜ふ

右ひり義、夫彌三良長と眼病相煩、終に盲目同然に相成、兼るに渡世難相成ひ處、此者義手職
を勿論、乍女青物荷ひひあ所と賣歩行、格別出精相稼、右躰病身と夫を大切に介抱、萬事爲行
届、貞節を竭し、身分慎方も宜、寄特成者、由相聞ひこ付譽置、鳥目五貫文差遣、此上貞心を
竭、行狀相煩、渡世出精可致旨や渡、

卯七月○南組惣年寄の副書
日付は廿九日なり

(御觸書承知印形帳)

○圖六〇五 八月十四日 松平和泉守殿松平伊賀守殿就病氣、願に通御役御免、帝鑑間席被仰

付ひ事○體裁圖五一五四に同じ、尙圖五七
八五・六二九・六一六七を見よ

○圖六〇五五

○圖六〇五六 八月十九日 久須美六郎左衛門殿諸大夫被仰付、佐渡守と相改ひ事、

久須美佐渡
守

久須美六郎左衛門事、去月廿八日諸大夫被仰付、佐渡守と相改ひ、此旨三郷町中可觸知をのぞ
○御觸帳に下札あり、圖
四五二六の下札に同じ、

卯八月十九日

信濃

(御觸書承知印形帳)

○圖六〇五七 九月四日 奥州道中白坂宿困窮に付、人馬賃錢割増に事○圖五八五九及
六二九二を見よ

○圖六〇五八 九月十二日 薩茹が江戸表へ御取寄被成ひ異國形に船、此度國元へ御差返相成

ひこ付あを、當表近海へ相見へ共、決あ驚や間敷事、

惣年寄中が通達町に、左に通被仰渡ひ、

一先達を江戸表へ御取寄に相成ひ、薩茹に作立ひ異船作りし船、此度國元へ御差送被成ひこ付
あり、自然大坂近海邊に相見へひ亶も難斗ひ得共、決あ可驚譯に無之事、

(御觸書承知印形帳)

○通達當番南笠屋町の通
達日付は九月十二日なり、

補達 八五 同日 久須美佐渡守様御到着に事、

佐渡守様、今日當表御到着被成ひ間、此段承知可有之の、以上、

九月十二日

(同上)

○圖六〇五九 九月廿六日 東海道熱田宿外二ヶ宿日光道中大澤宿甲州道中駒木野宿外壹ヶ宿

中山道碓氷川、右宿と并川場困窮に付、人馬賃錢船賃錢川越賃錢共割増に事○圖
五八

六三及六二
九七を見よ、

○圖六〇六〇 同日 高野山大徳院貸付所代りに事、并妙法院宮貸付所増置に事、

御觸及口達 安政二乙卯年

二一四一

薩藩製造の
外國形船舶
近海を出没
するも騷
擾する勿れ

高野山大徳院
高野山大徳院

高野山大徳院貸付所、南新町壹丁目鷹野屋覺兵衛宅にあり、大石富三郎上田仲次郎取扱來り處、此度

南問屋町

綿屋重三良代判林兵衛借屋

京屋福松

右福松方より貸附取扱の事、

北渡邊町

河内屋清兵衛借屋

大和屋忠一郎

妙法院宮貸附所

右宮家士

横山伊織

右貸附所堂嶋中壹丁目に有之り處、右忠一郎方にも貸附取扱の事○圖二三八七及二四七九を見よ、

○前令と共に、南組惣年寄の副書日付は九月廿六日なり、

○圖六五九 十月七日 本壽院殿御事、向後本壽院様と可稱事、

本壽院殿○堅子、家定生母御事、向後本壽院様と可稱旨、先月廿三日被仰出の段、從江戸被仰下り條、此旨三郷町中可觸知をの地、

○町中家持の承知判形日付は七日なり、

佐渡

信濃

達三四〇 十月八日 江戸表地震大火に事寄、諸色直段引上り間敷事○體裁圖二二五二に同じ、

圖六〇六〇 十月十二日 本寺并名器時鐘の外、釣鐘一同 公儀へ可差上事、并萬石以上領

内寺院に分のり其所に領主に鑄換、御料所、寺社領方石以下知行に分のり、於公儀鑄換被仰付の事○圖六〇四二を見よ、

圖六〇六一 十月廿日 堀田備中守殿連判に御列并上座被仰付の事○體裁圖四〇六九に同じ、尙圖五五九二及六一六七を見よ、

達三四二 十月廿八日 妙法院宮貸付所代りし事、

堂嶋中壹丁目

豊嶋屋庄兵衛支配借屋

富田屋彌太郎

是迄有之り妙法院御門跡貸付所引拂

右彌太郎方に相詰り

妙法院家士 横山伊織

醫師 大澤宗二

南渡邊町

糠屋新兵衛支配借屋

岩井屋政七

右同斷此度取扱所

右政七方へ前書伊織宗二相詰り○圖二三八七及二四七三を見よ、

御觸及口達 安政二乙卯年

○南組惣年寄の副書日付は十月廿八日なり、

(御觸書承知印形帳)

補達 八五

同日

久須美佐渡守様、來月御月番被成御勤の事、

卯十月廿八日

南組惣年寄

觸六〇六

十月 今般蝦夷地御開拓ニ付、彼地在住の上、御國益ニ可相成儀取立度存の者

(御觸書)

共、其筋へ可願出事

觸六〇三

十一月朔日 壹分判銀手摺分、歩合引方等請取、引替中間敷の、尤全手摺極印

不見分の、壹朱銀引替遣、燒分とは是迄通に定法に歩合引方を以、引替可遣の

間、銀座へ差出引替可事

觸六〇六

○觸六〇六に同じ、八日

達三四三

十一月四日 土屋采女正様御忌服の事、

土屋采女正様御母御實方御叔母様、堀丹波守様、御病氣の處、御養生不被爲叶、

去月廿三日御死去被成の付、半減の御忌服御請可被成處、日數相立の付、今日御遠慮被成

の旨被仰出の間、此段承知可有之の、以上、

十一月四日

南組惣年寄印

(御觸書承知印形帳)

觸六〇五

十一月十四日 川筋掟の事

達三四三

十一月十六日 禁裏御遷幸の事、

口達

來ル廿三日卯の刻、禁裏遷幸、准后○雅子、號新待賢門院御移徙御治定の由の、一統此旨を存、同日町

騒ケ敷義無之様致し、別火の元入念可の、

右に通三郷町中不洩様可事、

卯十一月○町中家持の承知判形日付は十六日なり、

下ケ紙

火の用心

夏以來火更無之、町の中合行届の義を相見へ、追々風烈の時節相成の付、此上番人廻り方

用水汲溜等厚可被合の事、

觸六〇六

十一月廿日 金銀具の儀、公儀并武家一統に於ても、格別減省相成の間、其余に

觸六〇七

同日 古金銀引替所の儀、猶又來辰十月迄、是迄に通被差置の事、五兩判金通

觸六〇六

同日 古金銀引替差出方の儀、道法に遠近に不拘、爲手當増歩被仰付の事

及六五六三を見よ、

達三四四

十一月晦日 安治川南三丁目上荷船乘徳三郎外四十七名、難船助遣の付、夫々

御觸及口達

安政二乙卯年

禁裏遷幸に
つき町中静
痛たる可し

御褒美被下事

安治川南三丁目
上荷船乗

德三郎	松次郎	利兵衛	善次郎	惣左衛門
甚三郎	友七郎	利八郎	政次郎	市三郎
庄次郎	孫七郎	權次郎	善兵衛	喜兵衛
與之助	忠助	牛六郎	爲右衛門	榮次郎
鶴松	芳助	吉爲藏	爲藏	與三郎
長兵衛	安五郎	富藏	清次郎	彌助
源七郎	嘉兵衛	吉兵衛	文三郎	庄三郎
太助	清次郎	幸三郎	吉三郎	庄次郎
庄三郎	重次郎	善次郎	嘉兵衛	宇右衛門
伊助	宇兵衛	與兵衛		

難船を救助
せる徳三郎
外四十七名
に錢を賜ふ

右に者共義、當九月十九日同十月廿一日當月三日同九日、於安治川口、廻船八艘強風なる淺瀬へ被吹付、及難義の節、相詰又と遊に居合、早速右船の漕付、精々相働、危難を助ケ遣ひ段、兼難船助ケ方と義、厚相心得の故と義に付譽置、爲手當徳三郎外九人に鳥目壹々五百文ツ、兼太三郎幸三郎外貳拾壹人に同壹々文ツ、庄三郎權次郎喜兵衛外拾貳人に同五百文ツ、差遣

ひ、猶此上無油斷心掛の様可致ひ、

卯十一月○南組惣年寄の御書日付は晦日なり

觸六六九 十二月九日 日光道中粕壁宿中山道洗馬宿外壹ヶ宿困窮に付、人馬賃錢割増に事(御觸書承印形帳)

○觸五八七三及六三二〇を見よ

觸六〇七〇一六〇七一○觸九及一〇に同じ

觸二四五 十二月十六日 門松注連繩等を忍々こつと取、或は押あ貫掛の儀仕間敷事○觸二九九に同じ

觸八五 同日 ろくと穴打道中双六辻寶引と類禁可事○觸三〇に同じ

觸六〇七三 十二月十七日 山城攝州兩國と穢多共、白革師と買廻方差妨の儀致間敷事、右と通去ル酉年六月觸渡○觸五八一の處、其後新規船宿相始ひもの、或右觸渡と趣致志脚ひもの、(却)等有之哉、又と近頃及流弊、船頭并船宿をの等々合、當表に積登の鹿革類、着船以前、川筋冲手等に穢多共出張、猥々賣買いさし、白革師共買廻方差支の由相聞、以て外に事なは條、早と相改、以來前段觸渡と趣嚴重相守、右躰不埒と賣買方の勿論、白革師とも買廻方差妨の義、決あいに間敷ひ、尤右と趣穢多共にも中渡の間、聊心得違無之様可致ひ、如何と取斗ひ、○觸六三七を見よ

卯十二月○町中家持の承知判形日付は十七日なり

佐渡

御觸及口達 安政二乙卯年

山城攝津兩國の穢多白革師の營業を妨ぐるを禁ず

信濃

(御觸書承知印形帳)

關六三

十二月十九日 神善四郎賣出諸秤之内、銀秤の定直段へ貳割五分増、皿秤の貳割増、千木秤の壹割五分増を以、當卯年々來未年迄五ヶ年之間、引續賣出の事

三四六

十二月廿二日 順慶町五丁目松嶋屋仙之助別家手代同町松嶋屋嘉助外四名、忠勤又の役儀出精相勤の二付、并安治川北三丁目上荷船乘宇兵衛外五十二名、難船助遣の二付、夫々御褒美被下の事

順慶町五丁目
松嶋屋仙之助別家手代

同町

松嶋屋嘉助

右の者義、先代仙助方へ奉公に有付の後、同人病死の由、悴菊次郎事仙助相續の由得共、若年、上病身に付、別家手代松嶋屋彌助店方差配致すの内、此者商賣手馴れに付、万端引受實躰に相勤、仙助母を病氣に節、介抱爲行届、同人病死後打續仙助義も病氣に取合、追々身上不如意に付、主家親類相談の上、奉公人相減、間狭し上此者下人別あり、諸取引見込薄の由別宅の由、仕分銀聊も不貰受、晝夜相詰、介抱等無油斷手を盡し得共、仙助終に病死の由に付、葬式佛事等相應に相營、死跡に仙助嫁と可嫁合積あり、博勞町塚屋文六同居左太吉を養子に貰請、仙之助を爲致改名、此者代判の由、幼主を守立、相續方大切の心掛、僉服を着、

松嶋屋嘉助
の忠勤を賞
し錢を賜ふ

物見遊參等不罷越、身分相慎、忠勤を竭の段、寄特に付譽置、鳥目五貫文差遣の、此後も彌主家を大事に可致の、

卯十二月五日

天満大工町年寄

伊丹屋吉兵衛

立賣堀四丁目年寄

和泉屋源四郎

役儀出精の
年寄伊丹屋
吉兵衛外壹
名に銀を賜ふ

右の者共義、年寄役勤方宜、町入用減方心を用、公事出入に可及義の、成丈ケ不事立様取斗、吉兵衛義の、老母へ孝心を竭、其外一同寄特に取斗の由の段相聞に付譽置、褒美を以て銀壹枚、差遣の、彌此上可相勵の、

卯十二月

安治川北三丁目
上荷船乘

宇兵衛太

吉音次

郎萬

作

目印山に罷在

其方共義外四拾九人、先月十五日同十八日廿七日當月八日、於安次川口、廻船三艘并上荷船貳艘強風の淺瀬に被吹付、及難義節、相詰又を辺に居合、早速右船に漕付、精々相勵、危難を助ケ遣段、兼難船助ケ方義、厚相心得の故に義に付譽置、爲手當宇兵衛外九人共再度相働に付、鳥目壹文、太吉音次郎萬作外四拾人に同五百文、差遣ス、猶此上無油斷心掛

難船を救助
せる宇兵衛
外五十二名
に錢を賜ふ

御觸及口達 安政二乙卯年